第４回 文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の
農村開発に関する国際会議 －2012年10月27～29日－

# 草の根　棚田フォーラム　イン　丹後
# 報　告　書

2013年３月

安藤和雄・中村均司・市川昌広　編

丹後・棚田研究会　京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
高知大学自然科学系「中山間」プロジェクト

# 当事者的意識を共有するために―謝辞にかえて―

突然電気が消えた。当然だが、部屋は真っ暗になった。2012 年 12 月 19 日の時刻は夜の 11 時。京都府南丹市美山町佐々里の民宿「はりま」でのことである。ブータン、ラオス、ミャンマーから各１名の、共同研究者でカウンターパートでもある３名を伴い、他府県の農家出身だが美山町に惚れてＩターンし 30 年近く美山町に住んでいる酪農家のＫさん、外国人のＵさん、民宿のご主人Ｍさん、新聞記者のＴさんとカメラマンのＡさんで会談をはじめ、カメラマンと外国人の２名が退室して、夜を徹しての話が佳境に入った頃のことだった。5 分、10 分、待てども電気は来ない。宿のご主人Ｍさんから、「あそこの電線が倒木にやられたのだろう。紅白歌合戦を見ていたら停電となり 2～3 日電気が来ない暮れもあった」という話が出た。雪の日に長時間の停電が怖いのは、水道管が凍りつつことやファンヒター型の灯油ストーブだと暖房が止まってしまうことだ。特に独居世帯の高齢者の方が心配になるとＫさんが強調した。佐々里の属する知井地区は美山町で最も北に位置し、雪が多い。山陰の気候である。知井地区の家では雪避けの囲いが家のまわりに作られている。雪が多い日の停電は珍しいことではなく、そのために、この地区では、反射板やダルマ型の電気を使わない灯油ストーブが今でも重宝されている。雪下ろしも大切な仕事となっている。

新聞記者のＴさんと私にとって、雪のための停電は始めての経験であった。特に私は 1991 年頃から美山町に通っているが、真冬の雪の降る美山町は初めてであった。美山町の停電を復旧させる関電の担当事業所は綾部にあるというから、綾部から美山町に来るだけでも 1～2 時間はかかってしまうのだ。「冬の雪の時に来なければ、美山町は分からない」という指摘の重みを実感した。翌日、京都市内の自宅に戻った時に、家族に佐々里の停電のことを伝えると、息子が「そんなニュースは新聞にも載ってないし、テレビでもやっていなかったよ。京都で起きたらすぐに取り上げられるのに」と言った。その通りである。京都のような都会で停電が数時間もあれば、新聞やテレビなどのマスコミが取り上げる。しかし、美山町の停電は京都の都会の人には知られない。こうしたことも影響しているのか、中山間地が抱えている問題を、都会の人たちはそれほど深刻には思っていないように私には見受けられる。

中山間地の問題は、すでに 1960 年代には顕在化し、それ以降、さまざまな取り組みがなされてきた。しかし中山間地の村々の過疎化、高齢化は現在急激に進みつつあり、棚田などの耕作放棄地の面積も年を追うごとに増加している。私自身、一般の新聞を読んでいて、こうしたニュースがとりあげられることは少ないと実感している。中山間地に人々がいまなお住んでいるという現実があるにもかかわらず、村の物理的統廃合を積極的にすすめることが必要だという論調（たとえば『撤退の農村計画』＜林ら　2010＞）もでてきている。こうした視点は国家レベルでは「正しい」のかもしれないが、村に住んでいる当事者にとっては、しごく迷惑な話である。こうした意見を耳にするたび、確かに解決の糸口を見つけ出すことが困難な問題であるが、撤退や自然に近い状況に戻すのだからまだよいと言い切ることに躊躇はないのか、と私は問いたい気持ちである。大所高所からの農村計画も大切だろうが、遠回りかもしれないが、村に住んでいる人たちとともに考え行動していく気概がない限り、この問題の解決の糸口は決して見つからないと私は思っている。

私たちは「草の根の農村開発国際会議」を亀岡市保津町で 2011 年 2 月に第 1 回を開催して以来、8 月に山口県阿武町、2012 年 9 月亀岡市ガレリア、そして 10 月 27 日～29 日に丹後で第 4 回を開催することができた。29 日には、京都への帰路、京都府南丹市美山町知井振興会を訪問し意見交換会をもった。この会議には、農業や農村開発に関する共同研究をすすめているバングラデシュ、ミャンマー、ブータン、ラオスなどの国々から大学、政府、NGO などの関係者を招へいし、当該国や会議開催地での農業、農村開発へのそれぞれの取り組みや実践的経験、調査研究報告をお互いに発表し、それを題材に過疎化、離農の問題を相互啓発的に検討してきた。これらの国々でも、過疎化、離農の問題は、顕在化しつつある。困ったことは、こうした問題を、かつて日本の農村開発関係者がそうであったように、農村の生活環境を都市に近づけることで解決できると信じて疑っていないことだ。実は、そのアプローチにボタンの掛け違いがあったことは、自明であろう。どこにボタンの掛け違いが起きたのかについて、私も分からない。しかし、果たして農村開発関係者が、どれだけ村の人たちの声に耳を傾け、そこから村の人たちとともに方策を考えようとしたのかについて、はなはだ疑問である。誰にでも分かり易い経済格差の解消という命題ありきだったのではなかろうか。当事者の問題意識が今まで置き去りにされてきたと言いたいのである。この「過ち」を繰り返してはならない。近年、知井地区や丹後でも、大学生が中心になった中山間地の支援活動が活発に行われているが、それなどは、一つの望ましい試みであろう。幸い、上記の国々では、まだまだ過疎化、離農の問題が日本のように深刻化していない。この段階で、日本を後追いするのではなく、それぞれの国々の状況に応じた方策を当事者の視点で見つけだしてもらいたいと願っている。そのためにも日本の中山間地の現状を是非知ってもらいたいのだ。日本のみなさんには、文化や歴史が異なる人々の意見を聞くことで、地域が抱えている問題を地球規模の座標軸に置き、何らかの解決への糸口を見つけだすきっかけとしていただければと願ってきた。そのためにも国際会議の視点を「次世代に伝えよう、農のある暮らし」と設定した。

過疎化や離農の問題への日本の取組は、小農、自給農業が今なお多数をしめるアジアの発展途上の国々の農業、農村開発の将来の方向性に大きく影響を及ぼすことになるだろう。原発再稼動の問題と同様、世界が注視しているのだ。私はアジア諸国の農村開発に関ってきた一人の日本人としてこの点を特に日本人の皆さんに喚起したいのである。その自覚から、この会議の開催を積極的に提案し、企画者の一人として加わった。日本の問題は世界の問題であり、世界の問題は日本の問題である。成果を急ぐことなく、解決策を考え、実施していく過程を重視すべきだろう。私たちが提案し、実施した国際会議とスタディ・ツアーもその一つの試みであった。

本プログラムは、丹後・棚田研究会と東南アジア研究所実践型地域研究推進室が、共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」事業の助成を受けた「アジアの棚田稲作における持続的農法と棚田保全に関する研究」(代表　中村均司　東南アジア研究所)、科学研究費プロジェクト「ベンガル湾縁辺地域における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」(代表　安藤和雄)、NPO 日本都市農村交流ネットワーク協会、京都府(丹後広域振興局地域づく推進室)、総合地球環境学研究所「高所プロジェクト」(代表　奥宮清人　総合地球環境学研究所)、京都大学地域研究統合情報センター「萌芽研究:アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」(代表　安藤和雄　東南アジア研究所)、

高知大学「中山間プロジェクト」（代表　市川昌広　高知大学農学部）後援を受けて実施した。上記以外にも、ご多忙の中、国際会議に参加し、発表や司会していただいた方々、会議の会場、スティ・ツアーを受け入れていただいた与謝野町勤労者総合福祉センター「野田川わーくぱる」、久美浜町農業センター、京都府立丹後勤労者福祉会館、上世屋の藤織り伝承交流館、合力の家、知井振興会にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。特に、京都府丹後広域振興局農林商工部地域づくり推進室（地域活性化担当）の黒川貴さん、川原崎尚志さん、丹後・棚田研究会の東哲さん、本田明日公さんには企画から運営に至り大変お世話になった。また、丹後・棚田研究会の世話人でもある東南アジア研究所特任教授でもある中村均司さんの地道な地元とのこれまでの交流がなければ本プログラムは実施できなかったであろう。報告書の作成に第２回会議の報告書同様に高知大学の「中山間プロジェクト」に全面的に支援をいただいた。高知大学の小林智子さんの編集に関する全面的な支援なくしては本報告書は完成することができなかったに違いない。

以上　記して感謝致します。ありがとうございました。中間山地の問題を自分の問題として当事者的意識を共有できる人が一人でも増え、ネットワークが広がっていくことを期待し、今後とも本活動を継続していく予定です。ご支援、ご協力よろしくお願い致します。

国際会議の開催世話人を代表して
京都大学東南アジア研究所・実践型地域研究推進室長
安藤和雄

# 歓迎あいさつ

東　哲（丹後・棚田研究会）

皆さんこんにちは！！私は、丹後・棚田研究会の東でございます。

本日は、海外からは、ブータン、ミャンマーから国内からは高知県、山口県などからはるばる「農村開発国際会議　草の根　棚田フォーラム　イン　丹後」にお越しいただきありがとうございます。心から歓迎申しあげます。

ここ丹後は、海あり、山あり、里ありの自然に恵まれた地域であり、そこから生産される産物の恵みを受け、歴史的には、古代から大陸との交易もあり大陸文化にも影響されながら独自の文化を発展させてきたところであります。

丹後地域には、緑豊かな山々からの水源地があり、その麓にある棚田は山、里、海をつなぎ、ふるさとを形づくり、生活の基盤として先人が切り拓き、受け継がれてきています。

丹後地域は、古来より米の産地であり、奈良時代には大和朝廷に米が献上されてきたところです。今日におきましても日本の食味ランキングでも最高の特 A にランクされるなど棚田ではきれいな水の恵みを受けることから特に、おいしい米ができるのであります。

また、棚田は、豊かな自然の生態系を形づくり、自然と調和した美しい景観は人々に安らぎと癒しをもたらす、地域のかけがいのない資源として評価が高まっているところであります。

しかし、傾斜地の狭い段々状の田んぼは、農作業の機械化、効率化が出来ないことから多くの労力を要し、丹後地域では耕作放棄が進むなど深刻な状況が進んでいます。

こうした中で、棚田を保全し、よみがえらせるための取り組みが丹後地域においても進んでいるところであります。

今回の国際会議としての棚田フォーラムがこの丹後で開催されることは、地域におけるこうした課題を国内外の経験から学び、農村地域の暮らしや棚田保全の意義を深めながら学術的或いは、実践的に方向性を確認し、社会的にもアピールしながら取り組みを促進する上で、きわめて意義のある取り組みと確信しております。

本会議は、3 日間という短い期間でありますが丹後の実態をつぶさに見ていただきますと共に、私たちが誇りとする丹後を満喫いただき、相互の交流を深めていただければ幸いです。

今回の開催に当たりまして、ご尽力いただきました京都大学東南アジア研究所をはじめ関係機関、団体に心から御礼を申しあげ、歓迎のあいさつとさせていただきます。

# 主催者のあいさつ

中村　均司（東南アジア研究所・丹後棚田研究会）

京都大学東南アジア研究所・実践型地域研究推進室と丹後・棚田研究会の主催で、丹後で初めての農村開発国際会議「草の根 棚田フォーラム イン 丹後」を開催しましたところ、会場いっぱいの方々の参加をいただき、誠にありがとうございます。

2010年2月に開催された第1回丹後棚田フォーラムにおいて、パネラーの一人として参加された宮津市上世屋の井之本さんが次のように発言されています。

ー棚田を保全して何とか復活して米作りがやれたらそれで良いという話だけじゃない。家があり田んぼがあり山があり、それぞれがお互いに関連し合って、その中に棚田がある。皆さんは、棚田や景観を守らなければいかんと言われるが、もう少し自分の方に引き寄せた場合、自分の食べるものは自分たちで耕すんだということができれば、もっと棚田と近しい関係が築けるんではないかー

このことばがずっと私の心に残っていました。このことにどのように取り組んでいったらよいのか、丹後棚田研究会の活動の中での宿題でもありました。

その後、2010年10月、名古屋でのCOP10では生物多様性名古屋議定書が採択されました。また、翌2011年6月、佐渡・能登がFAOの世界農業遺産に認定されました。先進国では初めての認定ということです。さらに、2011年3月11日、東日本大震災と福島での原子力発電所の事故が起こりました。

こうした経過と出来事を背景にし、丹後地域の状況を踏まえて、今回の棚田フォーラムのテーマを「次世代に伝えよう農のある暮らし～次の世代に伝えたいこと、残したいもの、むらの暮らしの継承･･･」としました。

京都大学東南アジア研究所を中心に、京都府内や西日本の中山間地、アジアの国々の方々を招いて、膝を突き合わせて話し合う草の根の農村開発国際会議は、今年で3年目になります。昨年8月に山口県阿武町で開催された第2回会議のタイトルは「むらの幸せってなんかねぇ？」でした。大変分かりやすい、それでいて、「むら」で豊かに生きることはどういうことか、本当の幸せとは何か？といった本質的な問いを含んでいるものでした。今回のフォーラムは前回のテーマの本質的な部分も継続して含んでおります。

本フォーラムの一日目は、ブータン、ミャンマー、高知県、山口県、地元丹後からの講演と報告で、3日間のフォーラム全体の問題提起の性格も有しています。二日目は、現地視察（エクスカーション）として、上世屋の棚田と伝統的な藤織りや民家の再生の取組、袖志の棚田（日本の棚田百選）、市場のコウノトリを育む環境農業について理解を深めていただきます。そのあと、現地見学を踏まえ、丹後地域の様々な分野と立場からの取組について5人の方々に報告していただきます。三日目は、「農村地域の暮らしや棚田保全の取組、問題点等を探る」と題してワークショップを開催します。前二日間の報告・議論・体験などを踏まえて、活発な議論と具体的な方向性が一つでも見いだせたらと考えています。

このフォーラムには、海外からブータン王立大学とミャンマーのNGOの方々、高知県・山口県の農家や大学研究者の皆さん、京阪神の都市部に住んでおられる方々、研究者、行政関係者の皆さん、そして、丹後地域で農業に取り組んでおられる方々に参加いただいています。丹後で初めての農村開発国際会議であり、草の根の名のとおり、丹後の棚田や村を会場に、お互いが膝を突き合わせて、相互の情報交換と交流、議論が深まりますことを期待しています。

本フォーラムに対し御後援をいただきました京都府はじめ諸団体・組織、そして、フォーラムの開催・運営に御尽力と御支援をいただいています丹後の皆さん・関係者の方々に心から感謝申し上げます。

# 第４回 文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議
# 「草の根　棚田フォーラム　イン　丹後」
# 報告書　目次

当事者的意識を共有するために－謝辞にかえて－（安藤和雄）
歓迎あいさつ（東　哲）
主催者のあいさつ（中村均司）

## 第１部　講演・取組報告

**講演**

ブータンにおける移住と過疎のシナリオ　～カリンとカムルン・ゲオックの事例研究～
（ジャミアン・チョダ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
ブータンの農村開発におけるシェラブッチェ・カレッジの学生の役割
（ジャミアン・ティンレイ、ソナム・チョデン）・・・・・・・・・・・・・・・7
ミャンマーにおけるＥＣＣＤＩの農村開発プロジェクト（ニ・ニ・マウ）・・・・・・・・・・・・12

**日本各地からの報告**

中山間地域の商品化の試みとその狙い－高知県大豊町の事例－（氏原　学）・・・・・・・・・・・18
大学生の教育と怒田の景色－高知県大豊町での取り組み－（市川昌広）・・・・・・・・・・・・・22
条件不利地から生まれたもうひとつの価値観－阿武町スタンダードを目指して－
（辰己佳寿子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
京丹後市上山の取組（桒原　稔）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
意見交換の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

## 第２部　丹後の活動報告

**丹後の活動報告**

宮津市上世屋の取組（井之本　泰）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
コウノトリネット京丹後の取組（野村重嘉）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
京丹後市野間の取組（岡本　毅）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
伊根町新井の取組（福満敏博）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
京丹後市袖志の取組（堀江亮平）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
意見交換の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

## 第３部　ワークショップ：「農村地域の暮らしや棚田保全の取組、問題点等を探る」

**フォーラムに寄せて・参加者と地域へのエール**

棚田保全の担い手について考える（中村貴子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
丹後半島の棚田をこれからに（深町加津枝）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
感想（岡本　毅、野村重嘉、桒原　稔、井之本泰、福満敏博、堀江亮平、松本洋美）・・・・・・83
意見交換の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87

主催者閉会あいさつ（中村均司）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
国際会議とスタディツアー　プログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
編集後記（安藤和雄）

注）本文は英語、本文の後に、それぞれの海外の発表者の本ワークショップならびに日本滞在のコメントが掲載されている。発表とコメントの日本語への翻訳は、浅田晴久による。

# 著　者　一　覧
（五十音順）

| 氏　名<br>(Name) | 所　属<br>(Affiliation) |
|---|---|
| 東　哲<br>(Satoshi Azuma) | 丹後・棚田研究会<br>(Research Association for Rice Terrace of Tango) |
| 安藤和雄<br>(Kazuo Ando) | 京都大学東南アジア研究所<br>(Center for Southeast Asian Studies,Kyoto University.) |
| 市川昌広<br>(Masahiro Ichikawa) | 高知大学農学部<br>(Faculty of Agriculture ,Kochi University.) |
| 井之本泰<br>(Toru Inomoto) | 合力の会<br>(Koryoku No Kai) |
| 氏原　学<br>(Manabu Ujihara) | 自営（農業）<br>(Independent Farmer) |
| 岡本　毅<br>(Tsuyoshi Okamoto) | 野間活性化グループ<br>(Group for revitalization of Noma) |
| 桑原　稔<br>(Minoru Kuwahara) | 夢丹後の杜<br>(Yumetango No Mori) |
| ジャミアン・チョダ<br>(Choda Jamian) | 王立ブータン大学シェラブッチェ・カレッジ<br>(Sherubtse College, Royal University of Bhutan) |
| ジャミアン・ティンレイ<br>(Thinrei Jamian) | 王立ブータン大学シェラブッチェ・カレッジ<br>(Sherubtse College, Royal University of Bhutan) |
| ソナム・チョデン<br>(Choden Sonamu) | 王立ブータン大学シェラブッチェ・カレッジ<br>(Sherubtse College, Royal University of Bhutan) |
| 辰己佳寿子<br>(Kazuko Tatsumi) | 山口大学エクステンションセンター<br>(Extension Center, Yamaguchi University.) |
| 中村貴子<br>(Takako Nakamura) | 京都府立大学生命環境学部<br>(Faculty of Life and Environmental Science, Kyoto Prefectural University) |
| 中村均司<br>(Hitoshi Nakamura) | 京都大学東南アジア研究所/丹後・棚田研究会<br>(Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University<br>Research Association for Rice Terrace of Tango) |
| ニ・ニ・マウ<br>(Ni Ni Maw) | ミャンマーNGO(ECCDI)<br>(Myanmar NGO( ECCDI: Ecosystem Conservation and<br>Community Development Initiative) |
| 野村重嘉<br>(Shigeyoshi Nomura) | コウノトリと共生するまちづくりネットワーク京丹後<br>(Network of Kyotango for building community<br>co-existing with Oriental White Stork) |
| 深町加津枝<br>(Katsue Hukamachi) | 京都大学大学院地球環境学堂<br>(Graduate school of Global Environmental Studies) |
| 福満敏博<br>(Toshihiro Humumitsu) | 伊根と新井の千枚田を愛する会<br>(Association of loving Senmaida( Many Rice terraces) in Ine and Nii) |
| 堀江亮平<br>(Ryouhei Horie) | 袖志棚田保存会<br>(Society for preservation of Rice terrace in Sodeshi ) |
| 松本洋美<br>(Hiromi Matsumoto) | 自営（主婦業）<br>(Independent House-makers) |
| 浅田晴久<br>(Haruhisa Asada) | 首都大学東京<br>(Tokyo Metropolitan University) |

# 第１部　講演・取組報告

熱心に発表を聞く参加者の皆さん（与謝野町勤労者総合福祉センター「野田川わーくぱる」会場にて）

# Migration and Depopulation Scenario in Bhutan: Case Study of Khaling (*gewog*) under Trashigang District, Eastern Bhutan

# ブータンにおける移住と過疎のシナリオ　～カリンとカムルン・ゲオックの事例研究～

Jamyang Choda（Sherubtse College, Royal University of Bhutan）
ジャミアン・チョダ（王立ブータン大学シェラブッチェ・カレッジ）

（日本語要約）

農村から都市への移住は、産業化社会への発展過程で生じる現象の１つである。それは都市の失業、農村の人口減・頭脳流出・税収低下などの問題を引き起こす。同時に農地への人口圧の緩和、移住者からの仕送りによる収入増というプラスの面も少しはある。
他の発展途上国と同様に、ブータンも農村部からの移住による急速な都市化を経験している。首都のティンプーは毎年 7%の割合で人口が増加している。現在、農村部に住む人口は 69%だが、この傾向が続くと 2020 年には人口の半数が都市に暮らすことになるだろう。
本研究では、１．カリン・ゲオッグの人口流出の背景、２．移住者の年齢・性別・教育水準、３．上位の移住先とその理由、４．農村住民の意見、５．人口流出に関連した問題、を報告する。2012 年 12 月にカリン・ゲオッグで世帯調査（210 戸）が行われた。1 年以上家を空けている住民を移住者とみなして集計した。
調査の結果、移住者の定義にあてはまる住民は全体（2116 人）の 46.4%いた。うち男性は 54.2%で、女性の 45.8%より高かった。移住者の 75.8%は 15-64 歳で、1.3%が 65 歳以上であった。これでは農村の労働力不足を招き、耕作放棄地が増えることになる。
人口流出はブータン各地で学校が設立されたこととも関係している。教育を受けて、都市で仕事を求める人が増えている。移住者のうち教育を受けていないのは 30.7%で、小学校卒が 26.6%、高校卒が 34.3%であった。
住民が移住していく主な理由は、家族の引越し 32%、就職 31%、結婚 20%、入学 10%、などの社会経済的事情のせいである。人口流出によって農地の維持だけでなく、古くからの文化や伝統も次第に廃れていっている。
住民からは次のような意見が聞かれた。「都市に移住して生活が向上するのは良いかもしれないが、子供や親戚が遠くに行って、年老いた両親が田舎に残されるのを見るのは悲しい」。「将来、村はみんなに見放されて、すぐに野生の森になってしまうだろう」。「教育を受けた者が都市へ移住し、教育を受けていない者だけが村に残されている」。
必要な対策が取られないと、農村過疎化がブータンの経済・人口構成・文化・社会に深刻な問題を引き起こすことは明らかである。
（要約：浅田晴久）

（原文）

**Abstract:** Rural urban-migration is an integral part of development. Accordingly with rapid socio-economic development, Bhutan is also experiencing rapid urban expansion, mainly due to rural-urban migration. As rural out-migration is rampantly increasing in Bhutan it is important and worthwhile to conduct studies on this issue. Therefore, the main objective of this study was to examine the rural-outmigration scenario at the micro-level. A micro-level survey was conducted in Khaling gewog in the month of December 2011 and data was collected from 210 households in the gewog. Generally out-migration in Khaling gewog was found to be very high with almost 50% of its registered population absent from the household for more than a year during the time of survey. It was also found that huge chunk of out-migrants constitutes of working age population (15-64) and more than 70% had at least primary and above education. Most prominent reasons for leaving home were found to be socio-economic reasons such as family move, employment, education and marriage.

**Key Words**: Rural-Outmigration, Age, Sex, Education Level, Bhutan, Khaling *Gewog*.

**Background**

A distinguishing feature of the development process is the phenomenon of rural-urban migration. This phenomenon might be regarded as an inevitable and desirable result of industrialization, policy makers in the developing world have tended to view it with considerable anxiety because, rural-urban migration has aggravated the problem of urban unemployment (Essang & Mabawonku, 1974). At the same time rural-urban migration is associated with rural depopulation, brain drain and reduction in the taxable capability of rural people. However, there are some brighter prospects of rural outmigration such as reduced pressure on agricultural lands, improved living standards through remittances send by migrants, etc.

Like other developing countries, Bhutan is experiencing rapid urban expansion, mainly due to migration from rural areas. While most of Bhutan's population still lives in rural areas (69.1percent), urban centres have emerged in recent decades in most districts and have attracted a considerable number of people (Ministry of Agriculture,2005 (MOA) & Office of the Census Commissioner, 2005 (OCC) ). Thimphu, the capital city is growing at 7 percent per annum (MOA, 2005). The rapid influx of people from rural to urban centres is becoming a major issue in Bhutan and consequences are already being felt both in rural and urban areas.

According to United Nations Development (UNDP) 2009 Human Development Report, Bhutan accounts for the highest internal migration rate in South Asia at six percent internal migration rate in 2009 (Kuensel, 2009). The proportion of urban population increased by more than 6 percent between 1995 and 2000 (Central Statistical Organization (CSO) 1997 & 2000) and if this trend continues it is expected that by 2020 half of Bhutan's population will be residing in urban areas (Planning Commission, Royal Government of Bhutan, 1999).

Based on the 2005 Population and Housing Census of Bhutan (PHCB, 2005), among the districts, Thimphu has received the highest number (54,685) of life-time migrants followed by Chhukha (25,951) and Sarpang (17,997). In terms of out-migrants, Trashigang with a Total of 23,802 is the highest, followed by Thimphu and Mongar. There were a total of 111,770 life-time migrants who have moved from rural areas to the urban. In terms of net-migration also Thimphu gained highest with 39,770 persons and Trashigang has the highest loss of 16,697 persons. Therefore this study aims to examine the migration scenario at the micro-level with regards to Khaling gewog under Trashigang District.

Fig 1.1 Net migration by District (PHCB, 2005)

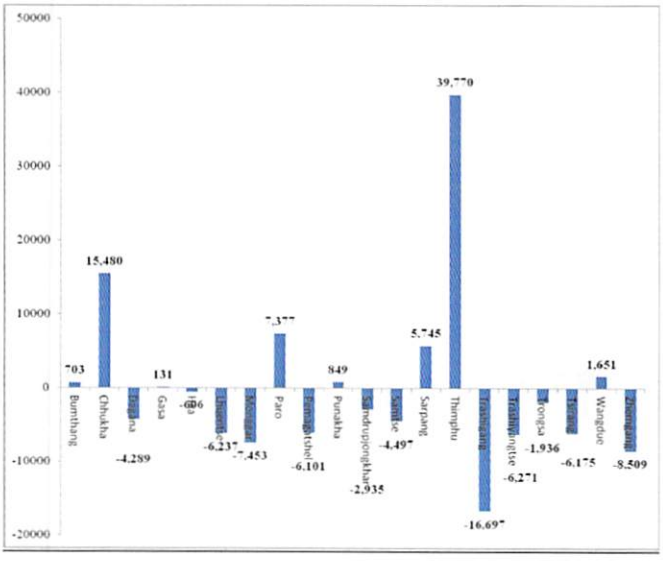
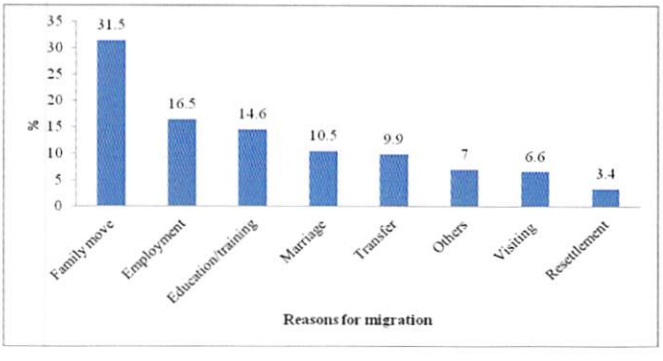



Fig. 1.2 Reasons for migration in Bhutan (PHCB, 2005)



**Study Objectives:**

1. To examine the scenario of rural-urban migration in Bhutan particularly with regards to Khaling gewog

2. To examine the characteristics of out-migrants by age, sex and education level

3. To find out the popular destinations of out-migrants and reasons for migration

4. To outline the opinions of rural peoples on the rural-urban migration

5. To provide insight of problems associated with rural-urban migration in Bhutan

**Data**

A primary data was collected from Khaling *gewog* in the month of December 2012. During the survey, both quantitative and qualitative data were collected through household interviews. The survey collected information from around 210 households in Khaling *gewog*. The respondents were the heads of households. The survey instrument for this study was a set of questions that collected information on demographic, household member status, duration of absence, reasons for migration, education level of the household members, housing characteristics, landholdings, remittances and views on rural out-migration. Questionnaire was pre-tested before conducting a survey. Respondents were selected randomly from different villages.

**Data analysis**

The study was descriptive, cross sectional community based study. Data was analyzed using SPPS. Firstly member of households who had been absent from the particular household for more than one year are categorized as an out-migrants. Accordingly those out-migrants were crosstubulated with other variables like age, gender and level of education to determine the characteristics of out-migrants. Top five destinations of out-migrants and top five reasons for migration are also analyzed in this study.

**Results and Discussion**

Every household member absent from the household cannot be categorized as out-migrants without considering the duration of absent. Therefore, in order to exclude those individuals who were absent temporarily like students, going for pilgrimage, visiting family members, going for medical checkups, migration period threshold was kept as one year. In other words a person who has been absent from the particular household for more than one year was considered as out-migrants in this study. Table 1.2 shows based on the aforesaid definition of out-migrants, almost 50% of the people out-migrated from Khaling gewog. With almost 50% of its registered population out of the gewog, the out-migration scenario seems to be so high in the gewog.

Table 1.2: Migration status of the household members (Duration above one year)

| Migration Status | Frequency | Percent |
|---|---|---|
| None migrants | 1134 | 53.6 |
| Migrants | 982 | 46.4 |
| Total | 2116 | 100.0 |

It was found that comparatively there are more male out-migrants (54.2%) compared to their female counterparts (45.8%). Looking at the age group of the out-migrants it was found that 75.8% belong to working age group (15-64) and only 1.3 % was above 65 years. Which means that huge chunk of working population has out-migrated elsewhere to work and earn their leaving. It would certainly lead to labour shortage in the community and in the recent years this problem has been vivid in most of the rural parts of Bhutan where most rural agricultural lands are left fallow without any cultivation. On the other hand urban places are observing rapid rise in population especially young peoples in search of jobs.

Widespread establishment of schools in Bhutan could be also important factors leading to rural-outmigration. Today schools are established in every nook and corner of the country. As people get educated they gradually move out of rural areas and go to urban places in search of jobs. It was found that among out-migrants 30.7%

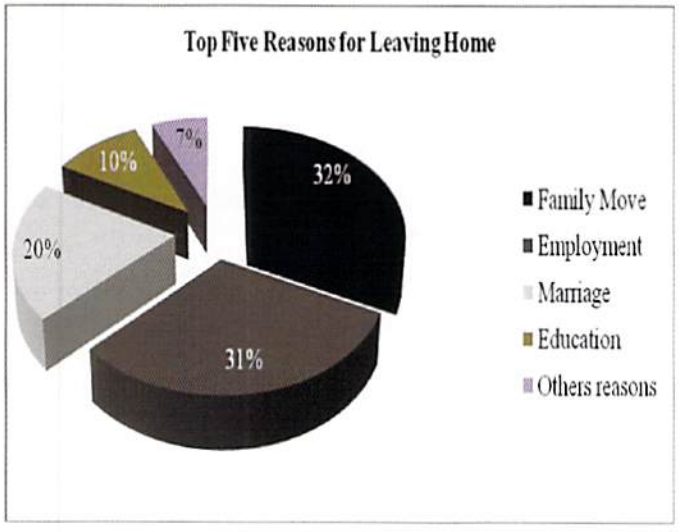
didn't have any education, but almost 70% of the out-migrants have at least primary education and above.

Table 1.3: Characteristics of out-migrants (N=982)

| Characteristics | Percent |
|---|---|
| **Sex** | |
| Male | 54.2 |
| Female | 45.8 |
| **Age group** | |
| 0-14 | 22.9 |
| 15-64 | 75.8 |
| 65 & above | 1.3 |
| **Education level** | |
| No education | 30.7 |
| Primary | 26.6 |
| High school | 34.3 |
| Diploma, degree & above | 8.5 |

It seems that out-migration from Khaling gewog could be mainly credited to socio-economic reasons. It was found that out-migration due to family move (32%) was the top most reason followed by employment (31%), marriage (20%) and education (10%). This finding is in line with the Population and Housing Census of Bhutan, 2005 and also the findings of Rural-urban migration survey, 2005 of Bhutan were it was found that socio-economic factors like family move, education and employment were the main drivers of rural urban migration.

Fig. 1.1: Top five reasons for leaving home in Khaling *gewog* (N=982)




**Consequences of rural-urban migration**

Similar to other countries, most of the migrants are young people between the ages of 15-64. As this age group consists of economically active people, this has serious impact in the rural areas like labor shortage, brain drain and reduction in the level of fertility. Rural people in Bhutan still practice labor intensive agriculture where more number of hands determines the productivity of their crops. Therefore, movement of young and educated people towards urban areas poses serious challenge in maintaining the agriculture practice in the rural areas and ultimately most agriculture lands are seen to be left fallow.

It has been also observed that due to rural urban migration, age old culture and tradition in some rural areas has been degrading slowly.

**Opinions on rural-outmigration from the rural people**

During the survey respondents were asked to provide their opinion on rapid rural outmigration occurring in their *gewog* and some of the critical views shared by the respondents are mentioned below:

"One way it is good that people move out to urban areas for better life's but on the other hand it's very sad to see your own children's and relatives go away leaving behind only old parents"

"In future village will be abandoned by everyone and soon it will turn to wild forest"

"Educated are the ones who moves to urban areas and only uneducated ones are left behind in the village"

It is obvious that if necessary actions are not in place from the beginning rural-outmigration in Bhutan might lead to serious consequence in future. Consequences could be in terms of economy, demographic structure, cultural and social. Therefore, it is important to look into this internal migration scenario and take necessary steps from the beginning.

**References**


Bell, Martin and Muhidin, Salut, (2009). "Cross-National Comparison of Internal Migration", *MPRA paper 19213*, Univeristy Library of Munich, Germany.

Central Statistical Organization (1997 & 2000). *Statistical Year Book of Bhutan.* Thhimphu: Royal Government of Bhutan.

Choda, J. (2011), Factors Associated with Rural-Outmigration: A Household Level Study in Kanglung Gewog, Trashigang, Eastern-Bhutan.

Deshingkar, P., & Grimm. S, (2005) "Internal Migration and Development: A Global Perspective", *International Organization for Migration (IOM), IOM Migration Research Series*

*opment Report.* New York, NY 10017, USA: UNDP.

Hossain, M.Z.(2001), "Rural-Urban Migration in Bangladesh: A Micro Level study", Shahjalal University of Science and Technology, Bangladesh.

Kuensel Corporation (2009, October 22). Bhutans internal migration rate highest in South Asia. *KUENSEL.* Retrieved October 22, 2009, from http://www.kuenselonline.com

Ministry of Agriculture (2005). *Rural-Urban Migration in Bhutan.* Thimphu: Ministry of Agriculture, Royal Government of Bhutan.

National Statistics Bureau (2008). *Socio-Economic and Demographic indicators 2005.* National Statistical Bureau, Royal Government of Bhutan.

Office of the Census Commissioner (2005). *Population and Housing Census of Bhutan.* Thimphu: Royal Government of Bhutan.

Planning Commission (1999). *Bhutan 2020: A Vision for Peace, Prosperity and Happiness.* Thimphu: Royal Goverment of Bhutan.

Skeldon, R. (2006). "Interlinkages between internal and international migration and development in the Asian region". *Population, Space and Place*, 12, 15-30.

United Nations Development (2009). *Overcoming Barriers: Human Mobility and Development, Human Devel*

## Report on visit to Tango

Far away from the busiest city life of Japan it was surprising to see farmland, rice terraces and worried farmers in Tango. It was also heart breaking to see an old junior High School turned into an office because there were no students.

The presentation made by the farmers shared that only after the construction of roads the people started to cultivate since machines were accessible but for those farmers who were far away from the roads could not cultivate. The terrain they had was such that the high lands were muddy, the middle lands were gray and the lower lands were all dry. The farmers were not worried about their successors since most of them didn't have any and some said cultivating for more than past six decades was enough.

Bhutan and Japan share same resources but the respective people have different procedures and practices in utilizing those resources. They follow the same processes but have different definition given to it. Bhutan has not yet loss its agriculture practices but is at the verge of losing it if appropriate steps are not taken soon.

One reason Japan has lost or losing its agriculture practices is I believe because of the stereo typical view of Japanese parents or people that one must get permanent government job after graduation rather than cultivating land.

It can be said that Bhutan is the past of Japan and Japan can surely be viewed as the future of Bhutan.

（日本語要約）

## 丹後地方訪問記

日本の忙しい都市生活から離れて、農地・棚田・悩みの多い農家をみるのは驚きでした。生徒がいなくなったかつての小学校が事業所に変わってしまったのも残念でした。

農家の方の発表では、道路が建設されてはじめて機械が入ることが可能になり耕作が始まったということでした。高位の土地は泥質で、中位は灰色、低位の土地はすべて乾燥していました。農家はほとんど後継ぎがいないために心配もしておらず、60年以上耕してきたのでもう十分であると話す人もいました。

ブータンと日本は同じ資源を共有していますが、その資源を活用する方法は異なっているようです。ブータンにはまだ農業が残っていますが、もし適切な手段を講じなければ消失してしまう一歩手前のところまできています。

日本で農業が失われた、ないしは失われつつある理由の1つは、学校を卒業したら農業をするより公務員の定職に就くべきだという親や人々の固定観念のせいであると思います。

ブータンはかつての日本の姿であるかもしれないし、日本はブータンの将来の姿であるのかもしれません。（要約：浅田晴久）

# The Role of Sherubtse College Students in Rural Development in Bhutan
# ブータンの農村開発におけるシェラブッチェ・カレッジの学生の役割

Jamyang Thinley, Sonam Choden (Young Fellow Researchers ,Sherubtse Collge)
ジャミアン・ティンレイ，ソナム・チョデン(若手研究員、王立ブータン大学シェラブッチェ・カレッジ)

（日本語要約）

ブータンはインドと中国に挟まれた小国である。1961 年にインドの協力で第 1 次 5 カ年計画が開始された。それ以来、医療・教育・経済・道路網など各分野で開発が進められている。しかし近代教育が導入されたのは第 3 代のジグメ・ドルジ・ワンチュク王の時代になってからである。王は 1963 年に国の教育近代化のためにウィリアム・マッケイ氏を招聘し、英語学校を設立させた。1968 年に設立されたこのカンルン公立学校は、その後「学問の頂上」を意味するシェラブッツェと名付けられ、1983 年に大学に昇格した。現在シェラブッツェ大学は 18 の学科に 1165 名の生徒、105 名の教員、80 名の職員が在籍している。
本報告はシェラブッツェ大学の学生が農村部のコミュニティの発展のために担っている役割についての発表である。

1984 年 9 月 9 日にラクレーン氏とモニカ修道女によって設立されたのが社会奉仕部(SSU)である。ボランティアの学生が休日に大学周辺の恵まれない人々のために奉仕する。モットーは「奉仕による愛」である。SSU の目的は次のとおりである。
1．ブータンの道徳に則った社会意識を高める、2．身近にいる不幸で苦しんでいる人々を助ける、3．政府のプログラムを村人に知らせる、4．自身やリーダーシップを養う、5．状況を把握し、責任を担う。SSU の長年の活動成果は次のとおりである。ヨンプラ寺院の電化、安全な飲料水の供給、16 の家・19 の小屋・5 つの台所・6 のトイレの建設、貧しい人のために土地を購入、病人への薬・食料・援助の供給、農家への種子・肥料・農具の提供、ゴミ捨て用の穴を掘る、近隣住民へ非公式に教育を行う、水供給を刷新する、など。

国際国内啓蒙会議(FINA)はシェラブッツェ大学の最初のブータン人学長であるドゥルクパ氏によって 1988 年に設立された。会議では農村部の住民に麻薬の有害性を教え、大麻引き抜きキャンペーンもやっている。

シンゲ・カームおよびシェラブッツェ緑の協会は自然保全団体である。活動内容は、農村部での清掃活動、浸食に弱い土地に苗木を植える、ヨンプー寺院での水供給、大学のゴミ管理、国内の保全地域を訪問して環境保護を啓蒙する、など。

シェラブッツェ防災部は首都ティンプーの防災局の下、2010 年に学生の手で設立された。メンバーは各地を訪問して住民に防災について教育している。
（要約：浅田晴久）

（原文）

## Introduction

Bhutan is a small nation sandwiched between two mighty nations of the world, India in the south and China in the north. However, Bhutan has remained independent throughout centuries. Bhutan started her development activities with the starting of First Five Year Plan in 1961 with the support of Indian government. Since then many developmental activities in the areas of health, education, economy, roads, communication, etc. has taken place. It was however during the reign of the third king Jigme Dorji Wangchuck, the modern education system was introduced in Bhutan.

In 1963, the king invited the Father William Mackey to help develop a modern educational system for the country. Still very much an agricultural society, the country had no form of organized education. Father Mackey was selected for the task, and invited to set up an English medium. In 1968 Kanglung public school was formed and was named Sherubtse, meaning 'peak of learning, and in 1976, Sherubtse Public School became a junior college with pre-university courses.

In July 1983, Sherubtse Junior College became a fully- fledged degree college affiliated to Delhi University. Presently Sherubtse is under Royal University of Bhutan (RUB). Sherubtse College has 1165 students, 105 faculty and 80 administrative supporting stuffs. College presently offers 18 different courses like Life Sciences, computer, arts and humanity. Sherubtse College offers lots of other co-curricular activities which are aimed to help the needy people in and around the community.

*This paper explores the role of Sherubtse college students in developing the community, especially rural areas. This paper further explores the activities carried out by the students through different clubs in the college.*

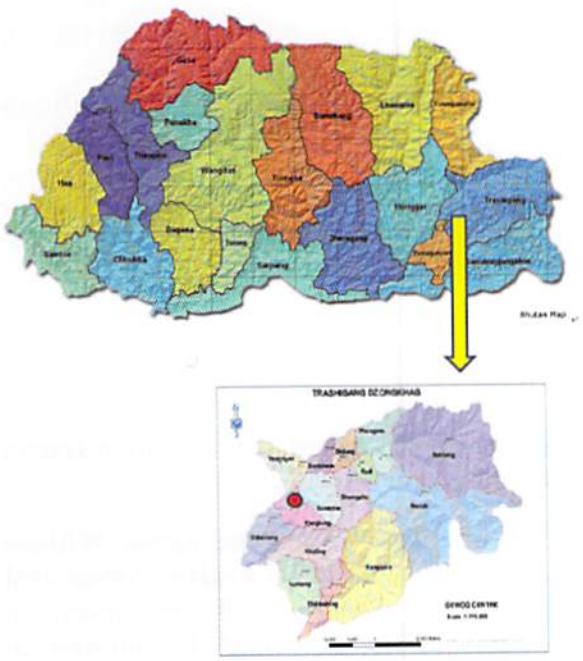


**Figure-1: Sherubtse College, Kanglung Trashigang**

Sherubtse College is in Kanglung Gewog which is under Trashigang Dzongkhag with the total population of 1,717 (PHCB, 2005, National Statistical Bureau).

**Discussion**

"The future of the nation lies in the hands of the young generation"

- King Jigme Singye Wangchuck

Following the words of the fourth king and trying to live up to the words of the fifth king in serving the nation more intelligently, the students of Sherubtse plays many roles in developing the rural areas through different clubs and forums. Sherubtse College has 12 different clubs which are helping the rural area. Forum for International and National Awareness (FINA) is the governing student forum which looks after all the student and the clubs activities. Most importantly there are 5 major clubs with history of helping the community and they are FINA, Social Service Unit (SSU), Singye Karm, Sherubtse Green Society (SGS) and Sherubtse Disaster Management.

**1. Social Service Unit (SSU)**

Revered Father Laclaire and Sister Monika formed the Social Service unit (SSU) on 9th September, 1984. It is voluntary group of College students joined to serve the community especially the disadvantaged section of community in and around the college. The unit works during Sundays and holidays. The unit stands with the motto "love through service".

The aims and purposes of SSU are as follows:

1. To develop social awareness along with a social conscience in the Bhutanese context.
2. To help our unfortunate and distress fellow citizens in and around the college.
3. To make ignorant villagers aware of the government policies and programs.
4. To develop self-confidence and leadership quality.
5. To understand the situation and shoulder the responsibly.

Over 28 years of history, SSU has achieved so much and helped many citizens in the community. SSU seeks donations from various departments and organizations and invests in community development. These are some of the achievements of SSU over the year:

- In electrification of Yonphula Lhakhang
- Provided Safe drinking water to the villages like Motong goenpa in Khaling, Retshang Dung in Kanglung.
- Constructed sixteen houses, nineteen huts, five kitchens, and six toilets.
- Purchased land for poor people within the Kanglung area.

- The Unit had helped sick patients by providing medicines, food and aids, and referred those necessary to Trashigang Hospital.
- The Unit had provided seeds, fertilizers, tools and the members were also engaged in farming activities with farmers.
- Garbage pits were dug within the College campus and surrounding villages
- The Unit carried out non-formal education for the people living in and around Kanglung.
- Renovation of water supply in Kanglung Villages.
- East-west high cleaning, from Kanglung to Thimphu making.
- Meets leprosy patient at Wamrong Risherbu and provides them with clothes and foods twice a year.
- The Unit also has many beneficiaries, old people who cannot work in the field and has no support, school going children and college Students.

**Students constructing house in Kanglung**

**SSU members meeting with the Leprosy patient in Womrong Riserbu**

**2. Forum for International and National Awareness (FINA)**

FINA forum was formed in 1988 by Zanglay Drukpa who was the first Bhutanese principle in Sherubtse (present Health Minister). Forum educates the rural people about the harmful effect of drugs and do awareness campaign. Forum organizes every year the Cannabis Uprooting program in Kanglung involving all the students and Staffs of Sherubtse College.

**Cannabis uprooting in Kanglung**

3. Singye Karm and Sherubtse Green Society is the nature club in college. The activities of these clubs are:

- Cleaning Campaigns in Rural areas of Kanglung
- Planting of saplings in areas prone to erosion in the country

- Water supply in Youngphu Lakhang in Kanglung
- Manage college garbage
- Visiting Reserve areas in Bhutan and making people aware about the importance of protecting the environment.

**Putting up dust bins in Kanglung**

**Cleaning Campaign in Kanglung**

**4. Sherubtse Disaster Management**

Forum was formed in 2010 by the students under disaster management department in Thimphu. Within the short time Forum has conducted various activities related to disaster. Members has travelled to Merak, Saktan, Jonkhar, and Radhi educating the high land people about the disasters, how to prevent and protect. Members have also travelled to Shinga Lowri in Samdrup Jongkhar to make rural people aware about the disaster.

**Conclusion**

Bhutan Is known to the world as one of the happiest nations in the world guided by the unique development philosophy of Gross National Happiness, but there are some people who need care and support. Sherubtse College Students has always reached out to those people who are in need of help. Students have helped them with money, buying lands, constructing houses for homeless people, provided fertilizers and seeds for the farmers, electrified rural houses, water supply etc. There are many activities to help rural people in terms of labor supply, supply of more seeds and fertilizers etc.

Bhutan has experienced rapid development after the starting of Five Year Plan in 1961, yet we are struggling to fulfill the basic need of people. Prime Minister Jigme Y. Thinley said that "Like most developing nations, we are struggling with the challenge of fulfilling the basic needs of our people. What separates us, however, from most others is that we have happiness, the most fundamental of human needs, as the goal of societal change".

## Recommendations on Tango Field Visit in Japan (October 27-29, 2012)

The trip to Tango in Japan was so educative and exciting. We were so fortunate to go around and see with our own eyes the problems and challenges faced by rural residents of Japan. No doubt compared to Bhutan, Japans rural development has reached far ahead with good transportation networks, market, health and educational facilities. Yet majority of the population have migrated to cities in search of better lives. It was so sad to see only aged people left behind in the rural areas posing great challenge to maintain the agricultural practice. However it was so encouraging to see and learn that many local associations and individuals are taking initiative to address the challenges faced by the rural people in Tango.

**Lessons learned from the trip**

Bhutan has lot to learn to learn from Japan. Currently rural-urban migration has just begun in our country and Bhutan government strongly feels that rural infrastructure development is the only way to curve the rural-urban migration. But, after visiting rural places in Tango I strongly felt that infrastructure development just triggers migration rather preventing people to move towards urban areas and some of Japanese friends have mentioned that rural infrastructure development rather encourages rural-urban migration. Therefore, infrastructure development like building roads, schools and hospitals are not only solution for solving this problem. More important thing is to educate rural people on importance of living in rural areas and making them appreciate the rural life. Without inculcating value of rural life to the people in rural places, just infrastructure development might be useless because it is the reality seen in rural places of Japan. If no alternate rural development takes place in Bhutan I have opinion that few decades from now rural infrastructures like road, schools and hospitals will be underutilized and huge government resources currently spend on this activities might go in vain. Few cases have been already reported were some remote schools has to be close down in rural places because of lack of school going children's.

（日本語要約）

## 丹後地方への視察に基づく提言（2012年10月27-29日）

丹後地方の旅は非常に勉強になり刺激を受けました。自分たちの目で日本の農村住民が直面している問題を見ることができて非常に幸運でした。ブータンとは比べようもなく、日本では交通網・市場・医療・教育など農村部まで行き届いています。しかし大多数の住民はよりよい暮らしを求めて都市へと移住して行きました。農村にお年寄りだけが残されて農地の管理に苦労しているのを見るのは非常に悲しいことです。その一方で、地元の団体や個人が丹後地方の農村の問題の解決に取り組んでいるのを知って非常に勇気づけられました。

**スタディ・ツアーから学んだこと**

ブータンは日本から学ぶべきことがたくさんあります。農村から都市への移住はブータンではまだ始まったばかりですが、ブータン政府は農村部のインフラ整備が人口流出を防ぐための唯一の道であると強く信じています。しかし丹後地方の農村部を訪問してみて、インフラ整備は人口流出を防ぐどころか、加速させていると感じました。道路、学校、病院を建てることだけが問題の解決になるのではありません。もっと大事なことは、農村部の住民に農村にすむことの意義を教え、農村の暮らしを有難いと気付かせることです。もしブータンで現状のまま農村開発が進めば、農村部のインフラは使用されなくなり、浪費された莫大な政府予算が無駄になってしまうでしょう。すでに子供数が不足したために僻地の学校が閉鎖されたという事例が報告されています。

（要約：浅田晴久）

# Involvement of Ecosystem Conservation and Community Development Initiative in the Rural Development Projects implemented in Myanmar.
# ミャンマーにおけるＥＣＣＤＩの農村開発プロジェクト

Ni Ni Maw　（ＮＧＯ・ＥＣＣＤＩ）
ニ・ニ・マウ（生態系保全とコミュニティ開発イニシャティ）

（日本語要約）

本発表ではミャンマーの農村部に暮らす人々の生活を紹介する。ミャンマーは農業国で人口の70%は生涯を通して農村部で暮らしている。山岳地には135以上の少数民族が100年以上平穏に暮らしている。大多数の住民は楽天的で日常に満足しているが、現在、食料問題、資金不足、雇用の減少、天候不順などの問題で、多くの若者が故郷を離れようという動きが出てきている。

この状況を改善するために、ミャンマー政府は7地域と7州で農村部の貧しい人々の生活を向上するための長期計画に乗り出した。教育・医療・交通・水道・灌漑の分野で貧しい人を救済するほか、NGOによる融資事業も行っている。我々ECCDIは環境・生態系管理・林業・野生動物・農業・家畜・地域開発の専門家によって2006年11月に活動が開始され、国内のドライ地域、デルタ地域、マグウェ地方、シャン州、ラカイン州で村落開発に携わっている。

ECCDIの主な目的は、１．生態系の保全と改善、２．モデル森林の創成、３．貧困の削減、４．研修・書籍執筆・メディア発信、５．教育による人材育成、である。

ミャンマーの農村部で暮らす人々の社会的地位はまだまだ満足できるものではない。収入の機会は少なく、教育施設、妊婦・子供・老人の健康管理も不十分である。ドライ地域では安全な水を入手できず、デルタ地域では塩水にヒ素が混入している。電気が通っていないため、調理と照明のために女性や子供は薪を集めるのに時間を使わなければならない。年々、農業投入財の価格が上がり、水も入手できず、農村生活は厳しくなっている。収入の機会が見込める近くの街へと移住している。次第に年齢・性別を問わず全村人がそうなっている。

この動きは20年前から始まった。都市部の高収入に若者が引き寄せられた。日用品の価格は高騰するのに、雇用の機会はますます厳しくなった。乾燥地域では天候が悪化し、デルタ地域では洪水が発生した。両親は子供たちが村を去って金を稼ぐことを許すほかなかった。農村部からの労働力は斡旋業者に搾取され人身売買も行われた。村には両親と年寄りが取り残され、人口は減少した。

ECCDIが2008年から2012年まで「ミャンマー村落開発」に関連して行ったプロジェクトは次のとおりである。１．薪用林の植林、２．食料確保の促進、３．農村電化、４．生活改善、５．サイクロン被災者の生活向上、６．家畜飼育による食料確保、７．生活の向上、８．農林牧畜業の技術指導、９．飲料水供給、１０．小学校の改修、１１．共同体林地の評価、１２．籾殻焼却装置を利用した電化。

ミャンマーの農村住民は伝統的なやり方で生き抜くだけでは不十分で、社会経済状況を向上させるために収入を増やし技術を身につける必要がある。教育水準を上げ、衛生的な健康管理、利用できるエネルギーを増やし、安全な飲料水を供給することで若者が農村部に暮らすことができる。ミャンマーの農村開発は将来まで自覚とやる気をもつ若者の手で達成されるのである。

（要約：浅田晴久）

（原文）

## Introduction

This paper present the livelihood pattern of people reside in most of the rural areas in Myanmar. Myanmar is an agriculture - based country and 70% of the population live happily in the countryside thought out their life. Moreover 135 races of minority groups inhabited in the mountainous areas, are peacefully living more than hundred years ago. Majority of these people are naturally optimistic and contented with what they do have Nowadays, some terrible challanges had

strucked them to move away by leaving their own native places. Diversified impacts include food insecurity, lack of own level's capital, reduced chance of employment, and bad weather changes because of the global warming like other countries in the world. Most of the young generation people move to the urban areas and even up to the other countries to hunt for more income in these decades.

**Background of the ECCDI**

To alleviate these situations, Myanmar Government have to implement long-term plannings, thus, improve the developments on the livelihood of rural people and poor households living in 7 Regions and 7 States in the country. The Government initiated various tasks on poverty alleviation, developments in the field of education, health, transport, clean water supply and irrigation to the farmers. Moreover, Myanmar Government implement a credit interest system integrated with International Non-Government Organizations (INGOS), Local Non-Government Organization (LNGOS) and Private owned Organizations in the rural areas of all Regions and States. Actually, most of the LNGOS

were established since after the Category 3 Cyclone Nargis had strucked Myanmar in 2008. Besides, there are more rural people in other area of Myanmar hit by other disasters and in the insurgent areas (Rakhine, Kachin ..... etc). Our ECCDI is a non-political, non-profit and non-governmental organization initiated in November 2006 by senior ex-governmental officials with expertise in environment, ecosystem management, forestry, wildlife, agriculture, livestock and conrnunity development. ECCDI had participated in the rural development projects since 2006 in Dry Zone, Delta Region, Magwe Division, Shan State and Rakhine State.

**ECCDI's main objectives**

1. To ensure a sustained environment through enrichment of biodiversity by conserving and improving natural ecosystems.
2. To create model forests to demonstrate sustainable forest ecosystem management, sustainable resource utilization and diverse forest values to the public and related organizations.
3. To help alleviate poverty and enhance community development by improving food security, creating income-generating opportunities and assisting education and health.
4. To conduct trainings, write technical papers and books, and use various media to raise awareness of the people about environment, forests, biodiversity, climate, climate change and ecosystem.
5. To assist in human development through trainings and by contributing to educational institutions.

**Brief Outlook on Myanmar**

The geographical location of Myanmar is between latitude 9.58' N and 28.29' N and longitude 92.10' E and 101.10'. It is situated in the south-east Asian subcontinent. India and Bangladesh lie to the west, China to the north-east while Thailand and Laos lie to the east of Myanmar. Its total land mass is 261,228 square miles (676,577 $km^2$), stretching 1280

miles (2050km)from the north to south and 578 miles (925km) from east to west at its widest points. Elevation of the land surface of Myanmar varies from sea level along the coast to 20,000 ft. (6 km) in the mountains bordering the Himalayas Ayeyarwady, Sittaung and Thanlwin rivers are formed as three parallel chains of mountains running from north to south with Rahine Yoma, Bago Yoma and Shan plateau. Climate conditions vary widely in Myanmar despite of basic seasons include summer, rainy season and winter. The dry zone is situated in central Myanmar and it is really hot in summer times (upto 43°C). In Mandalay Region, average annual rainfall is less than 98 cm in some dry years. The ancient city Pagan is situated in the Mandalay Region. There are always heavy rainfalls in coastal areas of Myanmar (Rakhine State, Ayeyarwady ,Delta Region and Tanninthary Region). Yangon is now recognized as main business-oriented city since Nay Pyi Taw become capital of Myanmar since 2006.

Most of Northern parts in Myanmar are usually mountainous with heavy rain rainfall and even snowy. Myanmar is a country of frank, friendly and happy nature. It consists of 7 Regions and 7 States 135 races of different religions are residing peacefully. In spite of speaking variety of dialects, Myanmar citizens also love to speak Myanmar language.

The major earnings of the country are derived from rice and other agricultural crops, teak and other qualified woods, natural resources including emerald and rubies. However, these earnings had fallen since 1982 due to the some unfabourable problems. Since then, Myanmar people had to face economic problem for many years. Now Myanmar is opened and reconstruct friendship with most of the countries in the world.

Fortunately, Myanmar people have a rich cultural heritage like Pagodas and temples with brilliant architectural skills and monuments built since ancient periods with strong technologies. Moreover, 85% of the population has practiced Theravada Buddhism. In addition, the way of thinking, acting and living of Myanmar people are hospitable, cheerful, warm, kindly and relaxed. Myanmar have got the expertise descendants also literature, music and art of dance from their ancestors.

**Current condition of rural people with regard to diversified impact on their development.**

In Myanmar, 70% of the population resides in the rural areas. The fundamental ways of earnings in the village are based on agricultural practices (cultivation of deep-water rain-fed-rice, peas and beans and maize ete...) and raising of cattle, buffaloes, pigs, goats, chicken and ducks at the backyard of their houses. Traditional fishing, selling of fuelwood and odd jobs like labourer in the paddy fields and other causal works are also essential for the survival of landless and poor households.

Social status and development of the rural people in Myanmar are still far away from the satisfactory level. According to lack of opportunity for income generation to the poor households, non-promising educational system, no health care practice to the pregnant women, children, old peoples and disables. Some villages has no access of clean water especially in the Dry Zone villages and salty water sometimes with arsenic chemicals are found in some villages in the Delta Region. The villages possess no access of electricity, thus, women & children have to waste their times for finding fuelwood for cooking & lighting in the house. Usage of fuelwood cause indoor air pollution to the housewives, children and old persons living in the same house and cause disturbances in respiratory tract and lungs. In Myanmar, although the educated women can get chances to suggest on co-operate in the socio-economic affairs together with their husbands, women in the rural area still did not get the same chance. If clean energy access become increased rural women could have participated in the village activities at that time. Year by year, rural people had tried to survive themselves by working very hard for their whole life. Not only the price of agriculture inputs (seeds, fertilizer) but also access of water irrigation become difficult, the farmer families suffered from in security of food, lack of secure shelters and no proper health care. Under this socio-economic impact, no one can be escaped, including non-farm workers such as livestock breeders, causal worker retailers... etc. Since those times, the younger generation in the rural areas (educated or non-educated) leave their villages and move to the nearest townships where they can earn some more money by working odd-jobs and hard works over there . Gradually, other villagers of different age, sex and nationality

available opportunity at that time.

This event was onset about 20 years ago. Better income acquired in the urban area attracted to the younger generation groups. Even University graduates are jobless at the time, no one can refuse that offer by the human – brokers. On the other hand, the price of commodities become higher and higher. Chance of employment was more and more difficult. In addition, the climate change concerned with global warming become worse and worse in the Dry Zone and high flooding in the costal areas. In some area, the weather is very hot and draught condition followed by no income, no food etc..,. The parents and elders in each

family had to allow their sons and daughters to leave the native villages to find out money-chasing pathways. That is the early period of momentous urbanization among the youngs. Actually strength and skill abilities of peoples in the rural area were exploited by the human-brokers who become human traffickers in the later times like other countries in the world. These terrible challenges had forced the people to move away by leaving their natives. This displaced people consist of jobless peoples, students who had stopped their education in the mid way, youngs who frequently miss the chance of employment, the girls leave the village only for better income or persuaded by some other people with different aim and objectives. Any house the parents and elders left at home maybe deserted and villages become depopulated. This the undesirable problem for the younger generations in the rural areas.

**Commitment of ECCDI on rural development projects in Myanmar**

These are the projects implemented by ECCDI that are related to "Rural Development in Myanmar" during 2008 - 2012

Project -1- Establishment of 100 acre fuelwood plantation project : Taikkyi Township, Yangon Division.

Project -2- Promoting food security of vulnerable population of Taikkyi Township through material, financial and technical inputs assisted by integrated agro-silvo-pastoral system of reforestation: Taikkyi Township, Yangon Division.

Project -3- Village Electrification and Community Development, in Nyaung Lay Bin village: Taikkyi Township, Yangon Division.

Project -4- Promoting livelihood and food security of vulnerable inhabitants, in Htanbinchaung village :Kawhmu Township, Yangon Division.

Project -5- Enhancing livelihood of the Nargis Victims of Myat Thar Zee Phyu Village Tract in Mawlamyinegyun Township through integrated environment, economic and social rehabilitation: in Mawlamyinegyun Township, Delta Area, Ayeyarwaddy Division.

Project -6- Initiation of food security development programme for poor households in Nyaung Lay Bin village through livestock raising: Nyaung Lay Bin village, Taikkyi Township, Yangon Division.

Project -7- Upgrading the livelihood of the villagers of Kankone village: Kyaukpadaung Township, Mandalay Division.

Project -8- Technical training on Agriculture, Livestock, Forestry/Environment and Micro & Small Business Development for Nargis affected communities in the Delta Area: Ayeyarwaddy Division.

Project -9- Poverty alleviation of Wathone Aing and Daung-O-Gyi village communities through provision of safe water supply: Myaing Township, Magwe Division.

Project -10- Renovation of the State Primary School of Nyaung Lay Bin village, in Nyaung Lay Bin village:Taikkyi Township, Yangon Division

Project -11- An appraisal of the community forests in Myanmar: Kachin State, Shan State Mandalay Devision and Ayeyarwaddy Division.

Project -12- Village Electrification by Rice-husk Gasifier in Ywa-htaunggon village, Thegon Township, Pegu Division.

**Future feasible plans on rural development in Myanmar**

To improve the development on the livehood of rural people may take long term work plan Anyhow, depending on the contribution and financial allotment of Myanmar Government, vulnerable communities may be upgraded near future by feasible plans:

- Food security and food safety
- Fresh & clean water access
- Proper nutrition programmes in schools
- Variety of income Generation sources

- Recruitment of Human Resources in every subject field
- Clean Energy access through Hydropower, small- scale solar energy etc..,
- Health programmes for pregnant women, child-care programmees
- Raise Awareness for Ecosystem conservation
- Strengthen the power of Community – Based Organizations to help development of areas (Villages as well as households in urban area)
- Motivation Spirit of the all Nationalities resides in Myanmar.

**Conclusive Remarks**

Regard with these conditions, ECCDI become award about the real situation at the rural areas of Regions and States in Myanmar. People need not only survive in traditional ways, but also need opportunities of more income and proper technological knowledges to improve their socio-economic status. Thus, upgraded educational status of the younger generations , expanded hygienic health care practices, widen accessibility of clean energy & safe drinking water should be contributed for the younger generations to enjoy their live in the rural aresa. Actrually , the fundamental spirit of Myanmar people to live happily and peacefully at the native places in their own country. Inface, the main goal intened for the development of the rural areas around Myanmar can be fulfiled by the self-responsive & motivated younger generations in the furture.

## Comment on Tangoworkshop

1.Tango international forum, grass –root workshop and study tours by sponsorships of urban –rural exchange network association of Japan ( NPO) ,Society of terraced rice fields ,research institute for humanity & nature ,and Earth science information centre, were organized by Tango Tanada Research Centre ,CSEAS, Kyoto University.The whole programme (27.10.2012 - 29.10.2012) was perfectly arranged for all participants .
2. The papers submitted in the workshop held at Workers ' Welfare centre , consist of finding ,ideas and opinions on the rural development of nationwide effort reports .All the papers are very interesting and participants acquired new exposure and further knowledges about the livelihood of Japanese farmers by some of the papers .

3.Tango field trips on 28.oct,participants had have chances tosee widespread terraces of rice field in Kamiseya Miyazu, Kyotango and sodashi.Big rice terraces were running very well ,thus , proved the successful agriculture works .Participants were attracted by the green and fresh atmosphere of the Japanese farms .

More over ,traditional way of woven rattan looms were also amazing and demonstration of wearing the lovely jackets were displayed at the woven rattan tradition exchange centre .

4. The afternoon trip on 28th.oct, participants were brought to the areas of agricultural environments and foster stork net initiatives in Kyotango( Kumihama& Kamiseya , Miyazu) .it can be clarified that the natural ecosystem and biodiversity are still alive in some area of Japan .

5. On 29th.oct,final day of study tour , workshop on conservation on ''efforts by exploring life in rural area and challenge points'' were discussed among participants held at the workers' welfare Hall ( Kyotango shi,Omiya machi ,Kawabe ).Participants had the changes to gain mutual learning experiences .The interesting discussions also included the traditional living ways of Japanese communities in the rural areas and depopulation problems they have to face at the moment .

6. As compendium ,all the Tango programmes and activities through out the whole trips are exciting ,every points are intersting and stimulate the participants ' enthusiasm and so enjoyable.Since 2012 workshop has successfully accomplished ,annually or by annually programmes should be held depending on the availability of kind contribution sources .

（日本語要約）

## 丹後ワークショップのコメント

1．丹後国際フォーラムならびに草の根ワークショップ・研修旅行は、2012 年 10 月 27 日から 29 日までの全日程が周到に準備されていた。
2．ワークショップの発表は、全国の農村開発についての発見・発想・意見に満ちていた。すべての発表が非常に興味深く、日本の農家の暮らしについて新たな知見を得ることができた。
3．10 月 28 日の丹後スタディ・ツアーでは、壮大な棚田を見る機会に恵まれた。大きな棚田が上手に管理されており、参加者は日本農家の緑豊かで新鮮な空気を楽しむことができた。
4．10 月 28 日午後の行程では、京丹後の農環境とコウノトリ飼育の取り組みを見に連れて行ってもらった。日本にはまだ自然生態系と生物多様性が残されている地域があると分かった。
5．10 月 29 日の最終日には、「農村部の生活と課題点を探る取り組み」についてのワークショップが開かれた。参加者同士で学び合う経験ができた。日本の農村社会の伝統的な生活様式と現在直面している人口減少問題についての議論も興味深かった。
6．まとめると、丹後のプログラムとスタディ・ツアー中の活動すべてが刺激的で興味深く、かつ楽しめた内容であった。2012 年のワークショップは成功裏に終わったが、支援が得られるのであれば、毎年か半年毎にこのようなプログラムが開催されるべきである。
（要約：浅田晴久）

# 中山間地域の商品化の試みとその狙い－高知県大豊町の事例－

氏原　学（高知県大豊町怒田在住農家）

## 自己紹介

1948年3月生まれ、高校卒業し高知大学事務職員として就職、2006年3月早期退職、同年4月怒田集落へUターン（パートナー同伴）

## はじめに

高知県大豊町の一集落である怒田(ぬた)での取り組みについての話しをします。この報告は成功例ではありません。むしろ失敗の危険性を抱えた取り組みとも言えます。ただ、地域と大学の連携の在り様としては新たなものと言えます。

### （1）怒田集落の概要

特産物もない名所旧跡もない。山の斜面の高度350m～500m にへばり付く様に家が点在しています。2011年（平成23年）3月31日現在、54世帯99人。ちなみに1960年（昭和35年）74世帯322人でした。現在、長期療養者、福祉施設入居者、集落外の子どもと同居者を除くと70人が怒田で生活をしています。その平均年齢は70才余りと思われます。

### （2）5年間の暮らしの中から

これまで怒田集落の存続のために少しでも出来ることを考え、山村の景観を維持することや農地を維持することを高知大学のご支援をいただき取り組んできました。この5年間で怒田集落では8人の方が亡くなっています。そこで見えて来たことは、怒田で一定の収入を得る手立てを考え実践して見せることが必要であると云うことです。このことが出来れば、積極的に怒田集落にUターンやIターンを呼び掛けることが出来ると考えました。そこで思い付いたのが怒田集落で作られている農産物の商品化です。

これを後押ししてくれたのは高知大学の先生方で、特に市川昌広先生の指導と協力を得てトヨタ財団が行っている助成事業の 2010 年地域社会プログラムに応募し、「集落と大学の協働による中山間地資源を生かした暮らし基盤の創出―高知県大豊町怒田集落の挑戦―」と云うプロジェクトの採択です。商品化もこのプロジェクトの一つの柱でしたから一定の財政的な保証が出来たことで前に進めることが可能となりました。

### （3）商品化への取組み

怒田集落の人に呼び掛け、組織を作って資金を集めて商品化して儲けようと云うのではありません。これまでそれぞれの人が思いを巡らせて取り組んできたなかで現状があると思います。だから、怒田集落に儲け話は転んでないと思っていると思います。こんな状況から次のような取り組みを行っています。

ア．生活の中で使っている物、作っている物を材料に商品を作る。決して新しい物や怒田で今までなかった物を使わない。怒田集落の人なら誰でも作っている物、作っていた物を商品化する。

イ．商品作り（パック、シールなど）は、専門家の指導を受ける。良心市や直販所に出すのではないことを怒田集落の女性に意識してもらう。

ウ．商品化する物については、管理上の問題もあり、まず乾物に取り組みました。加工品については、加工場の設置や保健所の許可取得などの課題もあり今後の取組みとしました。

エ．町の人は何に興味を示すのかあるいは何を買ってくれるのかを共有することを大切に考え、作ったら売れるかどうかをためす（試みる）機会（場所）を用意することが必要でした。そこで高知大学の先生や学生の支援により高知市の日曜市、大学一日公開等で出店を行って来ました。また、学生がネットショップ「ゆめたびマーケット」を開設し怒

田集落の商品も載せてくれています。これらの販売結果は、怒田集落の人に様々な方法で伝えられています。

オ. これまで怒田集落の女性16人から12品種が商品として寄せられています。彼女らとこれに関わっている大学の先生や学生達を対象に農産物の商品化講習会と称した集いを2011年（平成23年）9月から5回行って来ています。

この取り組みには、高知大学の協力とトヨタ財団からの資金補助が不可欠でした。過疎・高齢化の進行する地域で商品化を考えると人的支援と財政確保が大きな課題になると思います。国、県、市町村は各種の支援対策をたてていますが、私達の取り組みの様な小規模で初期的な事例ではその対象とはなりません。山村の多くは、怒田集落のように小さい枠組みで自治意識を残しています。この意識を生かす制度設計を切望しています。

**（4）商品化の狙い**

商品化に取り組むことの狙いには大きく2つあります。

**ア．怒田集落での暮らし方を探ること**

怒田集落を存続させるためには、人を増やさないといけません。出来れば若い人に住んでもらいたいですが、年金に頼らず怒田集落で暮らしていける可能性を示してこそ彼らに自信を持って“怒田で暮らしてください！！”と呼び掛けることができると考えます。

**イ．農地を維持すること。**

農地は集落の基盤だと思います。耕作者の高齢化で耕作困難地が増えています。この状況を克服するためにも育てた物が売れる状況を作ることが大切だと考えます。例えば、自家用の干し大根のために50本育てていた人が商品化用の干し大根を作るためにさらに50本育てることになれば、耕作地が増えます。米についても同様なことが言えます。減農薬の棚田米をきちっと販売できる状況があれば近所同士が助け合いながらも田んぼを続けることになると思います。こうして農地を維持することが怒田集落を存続させる基盤を守って行くことにつながると考えます。

**（5）今後に向けて**

お役所勤めをしていた人間が物を売ることは向かないと実感していますが、敢えてこれにチャレンジすることも楽しみと考えています。日曜市に立って多くの人と知り合い様々な助言や指導を受けました。こうした経験から次のようなことを思っています。

ア．5年間は頑張る。皆でより良い商品を作ることを目指し、自信を持って売れるようになるには、時間が必要だと思います。

イ．原価計算をして来なさいと言われています。私達は自分の血と汗を計算したことがありません。皆で自分の価値を考えて行きたいと思います。

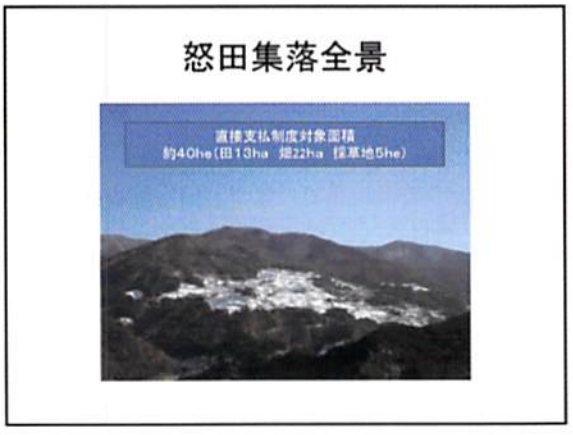
ウ．加工品にも取組みたいと思っています。各家庭で伝えられてきた料理の中に宝物を見つけたいと思います。

エ．若い人との協働も大切にして行きたいと思います。大学生の協力や農業体験希望者の受入れなどを模索して行きたいと思います。

**おわりに**

生まれた土地に帰って来て、この土地がいつまでも人が住んでいる土地であって欲しいと思いました。大豊町には85の集落があります。その一集落として特別でもなく特異でもなく普通であり続けることでは消滅してしまうのでないかと思われる状況が進行しています。多くの方々との出会いと学びを怒田集落の中で共有できるように頑張って行きたいと思っています。

草の根 棚田フォーラム イン 丹波
中山間地域の商品化の試
みとその狙い
2012年10月27日
高知県大豊町怒田在住 氏原 学


怒田集落全景
直接支払制度対象面積
約40he(田13ha 畑22ha 採草地5he)

怒田を北の集落から見る

学生による開墾地
むらさき豆を栽培中。加工を考えます
車が入れるように道を付けました

商品 ぬたたの恵みシリーズ

## ネットショップ「ゆめたびマーケット」

店長日記

こんにちは！店長の鈴木です。

高知大学の研究室で大豊町怒田地区の商品を取り扱わせていただいてます。

どの商品も自然豊かな怒田で育った美味しい商品ですので、ぜひお求めください^^

（まだ準備的な段階ですが訪れてみてください。）

## 高知市の日曜市へ学生が出店

## 放棄地の管理で放牧試験中

# 大学生の教育と怒田の景色ー高知県大豊町の取りくみー[1)]

市川　昌広（高知大学農学部）

## 1．学生にとっての怒田の景色

はじめにわたくし事ですが、私は高知大学に赴任してきてからもうすぐで4年が経ちます。それまでは、研究で東南アジアの集落によく行っていましたが、日本の集落はほとんど訪れたことがありませんでした。4年前の4月に初めて怒田を訪れたときは、ちょっとしたショックを受けたことを覚えています。このような厳しい山々が連なるなかに、こうした集落が息づいていると。そしてその景色の美しさに。4年がたとうとしている今でも、折々に変化する景色はみあきません(写真1、2)。

学生を連れていっても、やはりこの景色に感銘を受けるようです。集落の方々はお年寄りが多いかもしれませんが、この景色のなかで皆さん元気に仕事をして暮らしている。そういう様子を垣間みながら学生たちは、「私もここへきて農作業をしてみたい。大学の授業でなくてもいいからまた連れてきてください」などといいます。

この景色を綾々営々と形づくってきたのは、何代にもわたって集落に暮らしてきた方々です。学生は杉の木ばかりの中に連れていかれてもそれほど感銘は受けないと思います。人が住まなくなった朽ちかけた集落に行ってもやはり怒田でのような感銘は受けないでしょう。おそらく平地の広い農地で大型機械を使った農村でも、やはり怒田で味わうような感銘は受けません。怒田には田畑があって、人びとが毎日汗みず流し、大型機械でなく自らの知恵と技術を自然の中にうまく入れ込みながら形づくってきた景色だからこそ学生たちは感動するのだと思います。

怒田の景色や生活は、ほとんどの学生が大学に入るまで知らない世界です。多くの学生は、都会や新興住宅地のサラリーマンの子供で、親が仕事をしている姿は見たことがないと思います。ましてや土に接する仕事に携わっている親は、それほどいないでしょう。農学部の学生でも大半は農業に身近に接したことがないと思います。それなのに、なぜ、怒田に来て強い感銘を受けるのでしょうか。おそらく学生の多くは、都会の暮らしのおかしさや危うさを直感的に感じ取っているのだと思います。

見ず知らずの人と人が精神的にも物質的にも近距離で接しあう場所、効率が求められ、机仕事の要領がよい者が認められる社会、大店舗のスーパーの魚や肉売り場で、プラスティック皿にラップされて並べられた切り身、24時間こうこうと電気がつき開いているコンビニ。刺激が多く、便利な世界ですが、皆、なにかおかしいという直感、あるいは違和感をもっている学生が多いのだと思います。

都会で知らず知らずのうちに感じている違和感やストレスが心の内にあるので、怒田を訪れ景色をみたときに感銘を受けるのだと思います。怒田はただの癒しなのではといわれるかもしれません。確かに一時的な癒しが求められている部分はあるでしょう。きつい農作業を何日かすれば、もう山の集落はうんざりという学生も中にはいるでしょう。しかし、何人もの学生が、しんどい思いをしながらも、一方で爽快な気持ちになり、生きているという実感を得ています。

これは、それまでの育ちが都会か否かということも多少関係しますが、生き物としての人間の心がそう感じさせているのかもしれません。学生らは意識しているかどうかは別にして、直感的にここに人間として正しい生き方があると感じているのだと思います。そして、その直感をもたらすのが、先ほど言ったように皆さんの代々にわたる綾々営々の汗みずの結果としての景色です(写真3)。

繰り返しになりますが、怒田の景色とは、田畑、道、家、草地、川、山を含めたすべてと、そこで汗みずを流されながら暮らしている人々です。人びとの暮らしがあって、集落の景色はあります。学生はその景色に「真実」があると見抜いています。

**2．生活に必要なお金と大学の取り組み**

「怒田のように自然の中で汗を流しながらの暮らしが人間の正しいあり方」というのはごもっともで、いかにも大学の先生らしい物言いだといわれるかもしれません。そこまで言うなら、怒田で汗みずたらして暮らせますかと問われるかもしれません。もっともなことで、私は大学から給料をいただいているので妻と子供3人の今の生活ができていますし、怒田にもときどき来られます。怒田で人間として正しい暮らしをしたいと思っても、今の仕事をなげうつのは相当な覚悟がいります。

ただ、最近の学生の中には、卒業後は農業に携わって暮らしたいと真剣に考えている者がけっこういます。普段、農学部の学生と接する機会が多いのでなおさらかもしれませんが。実際には、多くの学生は4年生になり、卒業や就職が目前になると現実的になり、会社に仕事を得たりします。しかし、彼らはとりあえずお金を貯めてからまた就農を考える、などと言って卒業していきます。

怒田で生活してきた皆さん自身がここ40、50年の間、仕事やお子さんの養育でご苦労されてきたように、最低限のお金がないことには暮らしていけません。これは皆さんが身にしみてわかっており、百も承知のことです。世の中には何も好き好んで都会に住んでいるのではない人も結構いると思います。集落の方のお子さんのなかにも、定年前だが故郷に帰って暮らしたいという希望を持っている方もいるかもしれません。世の中、お金がすべてではありませんが、大きな問題のひとつは現金収入です。

農村で、しかも怒田のような山間の集落で、お金を得るのは簡単ではありません。一筋縄ではいきません。高知大学のいろいろな教員や学生が取り組んできた活動は、表1にもあるように、ひとつは怒田の自然を利用した「お金のかからない生活基盤作り」と「現金収入の向上」、そしてそれらの基礎をなす「調査」です。集落の皆さんは、実際に私たちの活動を見かけたり、協力していただいたり、ニューズレターを読んでいただいたりして、だいたいご存知だと思いますので、ここでは各々の活動内容についての詳しい説明は省きます。教員によって、学生によって取り組みの濃淡はあるのですが、皆、怒田に関心や思いを持っておりますので、これからも見守っていただき、ご興味があれば手を貸していただければと思います。

**3．今後の大学と怒田との関わり**

ここまでをまとめると、皆さんの長年の営為の結果としての怒田は人間の本来の生き方を感じることができる場所である。しかし、現実的にここで生きていくのは収入を得るという点で難しいということです。確かに難しい問題で、これは一足飛びにはよい方向には向かいません。高知大学は、表1の取り組みを発展させたり、ときには途中で消えてしまう取り組みもあるかもしれませんが、逆に新たな取り組みが加わるなどしながら、粘り強く地道に続けていくことが大切だと考えています。

小さな取り組みでも、あれこれ試行錯誤しながら粘り強く続けていくうちに、その取り組み自体はたとえものにならなくても、それ以外のことが副産物として出て、新たな広がりがみえてくることもあります。新たな人との出会いや、人と人がつながることもあります。こういった集落での取り組みは、ある意味、今の世の中の潮流に逆らっているので、人との関係を大切にしながら地道にやっていこうと思っています。

ですから、怒田が急によくなるような、大層なお役には立てないのではないかと思っています。逆に、これまで通りですが、こちらが学生の教育の場としてお邪魔させていただくことをお願いす

る方が主になるのではと思っています。学生たちは、怒田で生きていることが実感でき、人間の本当の生き方を直感で捉えていますが、それをもう少し発展させて「どうしてそう感じるのか」を考えてもらう場にさせていただきたいのです。

怒田の景色は、これまでの皆さんのご先祖や皆さんの汗に支えられています。学生たちは皆さんが働いている姿を垣間みたり、道での挨拶やちょっとした会話から、怒田の景色の背景を学びとるかもしれません。多くの学生が入ってくるとご迷惑になることや、行き届かないことがあるかもしれませんが、ぜひ、ご寛容にみていただき、学生たちにこれまで通り学びを与えていただければと望んでおります。

私が働いている農学部のことを少し話します。現在、怒田に関わっている多くの学生は、石筒さんの授業できている1年生です。一方で、農学部にはじつは集落で実習する授業はあまりありません。今年から、農業インターン実習という授業で、農学部の2年生と3年生が6人、初夏からつい最近まで怒田に通い、このふるさと館の下の畑で作物の植え付け、栽培、収穫そしてそれを加工して販売するという一連の農作業をさせていただきました。農学部でもこのような山間の集落でおこなう実習をもう少し増やして、学生の直感をより深く考えさせ、発展させるような教育をしていきたいと考えています(図1)。

つまり、1年生のときは石筒さんの授業で、2年生、3年生では引き続き農学部の実習の授業で、最終の4年生ではそれまでの体験を基にして卒業研究をするという継続性のある教育の流れを作っていければと考えています。怒田という場で人間の本当の生き方について深く学んだ学生が卒業し社会に出て、それぞれの職場で彼らが働くことによって、世の中も変わっていきます。息の長い話ですが、私たちの将来のためにも、皆様にもご助力をいただければ幸いです。

注

1）本原稿は、2012年12月8日　集落と大学の対話集会「大豊町怒田集落と高知大学が協働したこれまでの取り組みと今後に向けて」での発表資料に加筆・修正を加えたものである。

表1　怒田における高知大学の取り組み概要

| 取り組み | | 概　　要 |
|---|---|---|
| 現金収入の向上 | 焼畑 | 20 アールほどの森林を開き、火入れして、ダイコンやカブを栽培。収穫物は高知市内の直販店や高知大学の一般公開で販売。そば栽培を試行中。 |
| | ブルーベリー栽培 | 農学部の果樹栽培の教員により、ブルーベリーやキウイなど山村に合う果実栽培の試み。ブルーベリーについては、本大会のポスターセッションで発表中。 |
| | 布マルチ稲作 | 種もみのしこまれた布マルチを利用した省力的な稲作を試みている。 |
| | カンナ栽培 | デンプンイモを作るカンナの栽培実験と食品化。 |
| | ミシマサイコ栽培 | 大豊町の薬草の里構想の支援のため、集落の方がおこなう薬草栽培の補助。 |
| | 商品化・販売 | 怒田産物、農産物、焼畑野菜、ブルーベリーの商品化と販売。 |
| お金のかからない生活基盤 | 簡易製材所 | 簡易製材機を導入することで林野の間伐木、集落の支障木を利用可能にし、林地管理を進める試み。 |
| | 小水力発電 | 豊かな水と傾斜を利用して小規模な発電を試行。 |
| | ヤギによる土地管理 | 放棄農地にヤギなどの家畜を放牧することによる省力的な管理を目指す。 |
| | 学生による農作業 | 放棄耕作地の開墾、獣害対策の柵作り、農繁期の援農、集落の共同作業への参加授業、ゼミ、卒業研究の一環として多くの学生が毎週のように関わる。 |
| | シカ柵と野生動物調査 | 2km にわたるシカ柵を設置し、動物の行動に関する調査。 |
| | ニューズレターの発行 | 集落の方々や集落出身で町住みの方々に向け大学の活動を発信。彼らの意識の変化を狙う。 |
| 基礎的調査 | 生計・暮らし・集落機能調査 | 集落の人びとの暮らし、集落についての考え方、集落機能の現況と変遷。 |
| | 気象観測 | 農林業に不可欠な微気象のデータ収集。 |
| | 植生・生物多様性 | 里山の野生生物と人との関わり。 |

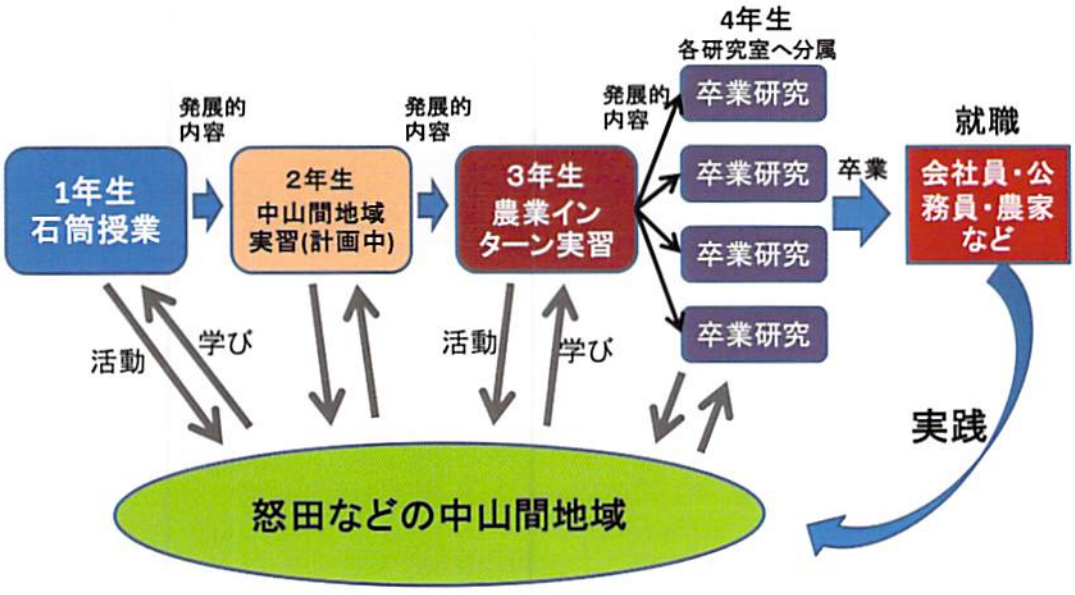



図1　実習を充実させた学生の教育体制の構築(農学部)

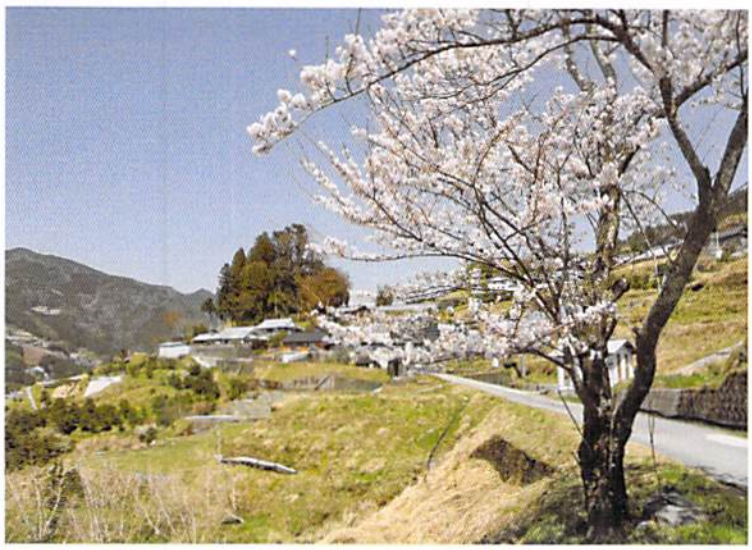


写真１　怒田の春

写真２　怒田から望む景色

写真３　田の準備。あぜにできたモグラの穴をひとつずつ泥と木づちでふさいでいく。

# 条件不利地から生まれたもうひとつの価値観
## ー阿武町スタンダードを目指してー

辰己佳寿子（山口大学ｴｸｽﾃﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ）

### 1．はじめに

日本の農山漁村では、人口減少にともなう過疎化、高齢化、少子化による危機的な状況を打破するために、地域外の人々を呼び込もうと、都市農村交流、グリーン・ツーリズム、ＵＪＩターンの推進など、さまざまな取り組みが行われている。徳野(2007)が、華やかな交流人口事業は、過疎化や少子高齢化といった厳しい現実課題から目をそらせ、都市の人口規模に“夢”を託してしまう危険性や、農山漁村が都市住民の安価な田園レクリエーションの場にされるという問題点を含むと指摘しているように、実際には、受け入れ側の地域は、都市からのお客に気遣い、その準備と対応でどっと疲れるという現象も生じている。これらの活動の背景には「交流→滞在→定住」という狙いがあるが、実際には、定住希望者は飛び込みが多く、「交流→定住」の過程を踏む人は少ないという報告もある。また、新規定住者受入後の地域社会との関係構築が試行錯誤であるとの問題点もみられる。外部からの訪問者、滞在者、定住者とどのように共生し、どのような地域づくりを行っていくのか、地域社会の経営的戦略が問われている。本報告では山口県阿武町福賀地区宇生賀の交流事業の事例を取りあげ、上記課題を検討していきたい。

### 2．事例地域の概要

#### 2-1. 阿武町の概要

阿武町は図１のとおり、山口県の北部に位置している。人口は 3,682 人、高齢化率は 43.8%（山口県人口統計移動調査2011年10月１日現在）で、県内の 19 市町村のうち、人口は２番目に少なく、高齢化率は３番目に高い。平成の合併協議においては、近隣自治体と共に広域合併を目指していたが、2004 年に基金の分配方法などをめぐり対立し、議会も合併反対派が多かったため、合併協議会から離脱した。

阿武町は、1955 年（昭和 30 年）に奈古町、福賀村、宇田郷村の３カ所が合併して誕生した。北部は日本海に面し気候が比較的温暖な「奈古地区」、「宇田郷地区」と標高約 400m の準高冷地に位置し冬季には積雪の多い「福賀地区」からなる。

図１　山口県内における阿武町の位置

出所）阿武町役場（人口・世帯数は 2013 年１月１日現在）

図２　阿武町の３地区

#### 2-2. 宇生賀地域の概要

宇生賀（うぶか）地域は、「福賀地区」に位置し、「一目百町歩」といわれるように周囲をなだらかな山麓に囲まれた盆地である。４つの集落（黒川、上万、三和、伊豆）がある。73 戸 113 人、平均年齢は 68 歳である。宇生賀地域には、農事組合法人、四つ葉サークル（女性組織）、宇生賀中央自治会と

いう組織がある。特徴的なのは、3 つの組織がほぼ地域を包括して重なっており、それぞれが複数の役割をもち、状況に応じて役を演じながら地域社会の機能を保っていることである。

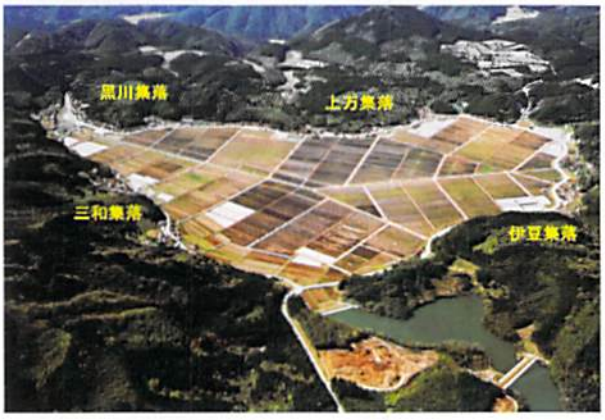



図4　上空からみた宇生賀地域

### 2-2-1. 農事組合法人「うもれ木の郷」

かつて新生代の火山の噴火によって生じた堰止湖に湖成層が堆積して生じたといわれており、標高は約 400 メートル、面積は約 1.3 平方キロメートルである。土壌は、地下 30 メートル程度までおよぶ湖成堆積物からなり、その昔は「深田」とも呼ばれるほどの湿田で畑作は困難な状態であった。大正初期に、県営第 1 号の耕地整理を実施し、1 区画概ね 20 アールの圃場となったが、それでも大型機械は入らない状況であった。

宇生賀は、もともとは湿田で、畑作物の作付が難しく、水稲栽培も作業効率が悪く、生産コストが低い地域であったため、農地の利用調整や組織営農活動の必要性に迫られていた。1990 年に、明日の宇生賀を考える会」を発足した。1991 年の国営山口北部農地再編パイロット事業では、償還金の負担で反対意見があったが、300 回以上の話し合いの末、圃場整備後の受け手の問題、各償還金の問題、農家の高齢化の問題等を組織的に対応しようと、1996 年、地権者 76 戸全員参加で「宇生賀農事生産組合」を設立した。それでも、ブロッククローテーション、水管理、収益の配分、農地法、先導的利用集積事業との整合性などの問題等が生じたため、法人化に向けて軌道修正が行われた。

法人移行には、各農家が既得権としていた水権利と所有機械の放棄が大きな問題となった。数百回の話し合いを経て、1997 年に 76 戸中 66 戸の参加により第 1 号の特定農業法人が設立した。この地域には湖底時代の樹木が埋まっていたため、法人の名称は「うもれ木の郷（さと）」となった。

全国で 20 番目、山口県では初の特定農業法人であった。所有農地の大部分を法人に預け、トラクター、田植え機、コンバインなど農業機械は全て共有で、組合農家のコストダウンを実現した。米と大豆においては経営一元化で効率化を図る一方、施設園芸部門（スイカやほうれんそう等）では、個別農家の独立採算制をとっている。

### 2-2-2. 四つ葉サークル（女性組織）

「うもれ木の郷」の法人設立により農作業の省力化・効率化がすすみ、女性達にも時間的、肉体的、精神的なゆとりがみられるようになった。そこで、4 つの集落の女性達が協力して 1997 年 8 月、「四つ葉サークル」が結成された。活動は、小物野菜等の産直活動を行う「生産クラブ」、豆腐の製造や漬物加工等を行う「加工クラブ」、花の栽培運動等を行う「環境クラブ」、交流事業を通じて所得向上をはかる「交流クラブ」の 4 つの部門に分かれている。活動経費は、法人からの補助金 40 万円と年会費 1 人 200 円、イベントなどでの販売収入で賄われている。

四つ葉サークルのオリジナル商品は、宇生賀地域で栽培されたサチユタカという大豆でつくられた豆腐である。試行錯誤のなかで商品化に乗り出し、

特産品のひとつとなっている。地産地消にこだわった豆腐であるが、にがりだけは遠方から取り寄せていた。2010 年、山口大学公開講座を四つ葉サークルと開催したことが地域の新聞に掲載された

際、阿武町の隣に位置する萩市で手作りの塩をつくっているK氏から「うちのにがりをつかってもらえませんか」という問い合わせがあった。にがりを変えることは豆腐づくりでは冒険的なことであるが、地産地消にこだわる四つ葉サークルは、再度、商品開発を進め、2011年には萩市のにがりを利用した、正真正銘の地元産にこだわった「うもれ木の郷の豆腐」が生まれたのである。

さらに、四つ葉サークルは、1999年～2001年に実施した集落点検をもとに、地域資源を示した「お宝マップ」と地域全体の将来構想「夢マップ」を作成するなどして地域づくりの担い手となっている。今は、「新しい人が参入し、後継者が帰ってきたくなる地域づくり」という目標を掲げている。

### 2-2-3. 宇生賀中央自治会

阿武町では、1955年の合併の際に、町からのサービスを等しく受けられるように集落の区割りを行い、各集落に「駐在員」を置く「駐在員制度」を実施してきた。しかしながら、集落には、集落を代表する役職ではなく、別に総代や農事組合長などがあり、窓口が混乱することがあり、住民の声を吸い上げにくいなどの問題が生じていた。また、今後進んでいく市町の再編において、これまでどおりの行政サービスができなくなる可能性があるため、自治会の自立・自律が求められるようになったため、2009年度より、集落毎の駐在員制度からいくつかの集落を自治会にまとめた自治会制度に移行した。

宇生賀地域でも、2010年3月、4つの集落がひとつになって宇生賀中央自治会が発足した。主な活動は、地区の親睦と相互扶助、健康・福祉の向上、地域の環境整備（道路河川清掃）、行政との連絡調整等である。これまで宇生賀地域では、地域のほとんどが「うもれ木の郷」の組合員であり、法人と自治会は重なり合い、自治会長と法人の組合長は同一人物である。自治会発足を機に、法人ではできなかったことやこれまで先送りにしてきた地域づくりの活動に梃入れをしようという動きがある。過疎化・高齢化の進む地域では、ひとりが何役もこなすことがあるが、それぞれの組織の機能を使い分けて地域づくりを効率的に行うことが好ましいといえる。

## 3．対外的な交流事業

### 3-1. UIJターン者の受け入れ

阿武町では、UJIターン推進のために、グリーン・ツーリズム等の都市と農村交流や新規就農・就漁をはじめとするリクルート活動を強化するとともに、定住奨励金の交付、空き家バンクの充実、定住アドバイザーを任命している。

阿武町全体でみると、新規定住者は増えつつあり、2006年から50世帯近くが定住している。新規定住者については、町内で新しい事業を立ち上げたり、新しいアイデアを出したり、芸術的な感性で地域の癒し空間を作ったりと地域づくりへの効果がみられている。一方で、定住しても地域の活動にはあまりかかわらない状況や理想と現実のギャップで転出していく事例もないわけではない。住民のなかには「新規定住の負の経験が重なれば外部に対する不信感や地域の閉鎖性が強まる可能性がある」というが声が聞かれる。阿武町の暮らしに馴染もうとしている新規定住者からは「あまり良くない事例が続くと私たちも住みにくくなる」という意見もある。

2008年4月に阿武町役場が宇生賀地域で行ったアンケート調査によると、「将来の夢」の回答では、多くの人が「人が増える」ことを望んでいる。宇生賀地域では、農事組合法人や女性の活動等の視察は頻繁に受けているが、新規定住となると話は異なる。宇生賀地域の新規定住者はこれまで2-3世帯と非常に少なく、意識と現実のギャップが大きいことがわかる。宇生賀地域に限らず、行政が掲げる「交流→滞在→定住」という流れは絵にかいた餅にすぎず、交流の持続性のみならず、交流→滞在、滞在→定住への現実的な飛躍の問題は、

さまざまな地域でもみられる現象である。

表1　宇生賀地域での課題と夢

現在、困っていること

| | |
|---|---|
| 動物被害 | 46 |
| 高齢化で草刈等が大変 | 18 |
| 外灯が少ない | 17 |
| 除雪・凍結 | 11 |
| 交通が不便 | 11 |
| 若者がいない | 7 |

（全戸が回答、複数回答）

将来の夢

| | |
|---|---|
| 人が増える | 43 |
| 風景・自然環境 | 27 |
| 交通整備 | 9 |
| お店・コンビニ | 6 |
| 昔の知恵の伝承 | 4 |
| 仲の良い集落 | 2 |

（全戸が回答、複数回答）

宇生賀地域には休憩する喫茶店や宿泊施設もない。日帰り交流は引き受けても宿泊は難しい。また、人が住んでいない家はあるが、空き家として貸し出す段階には至っていない。住民のなかには、「急いては事を仕損じるのではないか」「人口は増えてほしいが、よそ者ばかりになるのもどうか」という懸念の声も聞かれる。女性たちが「後継者が帰ってきたくなる地域づくり」を掲げているように、全く知らないＩターン者よりも、Ｕターン推進に焦点を置くべきだという考え方もある。

### 3-2.　収穫祭の成果と発展的展開

滞在や定住は難しいにしても、交流は宇生賀地域でも行っている。「うもれ木の郷」の米を、米屋を通して購入している消費者との交流を図るために1999年から毎年秋に行っている法人主催の「収穫祭」である。収穫祭では、地元の人々が、農業体験や農作物の販売、焼き肉、団子汁、お豆腐、お餅や漬物の地元料理で訪問客をもてなしていた。交流を通じて消費者がいつも食べているお米や農産物は、安全な環境で、こういう人間関係のなかでできていることを伝えることが目的であった。

交流事業の成果として、訪問者からは「こんな環境の良いところでできたお米なら安心して食べられるわ」という声があり、農家の励みになっている。これまでの訪問客は、山口県内が多いが、島根県から来ており、多い時には約100人以上も集まったこともあった。しかしながら、参加者は40名程度にまで減少し、新規参加者を開拓することができずマンネリ化を招いていた。毎年一大イベントであり、負担感やイベント疲れがみられていたことも事実である。

収穫祭の様子

この状況を打破するため、2009年10月10日の収穫祭では、町内外からの参加者100名弱に対して、アンケート調査を実施した（回答者90名）。回答者からは「地域重視の祭りを続けてください」「地元愛や包容力が感じられる」「組合員が共に協力して物事に取り組む良い地域と思う」「地域が一つとなり地域振興に取り組んでおられる」「生産と暮らしの両方を大切にしている」という感想が寄せられている。さらに、「宣伝方法の検討が必要。もっと他地域の方に知ってもらわないともったいない！お米も梨も野菜も美味しいのだから」「消費者や都会との交流について検討してはどうか」「外部消費者向けに会員制で体験を通して田舎の雰囲気と食物生産現場をＰＲする機会を実施してください」という要望もあった。

アンケートにもあるように、収穫祭は、消費者に生産者や生産地の環境を知ってもらうことには寄与したが、新しい消費者の開拓や農業の担い手の確保にはつながっていなかった。そこで、一部の消費者（米屋経由での購入者）に来訪してもらうよりも、不特定多数の消費者への宣伝が必要という考えが浮上した。やまぐちの農水産物需要拡大協議会の協力もあって、2012年、収穫祭は販売協力店と生

産者の産地交流会への形態を変えた。販売協力店とは、県産農水産物等を年間通じて集中展示した「やまぐちコーナー」を設置し、販売に積極的に取り組む地元経営の量販店である。店舗で製造している弁当用のお米に、阿武町福賀地区産のコシヒカリを使用して、消費者に産地情報を届けている。産地交流会で惣菜担当者等が田植えや収穫までの米づくり体験を行ったり、生産者が販売協力店に出向いて店頭販売を行ったり、販売協力店と産地との相互理解を深めている。

### 3-3. 学生との交流事業への挑戦

消費者との交流や販売協力店との交流など試行的な取り組みを行っているが、宇生賀地域にとっては、どのような交流事業を行っていくべきかという点は継続的な課題である。交流事業が先にありきではなく、農業での課題に接近する事業に交流を絡めることはできないか、交流活動も地域がサービスするだけの一方通行ではなく、双方向で相乗効果が見込める交流ができないだろうか、という課題が議論されてきた。

山本勉生組合長は、「うもれ木の郷のエコ 100 米は、完全有機農法で育てるお米。農薬を一切使わないから水田に雑草が生える。この草引きもぜ～んぶ人の手でやらんにゃいけんのんよ。それがたいへんでねぇ。どねぇかならんか」と提案した。「うもれ木の郷」では、安心・安全の農作物を育てており、その一環として、昨今、無農薬無科学肥料のエコ 100 米に挑戦し始めたところであった。これを育てる田は 5ha あり、そこに生えた雑草の草引きは組合員にとって重労働となっていた。

そこで、体育会系の山口大学の学生たちに白羽の矢が立った。つまり、部活動の一環として、農作業を行ってもらうという案であった。これまでも、個人的なネットワークで大学生が阿武町にかかわることはあったが、個人ベースであると継続的な展開に至らなかった。多くの場合、学生は 4 年間で卒業するため流動的であるが、部活動というかたちで学生の組織とかかわっていけば持続的であるという結論に至った。

しかし、むやみやたらに学生組織に打診するわけにはいかない。信頼関係の形成が必要である。阿武町の福賀地区で、毎年開催される福賀大農業まつりに、5-6 年前から個人的に学生たちを率いて参加している山口大学の辻多聞講師が、たまたま剣道部の顧問であったのである。

辻講師は、「阿武町から 40 キロ離れた山口市にある山口大学の多くの学生は、大学の講義と友人との時間で一日が完結してしまうことが多く、地域とかかわる機会が少ない」という実態を指摘した。そして、「うもれ木の郷」の抱える担い手不足という課題と大学生の抱える地域とのつながり不足という課題が接合し、山口大学剣道部による草引き事業が実現することとなった。

宇生賀地域での草引きの様子

山口県では、2011 年度から「中山間地域元気創出若者活動支援事業」という、大学生等による自発的な地域づくりの実践活動を中山間地域の元気創出・活性化につなげる試みが行われていたため、山口県、萩農林事務所、阿武町役場、ＪＡあぶらんど萩が後援にまわった。事業の実施に関しては、「うもれ木の郷」組合長や自治会長等の男性が中心的な意思決定を行ってきたが、途中の打ち合わせから、四つ葉サークルの女性たちが参加した。なぜなら、食事や宿泊等のお世話は女性たちの役割であり、宇生賀地域あげての大イベントになるからである。プログラムは以下のとおりである。

表2　山口大学剣道部の草引きプログラム

| | | |
|---|---|---|
| 6月17日（土） | 午前 | 開会式 |
| | | 稲と稗の見分け方の研修 |
| | | 昼食 |
| | 午後 | 草引き作業 |
| | 夕方 | 夕食・交流会（3会場。剣道部員による剣道形の披露） |
| | 夜 | 民泊（4-5名ずつ8軒） |
| 6月18日（日） | 午前 | 草引き作業 |
| | | 昼食 |
| | 午後 | 閉会式 |

草引きを終えて

### 3-4. 草引き交流事業の影響

草引き事業の実施にあたっては、女性たちの間での戸惑いがあった。これまで収穫祭では日帰りの引き受けであったが、今回の事業では、食事や宿泊について女性たちの不安が大きかった。「今回、うもれ木の郷より民泊をしていただけないかという、依頼を受け、一寸困りました。私は、今まで学生を泊めたことはなく正直どんな子ども達が来るのかわからないし、上手にコミュニケーションがとれるか心配でたまりませんでした」「今回ホストファミリーのお話を頂いて、田舎作りの我が家に、環境の違う学生達を宿泊させる事に、少々不安を抱いていました。学生達に会うまではとても緊張していましたが…」という声もあったほどだ。この不安や緊張の根幹は、見知らぬ人が泊まるということだけでなく、世代間の相違がさらなる拍車をかけていた。

しかしながら、実際に終えてみると以下のような感想があった。「夜に話しをしてみるとどの学生さんも、非常に素直で良い子で私の不安はすぐに無くなりました。草取りが大変だったという話をしながら親近感を覚えたものでした」「私たちは仕事をしながら、皆さんと話しも出来て、若いパワーをもらったし、『頑張れ！！』の掛け声で随分元気が出ました」「学生達との交流で、私達夫婦も若いパワーを沢山わけてもらい、まだまだ元気で頑張らなくてはと思いました」「途中、食事はたりるかなと心配したくらい食欲旺盛、夕飯は各集落にかえってお世話したのですが、何を作って出しても、『おいしいおいしい』と言ってあっという間に平らげるさまは、まさに圧巻、若さですね。作りがいもありました」というものであった。

大学生からの感想は以下のとおりである。

「初めはたいしたことはないなと思っていましたが、腰に痛みがきました。さっきまで近くにいた農家のお母さん方がかなり先に進んでいて驚いたとともにすごいなと思いました」「無農薬の米ができるまでのこんな大変な過程があるのかと思いました」「つらいと感じることが何度かありました。農家の人たちは普段は少人数でこの作業をされていると思うと、ある種の畏怖の念が湧きました。雑草抜きをするうちに、一つの目的を積み重ねていくことを無心でしていくことができ、この活動は剣道の練習にもつながる部分があると思います」「ヘトヘトになった後の白いむすびがこんなに美味しいなんて」「この豆腐、醤油をかけないでも美味しい、しかも香りがある」。

「うもれ木の郷」の田中敏雄事務局長は、「学生さんたちには、この苦しみがあるからあのおいしさがあることを学んでほしい。これまでの農村は、機械化等により人間関係も希薄な方向を歩いてきましたが、これからの農村は多くの人々に開放し、農村の良さを理解していただく機会を作ることだと思います」と述べている。

地域の人々にとっては、農作業が軽減されるだけでなく（作業に対しては学生に対価を支払っている）、若い世代との交流であり、学生への教育に

もつながっていること、地域が自主的に行った事業であることなどから、これまでの交流事業によるイベント疲れを払拭する事業であったといえ、交流は草引きだけには留まらなかった。宇生賀地域の人々が、地元産のスイカをもって、山口大学（山口市）での剣道部の練習を視察するなどの継続的な交流が続いている。

スイカ持参の陣中見舞い（於山口大学、山口市）

### 4．軸のぶれない草の根事業

阿武町全体だけに限らず、過疎化、少子高齢化の問題を抱えている地域では、ＵＪＩターンを目的とした交流事業を推し進められている。しかしながら、宇生賀地域は、地域の受け入れ体制や雰囲気ができていない状況下で交流事業を数多く打っても仕方がないという考え方をもっていた。もちろん、宇生賀地域も待ったなしの状況であることは間違いないが、敢えて、新規就農や定住する可能性の低い大学生を交流対象に選んだのである。機能的に捉えれば、農作業の手間換えに若い労働力を活用したということになるがそうではない。それ以上の可視的な変化が起こっていることは女性たちの感想にみられるとおりである。男性陣が指揮をとってしぶしぶ女性が協力する傾向もかつてはあったが、今回は女性たちの喜びの声が大きかった。交流事業は、宇生賀地域が開放していくためのひとつの過程とはいえないだろうか。

宇生賀地域は、湿田であった頃から条件不利地であった。「宇生賀の米はまずくて食べれない」と言われたこともあった。今は、付加価値の付いた無農薬無科学肥料のエコ 100 米をつくるようにまでなった。これは、ひとえに地域住民の努力の賜物である。また、先祖がむらを守ろうと圃場整備をやってくれたのだから、自分たちもむらを守っていなければならないという歴史的連続性のなかで自身の役割を認識している。そして、今、田中敏雄事務局長は「むらを守りながら新しいものを取り入れるという時代だ」と述べている。

どんなに良い事業であっても、機が熟していなければ実施は難しい。また、地域づくりに関する事業は、行政や大学など外部の人間が何かを仕掛けて進めるものではない。地元の方々が、自分たちで考え、企画し、試行錯誤であっても、主体的に進めていくことが大事なのである。本事例は、宇生賀地域の歩幅で、地域がそのときできることを考えた場合、学生との交流であった。それが一部のリーダー層だけでなく、地域全体への「喜び」に変わっていったことは事実である。これは、周囲に翻弄されるのではなく、地域のスタンダードを確立していく過程のひとつではないだろうか。

### <参考文献>

安藤和雄・辰己佳寿子・市川昌広、2012、『第二回　文化と歴史そして生態を重視したもうひとつの草の根の農村開発に関する国際会議　報告書』、高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト・京都大学東南アジア研究所実践型地域研究室。

辰己佳寿子・農文協編集部、(2009)、『「女性の力」で地域をつくる』(『農村文化運動』194 号)、農山漁村文化協会。阿武町、2008、『阿武町中山間地域づくり指針』。

徳野貞雄、2007、『農村の幸せ、都会の幸せ』NHK 出版。

## 京丹後市上山の取組

桒原　稔（夢丹後の杜）

京丹後市丹後町上山の「夢丹後の杜」代表の桒原です。

上山は丹後半島の山間部に位置し、中山間地域です。これが上山をヘリコプターで空から撮影した写真です。（ブータンと同じだ、との声が会場から）集落のある真ん中部分とこちらが裏側、そして離れてあるのが上山の田んぼです。

先ほどから過疎の話がされていますが、現在、上山区は５戸１１名です。そのうち、私含めて２戸がＩターンで、上山にずっと住んでおられる方は８０歳を超えています。私も６１歳になり、もう一人は７０歳を超えており、限界集落ではなく、限界を突破しています。そういう意味では非常に危機感を持って、今後どうするべきかを必死に考えている段階です。もともと上山では昭和３０年には１７戸９２名が住んでいました。写真の緑の濃いところは、実はスギ・ヒノキが植林されたところですが、こういう場所は全て田んぼでした。田んぼを作らなくなったら畑になり、畑を作らなくなったら植林され、そういう意識が定着しておりまして、いまだに畑から山に植林される状況です。かろうじてこれだけの水田が残っていますが、今年も１軒リタイアされます。１軒リタイアされると５０～６０アールの田畑が、また、放棄地にされます。今後の課題がたくさん出てきます。

これは別の角度から撮った上山ですが、こちらが集落になります。私の夢丹後の杜が本拠地としているのは、この部分です。昔はここにも田んぼがあり、全部上山の田でした。ずっと植林されていますが、段々畑の跡が見えます。この部分で１ヘクタール、こちらで１ヘクタール、全部で約３ヘクタールの田を３戸で、今年１戸やめられたので、２戸で維持しているのが現状です。これは集落の裏から見た写真で、向こうに日本海が見えます。集落の真ん中を通りが走り、この通りを中心にして５戸の家が建っています。

私は平成２年に家族４人で上山に移り住みました。私と妻、当時小学校２年生と６年生の子どもたちとです。実は目的があってここに来たのではなく、平成元年にここに遊びに来て、この景色を見て、突然、住みたいとの思いにかられて、平成２年４月からこちらに移住させてもらいました。何故ここに移ったのかということですが、私、実は滋賀県生まれで、小さい頃は周辺に田畑あり、川ありののどかな田舎風景がありました。ほとんど高度経済成長の中でなくなってきましたが、唯一、ここの地域だけが、そういう風景、昔のあるいはふるさとの雰囲気が残っていたのかな、ということをあとから実は感じました。

夢丹後の杜は非常に荒れておりました。こちらの田んぼは３枚あるんですが、私らが来て１０年間荒れていました。木が生え、ススキのすごい株が生えていましたが、１年に１枚づつ３枚を再開墾し、復活しました。この部分にはまだ、荒れた田が残っていますが、草刈りしなければこんな状態で、背丈よりも高くススキが生えています。真ん中部分が荒れていることによって、中山間直接支払制度があるんですが、田んぼが連担でないので制度を受けられない。ただし、こういうところを復活させることによって、それも条件に入っているので、制度が受けられるようやってきています。

私が移住して数年経ってから１軒がリタイアされました。すると５０～６０アール荒れました。４～５年放っておくと木が生えてくる。その木を切り、また、田んぼに復活していった。これが夢丹後の杜の一番上の田んぼです。特別栽培米を作り、少し高値で売らしてもらっています。

これは夢丹後の杜の丸太小屋作りです。一番はじめは、山から水を引いて、コンクリートの水槽

に水を貯え、高低差で水をこちらへ持ってきます。たくさん水を使うとなくなりますが、しょっちゅう使うわけではないので、一日ほどで満タンになり、十分使えます。丸太小屋は、近くの放棄された田んぼに植えられたスギを使って作りました。したがって、地元のスギです。プロが作られるとしっかりしたものになります。現地で材料を調達し、コストが非常に安く、木を切った場所を元に戻すことも可能です。そういう意味で日本ではあまりなじみがありませんが、こういう丸太小屋・ログハウスもいいのかなと。周りの風景にもマッチしており、是非ともこれをあちこちでやっていただきたいと思っています。内部はこういう形です。

これは７年前に夢丹後の杜の看板がかかったときの様子です。

ちょうどまる８年前（平成１６年）、台風２３号で丹後地方はあちこちで大変な被害が出ました。テレビなんかでも出ましたけれど、由良川が氾濫し、バスの上で助けを求めていた映像が出たときです。私らの上山も大変な被害が出ました。先ほど見ていただいた田んぼへのこれがもともとの用水路です。山の斜面を切って、コンクリートではなく土のままです。そういう形で毎年そうじをしながら水を通してきました。それが原形です。台風２３号で山の木が非常に荒れ、強風が吹き、根こそぎ木が倒れ、ここは土砂くずれで、惨憺たる状態になりました。それを、私は５年がかりで一人でコツコツ直してきました。稲を作っているときは水が必要なので、水が通っている時期は修理できません。収穫が終わってから、あしかけ５年間、コツコツとこういう形で修理しながら、道も拡幅し、とにかく軽トラックぐらいは通れるようにしたいということで、760メートルありますが、今年の春にようやく奥まで通しました。これは岩がふさいでいるのですが、ダイナマイトの許可もないので、岩をタガネで割るなどして、辿り着きました。

地元の小学生の田植え風景です。１１年ほど前から小学校５年生が総合学習ということで、ここまで来て、種まきから田植え、－私のところの夢丹後の杜は自然との共生ということで、農薬・化学肥料を一切使っていません－そういうことで除草も手でやっていただく、草取り２回はだしで入ってもらってやっています。生き物の勉強会や看板作り、なども。これは８月に入ってかかしのコンテストです。今年は学生５人しかいなかったので、できませんでした。これは今年の「はざかけ」です。今年は１０月２２日に稲刈りをしました。

後ろにおられるのは京都大学の生活協同組合の皆さん・学生さんです。下がっているのは黒米です。３年前から京都大学の生活協同組合で使っていただいています。小学校５年生の子どもたちは３年前から修学旅行として、京都大学の生活協同組合に昼ご飯を食べに行き、そこで交流会をすることになっています。

ふるさと共援活動と里ボラに５年ほど前から取り組み始めております。ふるさと共援活動は京都府の事業であり、上山のような限界集落と都会の企業・大学・ＮＰＯ法人などとが共援して地域の再生を図ろうという事業です。上山は最初の３年間からやらせていただいており、いっしょに里山ボランティア活動も並行してやらせていただいています。京都大学農学部の秋津ゼミの学生さん、また、ふるさと共援活動で紹介いただいた「竹と緑の会」の皆さんに里ボラに来ていただいています。

耕作地周辺の荒れた田んぼに８年ほど前からイノシシが出没しまして、それこそ田や畑の周りを全部囲いをしないと収獲できない状態です。周辺の荒れた田んぼで普段できない環境整備をしていただいています。これも横の田んぼです。こういうふうに竹を切って、イノシシが入ってこられないようにシシ垣を作ってもらっています。これが柵です。こういう棚田の斜面を整備していただいています。こういう作業は耕作者一人ではできま

せん。また、皆高齢者だからできません。ふるさと共援活動事業と里ボラ事業で環境整備され、何とか田畑が維持されている状況です。

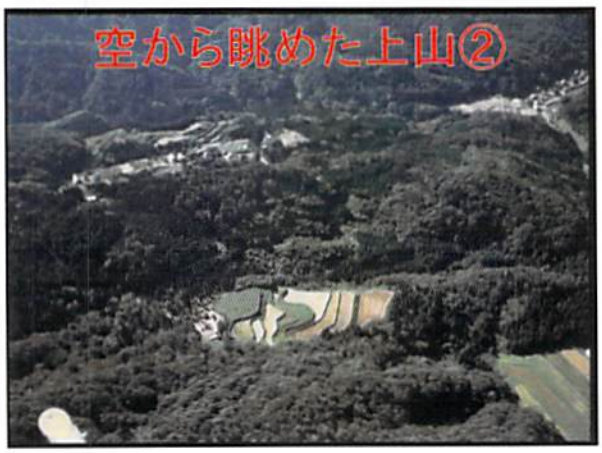
ここ４・５年荒れた田であったところです。草は生えていたのですが、徐々に草を刈り、耕しながら、ニンニクを作っています。１０アール近くあります。ニンニクは案外と獣害に強く、イノシシも食べません。遊ぶことはありますが全滅することはありません。山間地の作物としていいかなと。４年目になりますが、当初２年間は生で出荷していました。現在は、生のニンニクを私のところで加工し、黒ニンニクとして販売しようと思っています。何故そういうことを考えついたかというと、先ほどから言っていますように、もうすでに限界にきている、Ｕターンも非常にむずかしい状況で、Ｉターンしても若い人たちが経済的にきびしい、そういう意味では仕事をしっかり作らないと来てもらえない、そういうことも含めて田畑の維持もしていかなければならない。

この写真は夕日ですけど、必ず朝日は昇るので、それを目指して何とかやっていきたいと思っております。以上で報告終わらせていただきます。

上山の取組
京丹後市 丹後町 上山
夢 丹後の杜
代表 菜原 稔

上山

空から眺めた上山①

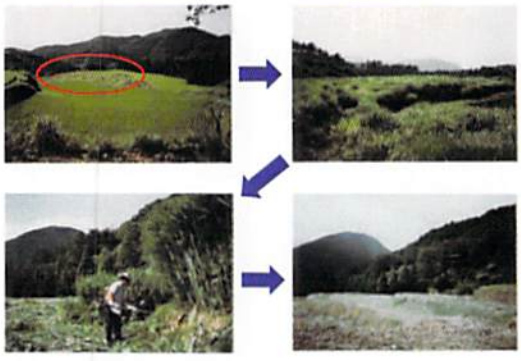

空から眺めた上山②

日本海を望む上山の棚田

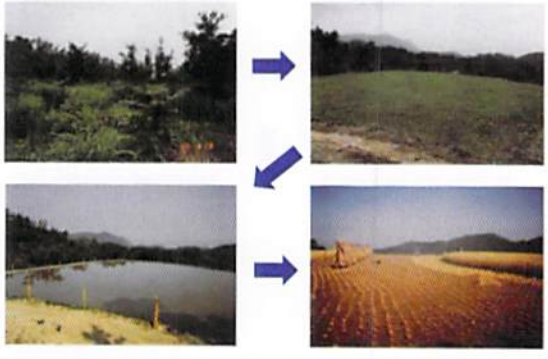
上山の棚田 実りの秋

## 上山集落からの風景

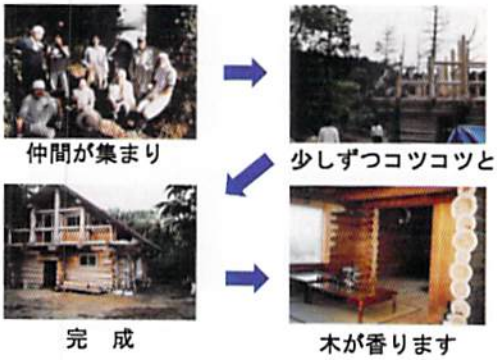
## 荒廃棚田の整備①



## 荒廃棚田の整備②



## 手づくりログハウス



仲間が集まり

少しずつコツコツと

完　成

木が香ります

## 「夢丹後の杜」の拠点完成！

## 台風23号　被災前の用水路

## 台風23号　被災状況

## 台風23号　復旧作業

## 台風23号　復旧作業

岩盤もあり復旧に5年を要した

## 宇川小学校の稲作体験

田植え

やったー

草取り

やったー

## 宇川小学校の稲作体験

待ちに待った
稲刈り

うーん　満足

地元 宇川小学校の稲作体験は
平成１４年から行っています。

## 「ふるさと共援活動」と「さとボラ」

活動状況「放置竹林の整備①」

活動状況「放置竹林の整備②」

棚田の保存・継続 「にんにく作り」

ご静聴ありがとうございました

## 意見交換の記録

（会場からの質問）

農村から都会に人が出て行くということですが、どういう経緯があるのでしょうか。

（氏原さん）

多分、質問の方への回答にはならないと思うが、この間、若い学生たちと係る中で考えていることは、日本の農村において若い人たちが勉強してよい成績の人が大学へ行き、大企業に行く流れを否定できないし、それが悪いとは絶対いえない。

今まで私たちは地域の文化、古い言い伝えの伝統文化を残すことがりっぱなことのようにいわれているのだけれど、私は逆だと思っている。今、思っているのは、若い人たちが農村に入ってきて、新しい文化を作りませんか、というくらい地域が開けないと、もとに戻るものも戻らない。若者が東京の文化にあこがれるのなら、そこでがんばるのもいいのだけれど、若者たちが農村に入って新しい文化を作ってくれませんかと。今までの私たちの先祖が培ってきた農村文化を否定するわけではないけれど、そこにこだわっていては、農村は若者に魅力ある地域にはならないような気がしている。今、本当にいろいろな価値観をたたかわさないといけない。若い人たちと話していてそう思う。だから古い話をして俺たちはよかったと言っても、彼ら若者たちには分からない。彼らがおもしろいとか、自分たちがこういう地域にしたいという地域を作らせる環境をどうやって私たちが持つのかが問われているのだと思う。多分、ブータンも今後は、同じことがいえるのではないでしょうか。

（ジャミアン・チョダさん）

村から都市に人が出て行く現象は、開発と発展にともなっておこる一般的で普遍的な現象ではないか。若い人が教育を求めたり、教育を受けた人たちが楽に暮らせる（イージーライフ）ような都会に出ていくことは、一方では当たり前のことではないか。

ただし、日本とブータンの村はまったく違います。日本の農村は、電気も道路も店も全部ある。しかし、そういうところでも、東京・大阪・京都へ出て行っている。

ブータンの場合は、首都パロからでさえ３日歩いて自分の村に行くところが多い。電気もきていないし、手仕事で牛を使ったりの作業で、今も農業をしている。ハードワークで生活するのも農業するのも大変な状況です。

日本は社会インフラの整備をしてこられたが、それは村から町への人の移動、過疎の解決などになっていなかった。ブータンはインフラ整備もされていませんが、ブータンでは違うことを考えなくてはいけない、インフラ整備するとき、この問題がでてくると考えています。

（安藤さん）

補足します。教育の問題など常識化されたこととして言われています。しかし、教育や経済の問題済の問題だけなら、もっとUターンの人が増えていい。美山町の人と話していると、そういう問題ではないということを村の人は言わないだけで本当のところはわかっていると私は思っています。

私はバングラディシュ、ミャンマー、ブータン、インドなどに行っていますが、今、大変な勢いでアジアの村ではこういうことが起こってきています。ブータンでは、村の生活を町の生活に近づければ幸せになれると信じている。バングラでも電気やインフラ整備を信じてやっている。でも、日本の現実はそうではないという経験が多い。日本の過疎の問題は確かに深刻な面があり、有効な対策もうてない状況です。でも、我々日本の経験、決め手となる解決策はないのだが、日本でのインフラ整備という手段が

現実に機能しなかったということはアジアの人にはインパクトがある。現実はそうではないということを分かってもらう。そこから始めることしかできないのだと思います。

（司会：本田さん）

ただいま、出された意見はある意味で問題提起でもあります。今日の講演と報告、明日の現地視察や丹後での取組報告を踏まえて、３日目のワークショップでは忌憚のない意見を交わしていただきますようお願いします。

# 第２部　丹後の活動報告

丹後での活動を報告された皆さん
（久美浜町農業センターにて）

## 宮津市上世屋の取組

井之本　泰（合力（コウリョク）の会[1]）

今日、お集まりの大多数の方が、９時から１０時過ぎまで、上世屋に来て現地を見ていただきましたので、話すことがなくなりました。実は、中村貴子先生、安藤さん、新井の福満さんたちと２年前の２月に同じようにフォーラムをやっておりまして、また、同じ話をするのは疲れます。本日、報告される他の方は、資料を作り、ビジュアルにお話の準備をしておられますが、私はこれ１枚しか用意しておりません。今日、参加者の方にも褒めていただきましたが、合力（コウリョク）の会は、こういうシオリを作るのがおじょうずですね、と。きちんと作っておられますね、とお褒めのことばをいただきました。これは「上世屋の棚田」ですが、その他「合力の会」「藤織り」など、今４種類ほど作っています。そのうちの一つ「上世屋の棚田」を見ながらお話をさせていただきます。

まず、これを広げていただいて、かつての上世屋がどの程度の耕作面積というか耕作地が点在していたか、ということをご覧いただけたらありがたいです。水色とグリーンの表示をしておりますが、１９７５年から２０１０年まで耕作されていたグリーンの表示を見ていただきたいのです。集落はちょうど右隅の赤い枡状に表示されています。集落の周辺はもとより、ずっと上の方の木子集落、左の方には大宮町と宮津市との境、高山のブナ林、内山のブナ林がありますが、そういったところまで田んぼが耕作されていたということです。上世屋の田んぼが非常に広域的に耕作されていたことが分かっていただけるのではないかと思います。

ところが、２０１１年、水色表示に変わります。そうすると激減してしまうわけです。これはどういう意味があるのかというと、道路がきちんと整備されることによって、非常に便利、要するに刈り取った稲を運搬するのにいいところしか耕作しなくなったことが一つ言えます。また、この段階で非常に農業の方が変わって、伝統的な耕作というより機械化がされたということで、こういった集落の周辺と道路の脇の便利のいいところしか耕作ができなくなったということです。現在、２０１１年耕作されている所ですけれど、これらを見ていただくと集落周辺がほとんどです。今日、ご覧いただいた合力の家のところのノーダという水色の上の段のところは、宮津市栗田のお酢屋さんの飯尾醸造さんが無農薬のお米を作っているゾーンです。そのゾーンの下の方が私たち合力の会が３７アールほど耕作しています。このように集落を中心にして上世屋の棚田を何とか維持管理して耕作していることを読み取っていただけたらと思います。

今日、午前中、上世屋のあとに袖志の棚田、さきほどはコウノトリの市場の田んぼとこうして一日他のところを見せていただくと、何と上世屋は大変なところを耕作しているのだろうということを実感します。先ほど３７アールと言いましたが、枚数にすると１５枚の田なのです。しかも、それは今は１５枚なんですが、これでも所有者の方が少しでも耕作しやすいように３枚の田を１枚の田にされたりしたわけなのです。はじめはそういうことに気がつかなかったのですが、耕作しているうちに、１枚の田んぼの中で、奥の方は水はけが悪かったり、真ん中になると水はけが良かったり、手前は何回やっても石が出てきたり、３枚の田を１枚にしたことによって面積的には効率が上がったように一見みえるんですが、実は田んぼを維持管理するのがむずかしいことに、最近気づきました。それで元に戻すわけにいかず困っているわけです。また、川から水を取り入れ、田に水を入れます。イネ（小水路）といいますが、かつては水を直接田んぼに入れず、迂回させて水温をある程度上げて水を入れることが、山あいの棚田の耕作

では必須なのです。ところが田んぼを一枚にしているために、どうしても無理になって、水口から入ったところの2メートル四方ぐらいの稲の生育が悪くなる。タイム・ラグがおき、こちらはいいというので稲を早く刈りとり、こちらはまだということで置いておくというふうに、棚田の顔色を見ながら調整しなくてはならない。上世屋と比べ、袖志も市場も作りやすい田だというのが印象でした。

私たち合力(コウリョク)の会といいまして、実際、幼稚園の子供から若いお母さん、私の知り合い、ご年配の方含めて、やり始めてもう6年になります。よく質問されるのは、後継者はいるのですか、です。一般にいわれる後継者は若い人がいるかということですが、上世屋でそういうことを言われると、エッ　と思います。最近思っているのは、6年も続いたらこれはいいんじゃないか、と開き直っている思いがあります。藤織りも28年もやっていたら後継者づくりになっているんじゃないか。続けていることそのものが後継者づくりじゃないかと、最近は開き直りというか、そういう思いでやっています。そうすると、少々のことではこたえなくなっています。将来、上世屋の棚田はどうなるのだという思いは思いとしてあってもいいが、実際のところは、一年一年、今年も何とかお米がとれたな、今年は苗の育ち方が悪かったので、来年はもうちょっと一工夫必要だなと、一年一年の積み重ねが、基本的に土から学ぶ、田んぼから学ぶ、自然から学ぶ、そういう心持でやった方がいいなあと思っています。

じゃあ、何で食べているのか、ということになります。草刈り機の混合油代でるのか、という話になります。そうすると、多少なりとも金が必要になってきます。そういう時にどうするかというと、合力の会で育てた米はもちろん合力(コウリョク)してもらった人には5キログラムなり10キログラムなりを合力米(コウリョクまい)として差し上げるのですが、残った米を30キログラム1万円から1万2千円でお譲りするということです。会場から、安いなあ、という声も聞かれました。お米を作っている人はよく分かるのですが、安いのですよ。でも、よくよく考えてみると、みんなの手を携えて稔りを得たものですので、そんなに1万5千円や1万6千円言い出すと、ついついそっちの方に、欲の方に行きますので、損して得を取れということもありますのでいいんじゃないかと思います。ですから、余剰米といいますか、余剰米もないのですが、資材代、油代というかそういうものに用立てています。

じゃあ、井之本さんの食いぶちは？と聞かれたら、ないのですな。どうするかというと自分で野菜作らなあかんなあと。だから今日見ていただいたように、コンニャクを作り、ソバを作り、加工グループから頼まれた無農薬のニンニクを作り、上世屋の婆ちゃんたちが作っていたソバを作り、そういったもので何とか食い延ばしをする、生きていく、そういうことをやっている。だから、他のところのように将来性があって活発にやっているのではなく比較的地道に、見た目に合ったように、合力の会もNPOになっているわけではなく、いつでもやめられるし。適当というか、少し余裕というか、一年一年積み重ねることによって、私たちの合力(コウリョク)の会が合力(ごうりき)の会と間違って読まれないように、丹後の上世屋に合力(コウリョク)の会があるんですね、と言われるように認知してもらえるぐらいまでは何とか続けていきたいと思っています。

注1)：「合力の会」とは

コウリョク（合力）とは丹後地方の方言で、「手伝」「加勢」「援助」を意味する言葉です。

子供から大人までみんなで力を合わせて、過疎と高齢化により耕作することが難しくなった棚田約30アールにて、昔ながらの手植えや天日干し（稲木干し）による米づくりに取り組んでいます。

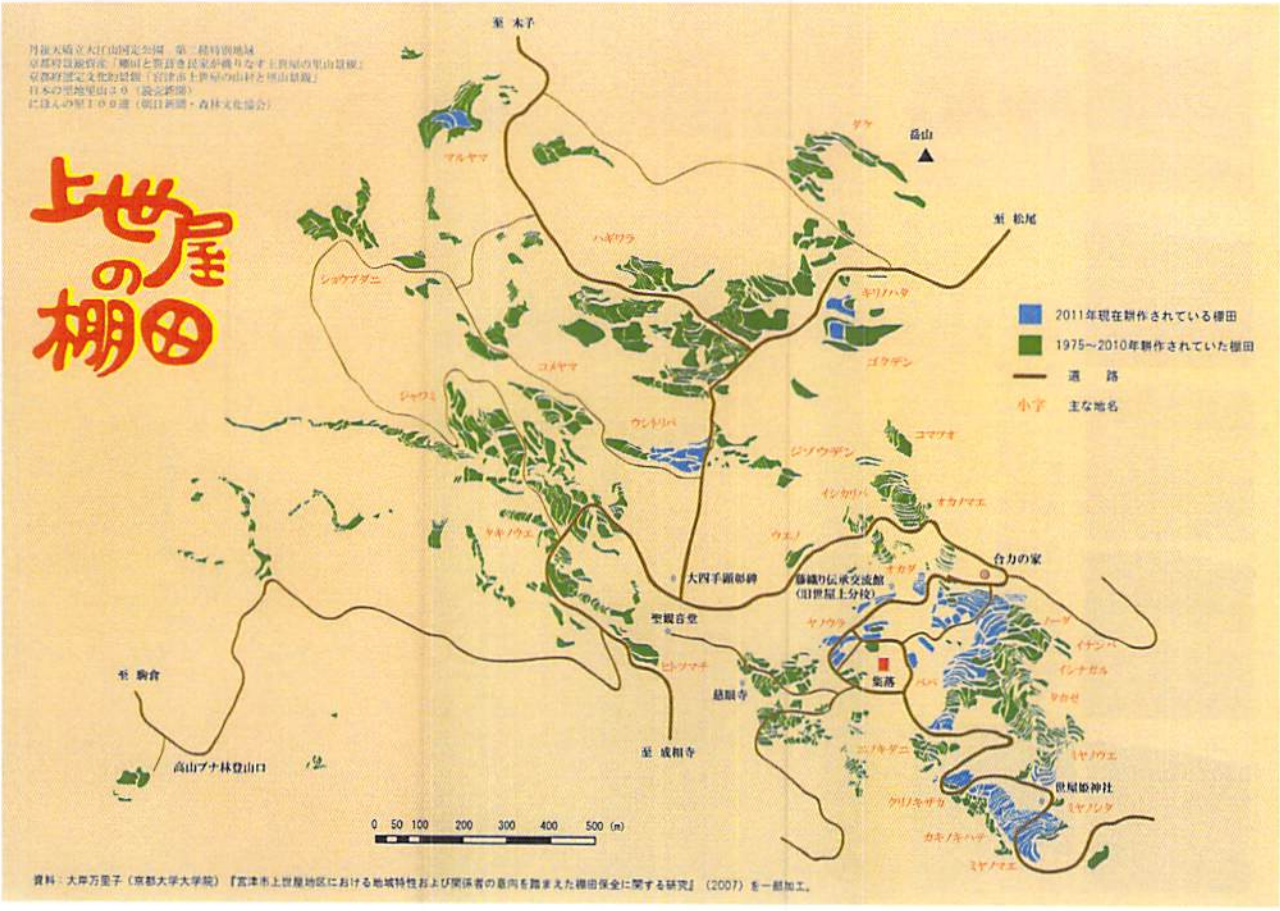

上世屋の棚田
丹後天橋立大江山国定公園　第二級特別地域
京都府景観資産「棚田と祭礼き民家が織りなす上世屋の里山景観」
京都府歴史文化的景観「宮津市上世屋の山村と里山景観」
日本の里地里山30（設定評価）
にほんの原工100選（朝日新聞・森林文化協会）
至 木子
至 松尾
至 駒倉
至 成相寺
高山ブナ林登山口
大四手鎮郷碑
聖観音堂
慈願寺
織り伝承交流館
（旧世屋上分校）
台力の家
集落
世屋姫神社
2011年現在耕作されている棚田
1975～2010年耕作されていた棚田
道　路
小字　主な地名
0 50 100 200 300 400 500 (m)
資料：大岸万里子（京都大学大学院）『宮津市上世屋地区における地域特性および関係者の意向を踏まえた棚田保全に関する研究』（2007）を一部加工。

図　上世屋の棚田の状況

## コウノトリネット京丹後の取組

野村　重嘉（コウノトリネット京丹後）

コウノトリネット京丹後の代表をしております、京丹後市久美浜町市場の野村重嘉と申します。

私たち京丹後市久美浜町の川上地域は、豊岡市のコウノトリの郷公園から距離で約７キロメートル、飛行時間で約１０分の所にあり、コウノトリが２年前からに飛来するようになりました。そこで、コウノトリを何とかこの地に定着させたいという想いから、農業を通じて田んぼの生き物を増やしていく活動に取り組んでおります。

この写真は、冬場の野鳥の餌場としてキャベツの収穫後に水を張った状態にした田んぼで、初めてコウノトリが餌を食べている様子が確認できた時の写真です。

次の写真は、私たちが川上営農組合という組織で京都生協との産直を行っておりますが、営農組合で行っている勉強会の様子です。豊岡のコウノトリの郷づくりで頑張っておられる西村いつきさんをお招きし、コウノトリ育む農法を学んでおります。この時が３回目となります。

次の写真は、豊岡市戸島で生まれたハチと豊岡市野上で生まれたジュウが、川上地域の布袋野の松の上で戯れている写真です。

次の写真は、川上谷川で餌を捕っている様子です。

次の写真は、今日来場されているエチエ農産の近くの田んぼに来ている写真です。

次の写真は、コウノトリをこの地から逃したらあかんという想いから、豊年エビとか生き物が豊富な布袋野に、初めての巣塔を建てた写真です。

次の写真は、田植えの終わった田んぼにジュウロクも加わり、３羽で餌と捕っている写真です。

次の写真は、布袋野の巣塔に止まっている様子です。

次の写真は、川上谷川の下流にニジュウも加わり、ハチ、ジュウ、ジュウロク、ニジュウの４羽が揃った写真です。

次の写真は、マムシや小さいザリガニを食べているところです。

私たちは、この地にコウノトリを何とか定着させるため仲間を増やさなければならないという想いから、「コウノトリと共生するまちづくりネットワーク京丹後」を設立しました。設立総会には、コウノトリ野生復帰推進連絡協議会の会長をしておられる保田茂さん、西村いつきさんも出席いただきました。保田さんの講演では、昔はこの川上地域にドジョウやフナがたくさんいた。３面張りコンクリート水路にして生き物が住めない環境にしたのは誰なのか。幸せを運ぶ鳥と言われるコウノトリの力を借りて、昔のような自然豊かなふるさとづくりに挑戦してみませんかとお話を聞き、目から鱗が落ちると言いますか、３０名でスタートした会員も現在６０名に増えております。会員にはエチエ農産や布袋野の田吾作、品田の誠農海部など農業生産法人も加わっていただいてます。

環境保全型農業への取組を進めるため、富山県へＣＯ２を削減する環境に優しいヘアリーベッチという新しい作物の視察に行きました。昨年度は、市場で約２ヘクタールを作付しました。黒大豆、水稲の後に作付しています。

無農薬、無化学肥料栽培は雑草との戦いになりますが、ヘアリーベッチの根から出るアレロパシーの成分が雑草を抑制する効果が高く、ヘアリーベッチの後に水稲を作付した田は、見事に雑草が見られませんでした。今年は、今ちょうどヘアリーベッチの播種が終わったところですが、市場を中心に多くの方に栽培していただいております。

この写真は、播種から１ヶ月後のヘアリーベッチの様子です。刈り取る時には１メートル程の高さに成長します。

次の写真は、今日現地視察していただいた冬季

湛水の様子です。

次の写真ですが、昨年１２月１９日に、虹の下にコウノトリが舞い降りる瞬間の写真が撮れました。コウノトリの郷公園の放鳥に秋篠宮さまが来られ、その後に男の子がお生まれになった。私たちもこの虹の中のコウノトリのつがいが、丹後でヒナを育ててくれるであろうと期待しました。

この１２月１９日は、市場においてコウノトリの餌付けに成功した日でもあります。この地域は雪が深く、昨年も今年も５０センチメートル位積もりましたが、餌が捕れなくなっては餌付けをしているコウノトリの郷公園に帰ってしまうのではないかとの心配から、餌付けを始めました。青色のコンテナ、青色のバケツとコウノトリの郷公園を真似たところ、餌を食べに来るようになりました。ドジョウが足りないためアジを混ぜて与えています。餌付けが定着しました。

この写真は、餌を食べた後のご馳走さんのラブシーンです。

次の写真は、雪の中でも餌が捕れる水路に来ている写真です。

また、豊岡コウノトリファンクラブ会長の柳生博さんが、我々の取組を激励に来られました。中山京丹後市長も同席いただきました。

この写真は、４月１４日に永留でマウンティング（交尾）している様子です。写真ベタな私が１０枚撮影できるほど、長い時間行っていました。

この交尾の前３月１日までは市場の巣塔にいたのですが電柱に巣を作り始め、感電死の危険があるため電柱の巣を取り除くと、徐々に下流の電柱に移動し、とうとう永留まで行ってしまいました。この永留でも何度か電柱に巣作りを繰り返し、４月１７日に有志で近くに巣塔を立てたところやっと電柱から離れ、翌日には巣塔で産卵が確認されました。いつ産卵してもおかしくないぎりぎりの状態でした。

この巣塔で、５月２９日に３羽のヒナが確認されました。ハチベエ（前述のハチ）とコウチャンが誕生させた。「初めて放鳥３世のヒナ誕生か」と思いきや、１日早く豊岡市福田で１羽のヒナが確認されました。

第２回コウノトリネットの総会で、中山京丹後市長からハチベエとコウチャンの特別住民票が交付されました。コウノトリの郷公園名誉館長の松島先生に記念講演をしていただきました。

この写真は、永留で誕生した３羽が巣立ちする前日の様子です。運悪く１羽が飛び立つ練習中に巣塔から落下してしまい、半月ほどコウノトリの郷公園に移して飼育することとなりました。しかし８月３日には、この写真のように無事に女布の川辺に放鳥することができました。

次の写真は、京丹後市丹後町在住で１１５歳のギネス世界一の長寿に認定された木村次郎右衛門さんに、虹の中のコウノトリの写真とコウノトリ米が敬老の日に中山市長から手渡された時の写真です。木村さんからはサンキューベリーマッチとお礼をいただきました。

次の写真は、京丹後市峰山町長岡のため池に、永留で誕生した２羽を含めコウノトリが飛来した様子です。現在、永留で誕生した３羽は、うち２羽はコウノトリの郷公園の近くにいますが、１羽の雄は播磨から和歌山を経由し現在那智勝浦に行っております。非常に広範囲に活動します。私たちの地域だけではなく京丹後市一円に取組の輪が広がっていけばと願っております。

私の田では、昨年約１万匹のドジョウを放流していましたが、水深が浅くサギの餌になってしまいました。コウノトリはサギに比べ足もクチバシも長く、５０から６０センチメートルの水深にすることでサギの被害が防げるということで、重機を使って改修しました。水路と田もつなぎました。

以上、コウノトリネット京丹後の生き物と共生する活動を紹介しました。参考になることは取り組んでいただき、京丹後市全域が自然豊かな地域になることを願っております。ご静聴ありがとうございました。

# コウノトリも すめるさとづくり

コウノトリと共生するまちづくり
ネットワーク京丹後
代表　野村重嘉
2012年10月28日

## コウノトリネット京丹後の概要

- 設　立　2011年10月2日
- 代　表　野村重嘉
- 会員数　44人（20011年11月1日現在）
- 設立の目的

京丹後市民がコウノトリを愛し、コウノトリのエサとなるカエルやドジョウなど多様な生物を増やす農業の実践などを通して餌場を確保し、安全・安心な農産物による市民との連携を図り、もってコウノトリと共生するまちづくりを進めることを目的とする。

## コウノトリネット京丹後が行う事業

◎　自然農法を行う農業者、有機JAS、特別栽培、エコファーマーの認定農業者など「生物多様性を育む農法」を実践する農業者の交流に関すること。

◎　コウノトリの営巣のために巣塔を立てたり、「生物多様性を育む農法」に取り組む圃場を点から面へと広げるため、魚道の設置、冬期湛水や水田の落水時期を遅らせるなど餌場の確保に関すること。

◎　「生物多様性を育む農法」で収穫した農産物の地産地消及び地産他消の推進に関すること。

◎　研修会、講演会、先進地視察、写真展及び交流会の開催など、会員相互及び市民・団体などとの結びつきを強め、京丹後市における取り組みの輪を広げる活動に関すること。

◎　その他目的の達成に必要なこと。

J0010とJ0008 4月21日10:02久美浜町戸原

J0010とJ0008 4月26日07:17久美浜町郷

布袋野巣塔建立 4月24日

3羽揃った 5月11日07:03久美浜町出角

10. 5月13日07:48布袋野巣塔

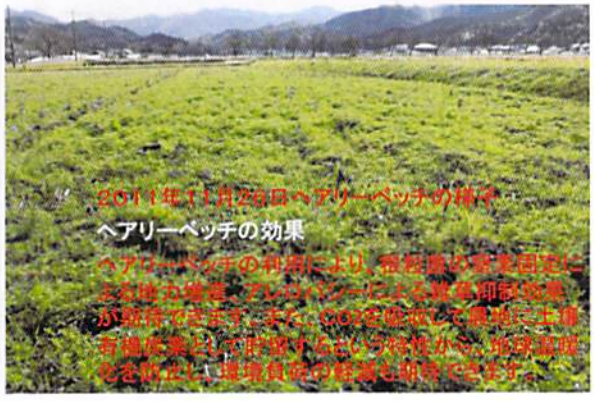
4羽 9月15日10:40 川上谷川甲山河口

J0020 9月29日15:12 出角

J0016 10月2日14:20久美浜町出角

コウノトリネット京丹後設立総会 10月2日

ヘアリーベッチ栽培講習会


2011年11月2日ヘアリーベッチの種子
ヘアリーベッチの効果
ヘアリーベッチの利用により、窒素量の窒素固定による地力増進・アレロパシーによる雑草抑制効果が期待できます。また、CO2を吸収して農地に土壌有機炭素として貯留するという特性から、地球温暖化を防止し、環境負荷の軽減も期待できます。

冬季湛水 10月12日 久美浜町市場

J0010 11月22日13:02 久美浜町谷

虹がコウノトリをひきたてます
2011年12月10日

初めて餌付け、成功
ドジョウ・カエルを40～50匹食べてくれました
2011年12月1日

カップル誕生、おめでとう！
2012年1月3日

冬期湛水田にて
2012年2月4日

柳生博さんと私たち
2012年2月9日

永留電柱での交尾
2012年4月14日

2012年5月29日

コウノトリと共生するネットワーク
京丹後通常総会
第2回コウノトリネット京丹後総会
八ベエ・コウちゃんに特別住民票交付
2012年6月16日

第2回コウノトリネット京丹後総会
鳥居名誉顧問の記念講演

2012年7月30日

2012年8月3日

木村次郎右衛門さんへ
中山市長から長寿祝い
2012年7月30日

峰山町長岡のため池
（京丹後市内に11羽目撃）
2012年9月20日

近畿農政局
水田農業視察
2012年10月4日

RiceB action
RiceB action（ライスエイトアクション）
滋賀県高島市水源地

京丹後市久美浜町市場
2012年10月10日

京丹後市久美浜町市場
2012年10月10日

ご静聴ありがとうございました

コウノトリと共生するまちづくり
ネットワーク京丹後
(略称)コウノトリネット京丹後
ホームページ
http://kounotorikyotango.blogspot.com/

## 京丹後市野間の取組

岡本　毅（野間活性化グループ）

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました岡本でございます。

この活動の説明の前に、なぜ私どもがこのような活動に取り組むのか説明します。

野間地域は丹後半島のど真ん中に位置し、野間川を経由して宇川となり日本海に注ぐ立派な川があります。我々が子どもの頃は、天然の鮎、サクラマス、鮭、ウナギが遡上していました。その川を大切にして、我々の遊び場を守ろうというのが活動の始まりです。またその時、国営農地造成の多目的ダムの計画があり、ダムが出来れば川が汚れ、我々がここに生活する意味がなくなるということで、川を守る意味も含めて活動しています。

それでは、我々の活動の説明に入ります。「天の恵みガラシャ」お米の名前です。これは我々が勝手に付けたのではなく、戦国時代にこの地に隠棲された細川ガラシャに因み、細川護熙元総理の奥様である細川佳代子さまにご足労になって命名しました。きれいな川で無農薬で育てたお米のみ、この名前を使っています。

丹後半島の最高峰太鼓山から流れ出る、一番大きな川が野間川です。その川を守る想いから５名の仲間でスタートしました。

我々は、白滝という約１ヘクタールのほ場で活動しています。そこは山に囲まれ周りに何もなく、上流にサンショウウオが生息する谷川が流れています。この地域は、かつては自然木しかありませんでしたが、昭和３０年代から造林事業が盛んに行われ、約２ヘクタールの檜林がありますが植えっ放しでほったらかしの状態です。しかし、約１０％の檜を残すことで山を再生できるのではとの想いで行っています。

この水田は約２０数年前にほ場整備が行われ、１区画が９畝から１反７畝で機械も入り、ここで無農薬の稲作を行っています。

先程も話がありましたが、無農薬栽培は雑草対策が大変です。色々と試行錯誤し、これが昨年改良した最新の機械ですが、６条植えの田植機の植付け部を取除き、ミストを添えてエアバレーションを起こしその後をチェーンで引きずる方法です。今まででは一番効果があったと思っています。チェーンの配置とエアバレーションするピッチの修正を行うことが、来年の宿題です。

写真のとおり、除草については色々な方法を行ってきました。人間は横着なもので、良い機械が出来るとそっちに流れてしまいますが、昔ながらの方法も大事だと思っています。この八反ズリは、これで１日に８反の除草作業をしていたことから名前が付いています。ボランティアの方には道具の説明も兼ねて、こういう機具も使っています。１反５畝の無農薬水稲栽培で、一番多い時には５００キログラム近く収穫しました。雑草も年々増えてくるので、これが課題です。

４年前からお米の販売を開始し、売上が５万円でした。今はようやく、５００キログラムのお米が調整するまでに完売するようになりました。いよいよ夢がかなうのかなという思いで、仲間を増やさなければ大変だと皆で話しています。

これは４年前に地域興しの事業で、細川佳代子さん並びにローマ法王の大使館に「天の恵みガラシャ」米を献上した時の様子です。細川さんは、「世界の子どもたちにワクチンを」と活動されており、ガラシャ米は１キログラムの売上に対し５０円の寄付をしています。この事に対し細川さんから感謝状をいただきました。

ガラシャ米の田植えも草刈りも草取りも大変なので、何か方法がないかという事で、以前から田植え体験の募集をして３０から４０人は来ていただいておりましたが、更に同志社大学とふるさと共援事業を３年間行い、学生に農業について深く

知っていただく取組を行っています。３年間の期間は終了しましたが、継続して３年の協定を結び現在４年目に入っています。やはり数ですね。大変な作業をお手伝いいただくことは、非常に助かります。また、お米を購入いただくお客さんとお話したところ、見たい体験したいということでどんどん来てくれるようになりました。

無農薬水稲栽培だけでは大変なので、減反する田んぼに蓮を植えてみました。そのことにより、今まで交流のなかったお茶の会とか野間を愛する会とか、地元のお年寄りの方々が我々の協力が得られるようになりました。蓮を見るお茶会が始まり、少しずつ輪が広がっていることを実感しました。

活動する白滝の周辺には、ほったらかしの植林や自然木があります。これを使って何かできないかということで、京都建築大学校の生徒に呼び掛け、間伐のボランティアの他に学生が設計したログハウスを作ろうという取組がスタートしました。山と田んぼの自然をドッキングし、自由に来てログハウスに泊まり、夜は蛍観賞をして楽しんでもらおうと動いています。設計図と模型を作り、残り僅かな資金を集めれば棟上ができる所にきています。

野間川の上流部では、子どもたちに自然の川を大切にすることを学んでもらうため、田植えや草取りの後に川の魚の生息調査を行っています。この日は運良くウナギが２匹捕れ、天然のウナギやアマゴを味わってもらい、自然を大切にする心を持ってもらう活動を年に１から２回行っています。

野間では田んぼだけでなくお寺の維持管理が大変になっています。僅か１９０人ほどの集落に二つのお寺があり、檀家数も減少しています。何とか活気を取り戻そうと先ずは花植えから始まり、京丹後市並びに京都府の支援を受け、３年前から竹藪を整備して２００本の桜を植樹しました。子どもたち、大学生、一般ボランティアを含め６００人が参加し、１０年もすれば一面に桜の花が見られることと思います。また、「お寺の大きな椎の木の下のコンサート」を行いました。プロのギタリストを含め、色々な方面から若者が参加してくれました。やはり、「呼び掛けて行動することが人を集める源である」と実感しました。

野間には、細川ガラシャ隠棲の地となった味土野という所があります。そこに行者が修行した金剛童子山という山があります。ガラシャの隠棲は行者山と深いつながりがあるようで、放置されていた登山道を整備しようと呼び掛けたところ、多くの方に参加いただきました。荒れていた道を重機も使ってボランティア作業で整備し、誰でも登れる登山道が完成しました。今年も１１月４日に記念登山を予定しています。新しい方に関わっていただけるのが非常にありがたいと感じています。

野間は、昭和３０年頃には１３００人程の人口がありましたが現在では１９０人です。我々の生きる望みは野間川であり、野間川を支えているのは山である。この山と川が大切にされれば、我々が食べていくことは可能であると思います。道は開けるものだという想いで活動しています。

このような活動を公にやり始めてまだ４，５年ですが、既に１０家族が他所から移住されています。また、我々の無農薬水稲栽培に関心を持ち、新たに２家族が農地を借りられるか、住む家はあるかと問い合わせが来ています。実は今日、今朝から２家族を案内し、午後４時からまた案内する人がお越しになります。非常に嬉しく思っています。

この野間の山と川は、我々が生活する上で大切な誇りの持てる資産であることを信じて、これからも頑張っていきたい。是非皆さんも、野間に来て体験いただければありがたいと思います。以上で終わります。どうもありがとうございました。

天の恵み
ガラシヤ
Gracia blessed from above
"GRATIA"
野間活性化グループ
岡本 毅

野間地域
日本海
野間地域

白滝圃場
野間田中地区内にある圃場
（区画整備済）
・サンショウオが生息している程の水の美しさ
（水質検査の実施）
・上流には何もない。山に囲まれ他の田畑の影響を一切受けない立地条件
（農薬・肥料など）

農薬を使わない米作
・エアバレーションチェーン除草機
ブランド化

自然栽培
無肥料・無農薬
・適時の除草作業
チェーン除草
人力除草
（こま回し、八反ズリ）
・色彩選別の実施

八反ズリ
チェーン除草機

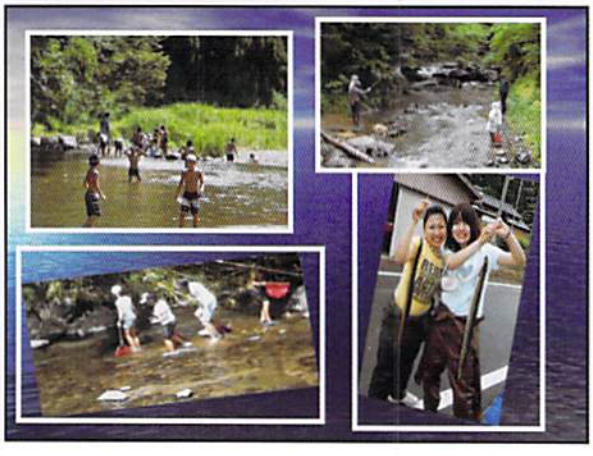
色彩選別作業

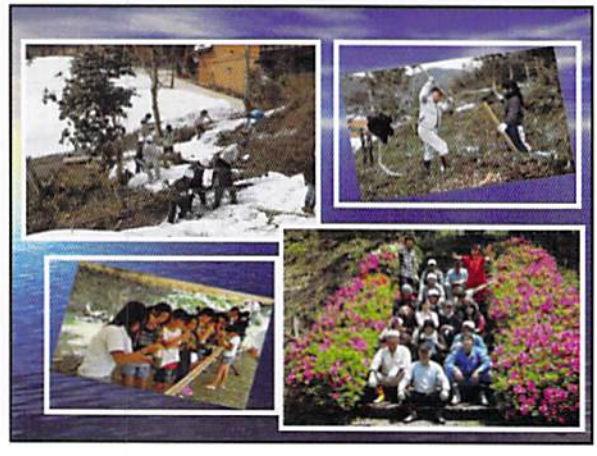
地域ブランド
付加価値向上の取組み
・細川夫人への揮毫依頼（商標登録）
・バチカン教皇への献上
・「世界の子どもにワクチンを」寄付活動
・生産から販売まで一環した取組み
・野間川の水を守りながら育む農業の実践と提唱（学習会などの開催）
自然栽培
（究極の安全・安心・美味しい）
その他の特産品の商品化展開

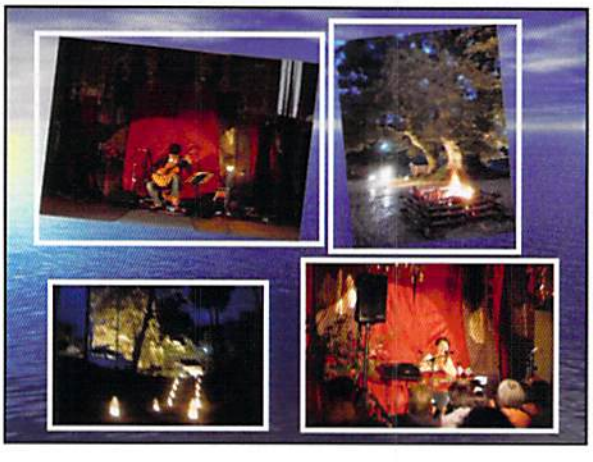
細川氏訪問
ローマ法王庁訪問

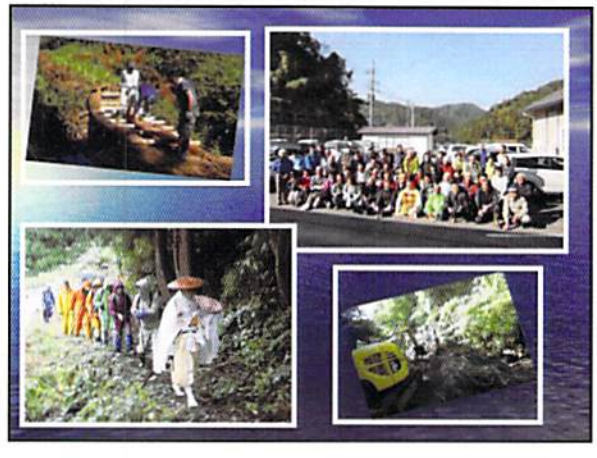
感謝状

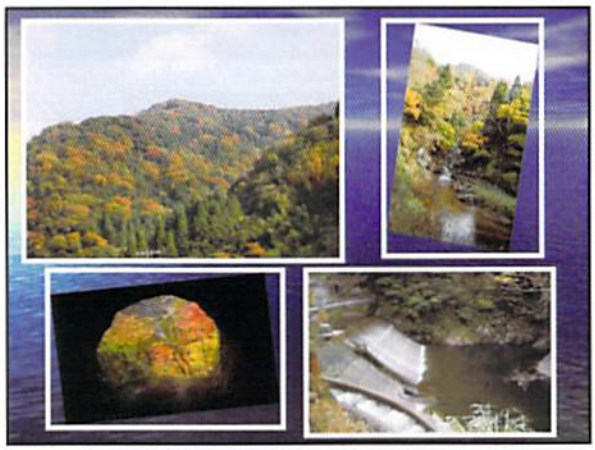
京都建築大学校(KASD)学生
による東屋の構想設計











森の恵み ⇔ 渓流・河川 ⇔ 海
人 ⇔ 人 ⇔ 人

終わり

## 伊根町新井の取組

福満　敏博（伊根と新井の千枚田を愛する会代表

伊根町新井で、棚田保全活動の代表をしております福満でございます。よろしくお願いいたします。今まで報告された方は現場で農業に携わっておられますが、私は農業には関係なく大阪で米屋を営み、お米を売るのが専門です。

我々の活動は今年で１５年目になりますが、都市部の生活者からの視点で話をします。

伊根は舟屋で有名ですが、舟屋地域から峠を一つ越えた新井地区に、伊根の千枚田という棚田があり、そこを一生懸命に耕作しているのが我々の会の活動です。新井地区の主たる産業は漁業であり、農業は自分の家で食べる程度に行われています。したがって、もっと田んぼに関わってください、と言うには難しい面があります。

会で行う田植えや稲刈りには、大阪、京都、神戸から、遠い人は東京から飛行機で、愛知県から車を飛ばして来られ、約６０～８０名に参加いただいております。活動の内容に関しましては、この場でお配りした活動報告を読んでいただければ目的や内容が書いてありますので、時間の関係上詳しいことは省略します。

ここの田んぼは、人一人が動くのが精々の幅で、昔はずーと一面に耕作されていましたが、今、会の活動で耕作しているのは１０段程度です。日々の稲作管理は地元でしていただいておりますが、代掻きから何もかもほとんどが手作業ですので、面積的には少ないですが漁業に従事された後で棚田の作業をしていただいており、何とか出来る範囲でお願いしております。

景色は日本海に面して非常に素晴らしく、ここで田植えや稲刈りができることは大変幸せであると、参加者に評価いただいております。耕作している田んぼが少ないので、この写真の角度しか綺麗な写真が撮れません。少しずれれば耕作放棄地が写りますので、どの写真を見てもこのアングルになります。

毎年参加されておられる方は、上手に作業されます。小さい頃から田植えに参加していれば、お子さんでも上手に手植えします。今年の稲刈りは、朝、激しい雨が降り、どうなるものかと心配されましたが、何とか予定時間内に終えることができました。稲木場が離れた所にあるので、刈り取った稲は軽トラックに積んで運びます。稲木掛けで自然乾燥させています。

作業後の昼食は、丹後産、地元産の食材にこだわっています。お米や地鶏はもちろんのこと、特に魚は、新井漁港に朝水揚げされた新鮮な魚やイカをバーベキューでいただきます。これがうちの会の一番の売りで、大勢の方に参加いただくセールスポイントです。

昨年、ホームページを作りました。なかなか更新出来ておりませんが、機会がありましたらご覧ください。このホームページで会員募集とか稲作作業の案内をしておりますが、アクセス数がなかなか伸びないのが課題です。

当日の稲作作業は、出来るだけ地元の方にもお手伝いいただき、２時間程度の作業時間としています。このくらいの作業時間が都市部から日帰りで来ていただく限界かと思っております。作業の後、地元産にこだわった昼食で豊かな自然の恵みを実感していただいております。以上が新井の棚田に関する１年間の活動です。

次に、都市部から関わっていてお話したいのは、活動を継続させる大変さについてです。

我々の活動は今年で１５年になりますが、１年単位の会員としており毎年案内を出して会員になっていただくのですが、これがなかなか大変です。会員は強制ではありませんし、会員でなくても参加費をお支払いいただければ作業に参加できます。会員が増加せず、活動を継続するに当たって

資金のやり繰りが大変です。今年度の会員数は５７組です。そのうち約６割が１５年前の発足時からの会員です。３割が５，６年前からの会員です。１割は、毎年案内はするが１年、２年で返事がない人です。現場の作業も大変ですが事務作業も大変で、大阪の米屋４人と京都の米屋１人の５名で、資金を何とか工夫して工面し活動が継続できるよう頑張っています。

今後を考えると一番の問題は、１５年活動していると我々も１５歳年を取り地元の方も１５歳年を取っていて、会員の高齢化と地元の高齢化が両方平行して進行している。切羽詰った時期にきていることを痛感しております。田植えや稲刈りにここ４，５年、若い家族連れやグループも見られますが、年会費１万円の会員増加になかなか繋がらない。これが一つの課題です。

都市住民である私たちの働きかけに答えて地元の方が一生懸命やっていただいている。他にはない形の棚田保全活動を行っていると思っています。別の団体とネットワークを組んで別の形の力も入れていかなければ、活動の継続は現実的に困難であると感じているところです。

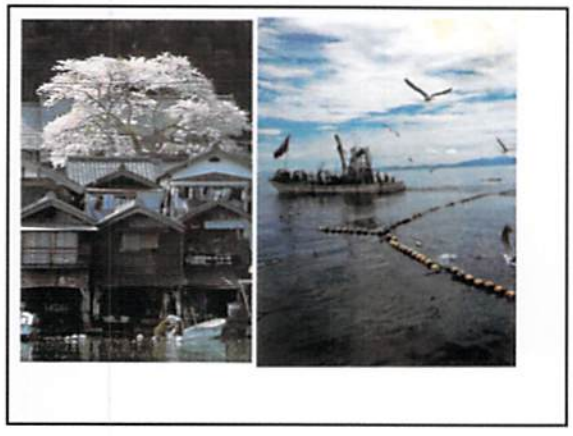
今日の資料に田植え作業と稲刈り作業の収支報告を入れておりますが、何とか実施できているのは、会員以外の方の昼食、保険料込みの参加費１，０００円の徴収と鮮魚セットの販売ですが、一番大きいのは地元から新鮮な食材を提供いただいていることです。地元のご協力に感謝し、今後も地元と共に話し合いながら活動を続けていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いします。ありがとうございました。

伊根と新井の千枚田を愛する会
1997～2012
代表 米蔵福満 店主 福満敏博
2012. 10. 28

場所の説明 1
ACCESS GUIDE
アクセスガイド

場所説明 2
このあたりです

2010.05.29 週刊現代掲載して頂きました。



これから出発です。

絶好のながめです。

なれたものです、プロ級？？

絵になります！！！

全景です

2012年の稲刈りは
早朝雨のため、ぬかるんでいました

やっぱり素人です長さが違います

乾し場に向かいます

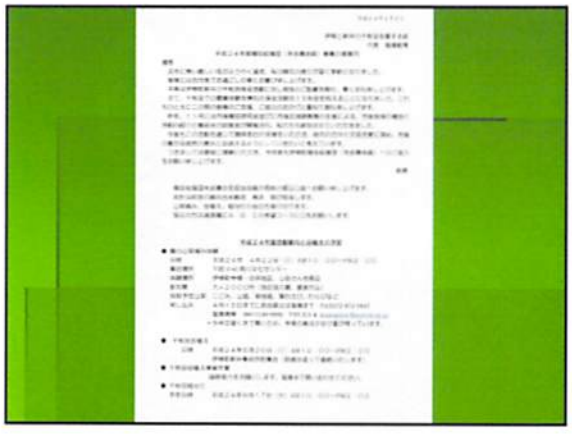
これで、美味しい天日干しが出来ます

何故か登ってみたくなります・ 作業は・・・

楽しみの昼食ですが、雨です。

田植えの時の昼食

ホームページ
http://www.senmaida.jp/ine/



- 平成24年度棚田応援団（年会費会員）募集の御案内
- 謹啓
- 近年に無い厳しい冬がようやく過ぎ桜の開花の便りが届く季節となりました。
- 皆様にはお元気でお過ごしの事とお慶び申し上げます。
- 平素は伊根町新井の千枚田保全活動に対し格別のご配慮を賜り、厚くお礼申し上げます。
- さて、千枚田での農業体験を兼ねた保全活動も15年目を向えることになりました。
- これもひとえにこの間の皆様のご支援、ご協力のおかげと重ねて御礼申し上げます。
- 昨年、11月には丹後棚田研究会並びに丹後広域振興局の主催による、丹後地域の棚田と活動の紹介と棚田米の試食会が開催され、私たちも参加させていただきました。
- 今後もこの活動を通じて関係各位の支援をいただき、地元の方々と交流を更に深め、丹後の豊かな自然の恵みと出会えるようにしていきたいと考えています。
- つきましては趣旨ご理解いただき、今年度も伊根町棚田応援団（年会費会員）へのご協力をお願い申し上げます。

- 平成２４年度活動実施内容
- 春の山菜摘み体験
- 日時　平成24年4月22日（日）ＡＭ10:00～ＰＭ２:00
- 体験場所　伊根町寺領・田坪地区、山田さん宅周辺
- 山菜こごみ、山菜、栽培菜、葉わさび、わらびなど採取
- 千枚田田植え
- 日時平成24年5月20日（日）AM10:00～PM2:00
- 千枚田田植え準備作業
- 千枚田稲刈り
- 日時　平成24年9月23日（日）AM10:00～PM2:00

1

- 応援団の活動内容
  伊根町新井の棚田での農作業体験を通じて農業や農山村に対する理解を深めるとともに、歴史的文化遺産である棚田を保全し、地域の活性化に協力する。
- 参加資格
  田植え等の農作業に参加できる方、又は精神的支援だけでも可
  体験内容田植え(5月中旬)、草刈(6月～8月)。稲刈り(9月中旬)

2

- 年会費・応募人数
  1口　年間10，000円(1家族単位1口でも可)
  100口募集予定
- 特典
  Aコース:棚田収穫米5kg＋伊根町の地酒1本
  Bコース:棚田収穫米5kg＋伊根町水揚げの鮮魚1箱
  Cコース:棚田収穫米5kg＋伊根町産農産物セット
- 更に、伊根町の行事、観光案内、特産品の情報提供致します。

3

- 募集主体
- 伊根と新井の千枚田を愛する会
- 〒547-0042大阪府大東市大野1-6-15(福満方)
- FAX 072-872-6847
- 携帯e-mai komegura-f@ezweb.ne.jp
- 共催:新井区蓬莱の里づくり推進委員会。
- 伊根町農林水産課　TEL0772-32-0505

## 京丹後市袖志の取組

堀江　亮平（袖志棚田保存会）

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました袖志棚田保存会の堀江亮平です。

今日の午前中に現地を視察いただいて、袖志の棚田はこんなところと分かっていただいたと思います。本来、すごく景色が良く売りの一つなのですが、今日は天候が悪かったので、また機会があれば訪れていただきたいと思います。

私も袖志の住民ではなく、ここで稲作を行っておりませんし、近くの町には住んでおりますが、学生時代の３年前にちょっとしたきっかけで袖志の方と知り合い休耕田が増えているというお話を聞き、大学生の力を借りて棚田再生のきっかけづくりができないかということで始めた取組です。私も地域の外の人間ですので、外の人間が取り組む棚田や農村集落の維持・活性化を見ていただければと思います。

～映像放映（ある企業のコマーシャル）～

富士ゼロックスのＣＭですが、私が活動のヒントにしています。このＣＭは、元々優秀な技術を持っているけれど見向きもされないとか厄介者になっていた男性が、一人の子供と出会い子どもが持っていたアイデアを組み合わせることで大勢の人に賞賛されることになったというＣＭで、私の活動のヒントになっています。

日本には「風土」という言葉がありますが、私は袖志の外の人間ですので「風」と思っています。「土」は地元の方々です。先ほどのＣＭではありませんが、風と土と色々な人が交流したり価値観を共有することで地域の未来が創り出せていければと思っています。今日の資料に保存会の取組が紹介されておりますので、活動のきっかけとか内容はご覧ください。この場では写真を多めに活動を紹介します。

これは袖志の航空写真です。集落が海と棚田に挟まれた形で、半農半漁の営みが行われています。袖志の棚田は、海に面した非常に綺麗な棚田です。１年の半分は海に出て、海沿いにワカメを干したりウニを採ったり漁村の営みをされています。

私がこの集落に入った時、棚田が約１３％程休耕田になっていました。集落の人の話を聞くと、棚田を守りたい思いが年々空洞化しているがそもそもの原因ではないかと。小田切徳美さんがある書籍で、「農村地域には人とか土地とか村とか色々な空洞化があるけれど跨りの空洞化が非常に重要だ」と言われており、私はすごく共感し袖志にもあてはまるのではないかと思っています。そんな袖志に学生に入っていただき少しずつですが棚田の再生を行っています。

～映像放映（田植えの状況）～

昨年の田植えですが、京阪神から学生や一般ボランティア約７０名に参加いただきました。作業に入る前に、地元の方々から田植えの方法とか袖志の歴史を毎回話していただいています。この写真の方は３年連続参加で、中には１年で止める方とか色々です。田植えや稲刈り作業の後には公民館の２階で地域の方と参加者で交流会を行っていますが、この取組を支える重要な位置づけと考えています。皆さんいい顔をしているなと。

この取組は、大学生が棚田に来たことから始まりました。参加者は年々増加しています。主には保存会のウェブサイトやフェイスブックのメモ書き、メーリングリストで募集していますが、先程の報告にありましたようにインターネットは取組を知っていただく情報基地にはなっているものの、口コミや若干のフェイスブックが情報源になっているのかなと思います。人が人を呼んで年々参加者が増えています。

一つ大切なポイントは、京丹後市内や近郊の若い人にも参加いただいていることです。私が地元の友人に声掛けして友達連がりで呼んでいること

もありますが、都市部と農村の若い人たちの交流があることです。もちろん地域のおじいちゃんとかおばあちゃんとの交流も楽しみにしていますが、同時に自分たちと同じ世代との交流も楽しみにしていると感じています。これは稲刈りの写真ですが、この人たちは京丹後市内の若者です。都市農村の枠を越えて若者たちの交流の場になっています。

もう一つ意識していますのが、外の人間がいくら頑張っても実質活動を支えているのは地域の人ですので、地域の協力者がいかに当事者になっていただくかが重要であると思います。袖志では２０１０年に学生が来ました。２０１１年には、学生が来てくれたくれたのだから何とか活動を継続しようと、地域の方が袖志棚田保存会を作られました。しかし、当時の地元参加者は５名でした。２０１２年になって我々がやらねば外に頼っているだけではダメだという声が上がり、地元会員が３０名程度に増えた。現在、集落の人口は１８０名程度なので、お年寄りや若者を考慮すれば地域の多くの方に賛同いただいています。

今年の稲刈りの時に、「棚田ガールズコレクション」を開催しました。これは地域の特に女性の方に関心を持っていただくため、棚田を舞台に農作業着のファッションショーを行ったものです。不要になった農作業着の提供を受け、女子大生や若い娘さんが思い思いに着飾り畦道を歩きました。地域の女性たちもちょっと見に行こうかと興味津々でした。この取組により地域との一体感が益々向上したと感じております。

最後に、昨日の交流会に参加して、「農村地域を継続的に維持していくためにはどうしたらよいのか」という議論になり、私なりに考えたのですが、この袖志の取組は人の意識を先ず変えようと、内面的なアプローチをしています。と言いますのも、袖志は農地面積が少なく農作物栽培にも決して適した地域ではありません。したがって、農業生産法人を立ち上げるとか大きな営農機械を導入するとかハード外発的なことをしても、効果に繋がらないと思います。地域の人がこの棚田を守りたいとか集落にずっと住んでいたいという思いが高まって、マイナスからプラスが増えた時に人々の意識が変わるのであり、それに伴い色々なネットワークとか人の繋がりが加速度的に増えていくのではないでしょうか。したがって、私たち取り組む側の人間としては、地域の方に「棚田に誇りを持っていただき集落を守っていこうという想い」を持っていただくことが、この地域の発展に繋がると思っています。

また、外部とのネットワークができても、実際どのように連携していくのか、一緒に取り組むことで現状や課題を解決できるようなアプローチになっていくのかは私にも分かりませんし、他の地区では本当に上手くできているのかなと思ったりしています。

地域の方が、少しでも自分の地域に自信と誇りを持って頑張っていこうと思っていただけるよう、私自身外の人間として頑張っていますし、これからも地域と協力して袖志の棚田を守っていければと思っています。ありがとうございました。

袖志棚田保存会の取組

# 風土

休耕田は笑顔の花が咲くステー 2012.10.28 袖志棚田保存

袖志棚田保存会の取組

交流（ヒト、環境、文化、感覚、流行）

内発的なアプローチ

協力者 → 当事者

笑顔、誇り、志向、志縁、ネットワーク

休耕田は笑顔の花が咲くステー 2012.10.28 袖志棚田保存

京丹後市袖志と棚田

休耕田は笑顔の花が咲くステー 2012.10.28 袖志棚田保存

京丹後市袖志と棚田

休耕田は笑顔の花が咲くステー 2012.10.28 袖志棚田保存

京丹後市袖志と棚田

2012.10.28 袖志棚田保存

現状・課題

自信喪失、想いの空洞化

「誇りの空洞化」（小田切,2009,p7）

・人の空洞化（人口の自然減少）
・土地の空洞化（農林地の荒廃）
・むらの空洞化（集落機能の低下）

小田切徳美『農山村再生－「限界集落」問題を超えて』岩波書店，2009

休耕田は笑顔の花が咲くステー　2012.10.28　袖志棚田保存

袖志棚田保存会の取組
きっかけは棚田にやってきた学生との交流

休耕田は笑顔の花が咲くステー　2012.10.28　袖志棚田保存

袖志棚田保存会の取組
きっかけは棚田にやってきた学生との交流

休耕田は笑顔の花が咲くステー　2012.10.28　袖志棚田保存

袖志棚田保存会の取組
きっかけは棚田にやってきた学生との交流

学生・ボランティア

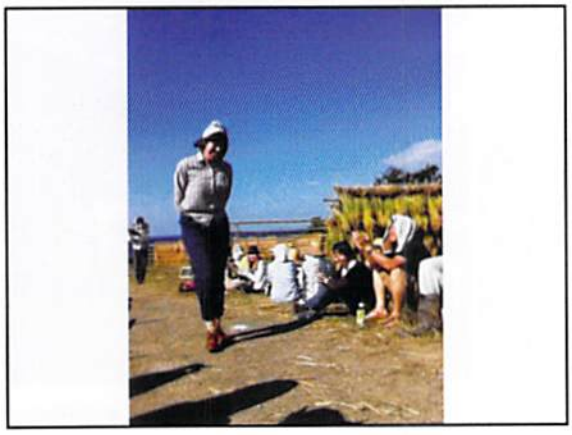
人が人を呼ぶ

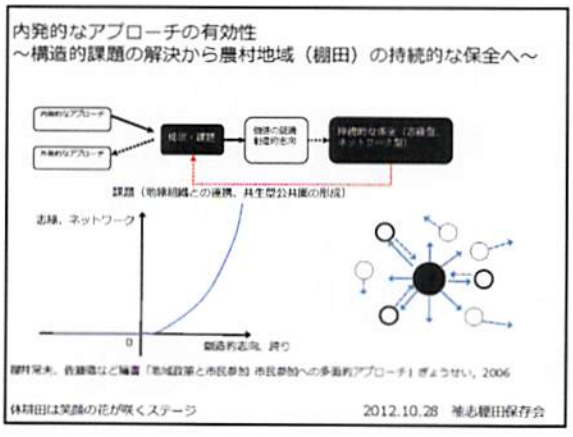
出会い、再会（ポイントは若者同士）
ウェブサイト、Facebook、メーリングリスト

休耕田は笑顔の花が咲くステー　2012.10.28　袖志棚田保存

袖志棚田保存会の取組
きっかけは棚田にやってきた学生との交流
協力者 → 当事者
地元会員制度「我々がやらねば」
袖志棚田ガールズコレクション2012（女性）
休耕田は笑顔の花が咲くステー
2012.10.28 袖志棚田保存

袖志の女性の皆さんへ
お願いです！
いらなくなった農作業着
を貸してください！




内発的なアプローチの有効性
～構造的課題の解決から農村地域（棚田）の持続的な保全へ～
課題（地縁組織との連携，共生型公共圏の形成）
志縁，ネットワーク
0
休耕田は笑顔の花が咲くステージ
2012.10.28 袖志棚田保存会

京丹後市袖志の取組
休耕田は笑顔の花が咲くステージ
2012.10.28 袖志棚田保存会

## 意見交換の記録

（中村貴子コーディネーター）

丹後地域の５つの活動について、お話いただきました。それではこれから、意見交換に入らせていただきます。

（中村均司さん）

活動報告の中で、都市農村交流を行う場合に人と人とのつながりが大事であるというお話がありましたが、今後、人を増やしていく活動の中でホームページの役割について、もう少し詳しくお聞きしたいと思います。

（福満さん：新井の取組）

私たちの活動のホームページは、昨年９月１８日に立ち上げたところです。結構な費用が掛かりましたが、この時代にホームページは必要ということで作りました。しかし、毎日見ることができず中々更新できていません。

話は変わりますが、今年、写真愛好家のグループから田植えをしたいと依頼があり、人数が多かったので会員より１週間後にずらして田植えをしていただきました。何人かは稲刈りにも来てくれるだろうという淡い期待でこちらも段取りをし案内を出しましたが、稲刈りは別の場所で写真を撮るからと来ていただけませんでした。グループで動かれる方はグループで動かれる傾向にあります。

写真を撮りに来られる方は結構ありますが、「この景色がいつまでも残ったらいいですね」とおっしゃる。言うだけでなく共に活動して欲しいと話をしていたら、昨年から１名の方が会員になって積極的に参加いただいております。

ホームページに関しては、まだ開設して１年ですので、今後色々取り組んでいきたいと思います。

（堀江さん：袖志の取組）

私は、人を増やしていくのは信頼関係だと思っています。いくら興味があってホームページを見ても、誰かも分からない所へは行き難いのではないでしょうか。例えば旅行ツアーでは、誰もが知っている旅行会社が窓口となり案内をするから知らない所へも行ける。ホームページで発信するだけで信頼を得るのは、難しいと思います。

その意味で口コミは、友だちが言っているのだから大丈夫といった、初めて参加する時から信頼関係が出来かけているので続きやすい。袖志に来る学生たちは、活動の趣旨を理解してくると「後輩を連れて来ます」と自分から言ってくれます。取組の趣旨と学生の理解がうまくリンクすれば、自然に双方がつながっていくのかなと楽観的に思っています。ホームページだけでは難しいのかなと思います。

（ジャミアン・チョダさん）

昨日、今日と報告をお聞きし、日本の農村開発において問題があるということが分かりました。棚田という地形条件があるのかも知れませんが、過疎化の進行で農地の維持が問題になっています。

堀江さんが内面的なアプローチと外面的アプローチの話をされました。外面的アプローチとしては学生たちを丹後に連れてこられています。アプローチにはお互いが信じ合うことが大切で、信じ合うには口コミが大事だと言われましたが、口コミとは具体的にどういうことでしょうか。

（堀江さん：袖志の取組）

答えになるのか分かりませんが、口コミとは、袖志に来た学生やボランティアの方が普段の生活に帰った時に、「この間、袖志に行ってきたよ。すごく良いところだったよ。人も良かったし楽しかったよ」と、一人でも多くの人に伝えていただくことと思っています。

（中村貴子コーディネーター）

他に、感じられたこととかありましたらお願いします。

（氏原さん）

自分たちの取組を、地域から外に出ている出身者の方に知らせておられますか。

（中村貴子コーディネーター）

この件に関しては、報告者皆さんから地元とか周囲の動きににについて回答をお願いします。

（井之本さん：上世屋の取組）

我々は、田んぼを借りて活動しています。地元の方だけでなく宇治とか野田川とか村を離れた方の田も借りています。借りた方には、年貢代わりのお礼に５ｋｇとか１０ｋｇのお米を送っています。そうすると必ず電話とかで返事があり「今年もわざわざ送っていただいてすみませんね」と、その時に「こんな事をやっています」とこちらの活動を伝えています。うちの田んぼを使って何か勝手にやっているのではなく、その活動で収穫できたものを送ることは所有者の方に安心していただけます。夏に所有者の方がたまたま来られて、ここの田んぼでやっていますと話をし、お互いに信頼が深まり理解し合えることも、この活動のおかげと思っています。

貸借関係以外の出身者の方へは、特に連絡しておりません。

（野村さん：コウノトリネットの取組）

コウノトリネットでホームページを運営しておりますが、フェイスブックを使って情報交換しています。昨年のことですが、１羽のコウノトリが釣針を咥えていて、これは大変なことだとコウノトリの郷公園から情報発信していただき、あちこちで捜してもらったがあくる日になってうちに帰ってきて、その時には釣針もうまいこと外れていましたが、フェイスブックとかホームページの力を感じた事例であります。

また、昨年の９月１９日から１３日にコウチャンとハチベエが越前市の方へ行っていた時も、越前新聞とか向こうの方からホームページに情報が入り、お互いにやり取りする中４日ほどで２羽がこちらに帰ってきました。コウノトリには足環が着けられていて、全国各地から足環の写真情報を送っていただくことで現在地が確認できます。永留で今年生まれた５７番（足環の番号）が那智の方にいるとか、情報が入ってきます。

先程も小西の方が、足環のないコウノトリの写真を持ってこられまして、今年誕生した中の３羽に足環が着いていませんが、そのうち１羽は見分ける特徴があるが２羽は見分けられないといった情報も毎日情報交換しています。それこそ野鳥の会も一緒になって全国的に取り組んでいます。

（福満さん：新井の取組）

新井出身の大阪の方が、１名会員になっていただいております。今年からその方の友人１名も会員になりました。今年の稲刈りにも２名の友人を連れてこられた。今後も、出身者としてこの活動に協力していただけると思っています。

今日は新井から住民の方が来ておられますので、地域の方がこの取組について思うことをお話いただきたいと思います。

（新井の住民の方）

私も農家ではなく、サラリーマンを退職してＵターンしまして、退職の少し前から、福満さんや区の役員が中心となって活動されているこの取組に仲間入りさせていただいております。

新井は漁業が中心で、農業は自分の家で食べる程度で行われており、あまり出荷されていません。近年、漁業も過疎・高齢化が進んでいますが、新井には幸い良い漁場があり何とかやっていけているので、高齢化した近隣集落の漁場も行うようになり忙しくなっています。したがって、棚田の活動は、区の役員が仕方なくやっているというのが本音ではないかと思います。それでも、区に棚田担当を４名置き、日々の水管理や草の管理を行っています。田植えや稲刈りの行事の時は区民に参加をお願いし、平均１５名程度、多い時で２０名程度の参加状況です。

区も高齢化が非常に進み若い人が少なく、８０歳代の方では棚田を歩くだけでも大変です。しか

し、私のように新井で生まれて他所で働き、また新井に帰ってきた者にとっては、この故郷の美しい景色やきれいな水で育ったお米を生活の基にしていきたいという思いがありますので、今後も福満さんたちと連携しながら区民とも相談し、出来れば学生さんの応援も得ながら少しでも復田棚田が増えるよう活動したいと思います。また、お米作りだけでなく、先程も報告されましたが景観を良くすることも考えながら、活動を充実していきたいと思います。しかしなかなか、海で働く人に応援していただき難いのが現状です。

（ニ・ニ・マウさん）

棚田にはあまり興味がないという話でしたが、漁業と棚田農業を統合的に一つのものとして捉え考えることはしていないのですか。

（新井の住民の方）

現状として、出来ていません。

（福満さん：新井の取組）

会員の特典としてA，B，Cの３つのコースを設けていますが、そのうちのBコースは新井で獲れた魚を棚田米とセットにして提供しています。

（ニ・ニ・マウさん）

以前、日本の専門化がミャンマーに来られた時に、水田で魚を飼う水田漁業を行っているとお聞きしたので、質問しました。

（堀江さん：袖志の取組）

袖志の取組では、出身者の方に情報提供を行ったりお米を送る活動は、現在行っていません。しかし、大切なことと思いますので参考にさせていただきたい。

（中村貴子コーディネーター）

氏原さん、質問された立場から何かございますか。

（氏原さん）

私が地域で活動に取り組む過程で一番思ったのは、怒田（ぬた）の土地を活用していく時、そこに居住していない出身者が所有者として大勢おられます。農地を活用し活動することをその方々に理解していただかないと、活動に結び付きません。自分たちの活動を出身者の方に理解していただくことは、今後長期的に考えると、非常に大事なことであると思っています。

具体的には、今、高知大学の市川先生たちが、怒田の活動をニュースレターにして年６回発行し、県外の兄弟とか子どもさんに送ってくださいと地域の家庭にお願いしています。併せてホームページの開設も連絡しています。その成果はまだ分かりませんが、出身者へのアプローチをどのように行うのか、重要な課題と考えています。

（中村貴子コーディネーター）

京都の場合は、京都市とか大阪市から１時間３０分から２時間程度で帰れる範囲に出身の方が多いのかと思います。そういう意味では、高知県の事情とは少し異なるのかもしれません。ですから、京都では農作業などが大変なときに何とか帰ることができる環境がありますが、高知県の場合は、おそらく作業を手伝うことは難しくてむしろ地元産品の販売を広げる支援とか、状況の違いがあり声掛けの仕方も変わるのかなと思います。どちらも大切なことであると思います。ありがとうございました。

（参加者）

先程から皆さんの報告を聞かせていただき、少し質問させていただきます。

一つ目は、コウノトリネットの組織はＮＰＯとか法人格を有しておられるのか。またその場合に、会員の費用負担をどのようにしておられるのか。活動内容をお聞きしますと大きな事業をしておられるようですので、個人の熱意でやっておられるのか予算的な措置をお聞きしたいと思います。

二つ目は、ヘアリーベッチがものすごく除草に効果があり無農薬栽培に有効とのことですが、草丈が１メートルになるので稲作の春作業の前には何か特別な作業を行っておられるのか。どのように稲作に繋がっていくのかお聞きしたいと思います。

三つ目は、野間の取組は５名でスタートされ我々の見本となる立派な活動をされておられますが、組織形態と経費的なことについてお聞きしたいと思います。

（野村さん：コウノトリネットの取組）

私たちの組織は、まだ立ち上げたところでＮＰＯは取っておりません。また経費は、自分たちのポケットマネーに頼っている状態で、私もかなりの額を見出ししています。

ヘアリーベッチは府の普及センターに指導いただき取り組みました。１０月１７日に種をまき、１０アール当たり５キログラムで１キログラム約１，３００円です。環境保全型農業の「冬期湛水」と「被覆作物のカバープロック」に該当し、１０アール当たり８，０００円の支援があります。この支援にはエコファーマーの認定が必要ですが、我々のグループは全員が認定を受けております。市場集落では、昨年２ヘクタールを作付けし、その内私は２０アールです。草丈が４０センチメートル位であればトラクターで鋤込み出来ますが、それでは面白くないということで、５月１５日から１６日に、トラクターの後ろにモア-という牧草を刈り取る装置を付けて根本５，６センチメートルの所で刈り取りました。私の場合は不耕起栽培を行っておりますので、そのまま水を張り田の表面をトロトロにして雑草を抑制しました。結果的にヒエが生えずコナギも見ることがないくらい効果がありました。来年は、作付面積を拡大したいと思っています。

（中村貴子コーディネーター）

野間の岡本さんは急用で帰られたので、三つ目の質問に対し野間の状況をご存知の方からお願いします。

（黒川さん）

私も詳しくは分かりませんが、回答させていただきます。野間活性化グループは、法人化はされておられず会費の徴収もなく、賛同する農家の方々が自分の農地で実施される形態で行われていると思います。また、現時点では５名が１０名に増えたというような増加はないと思います。

（中村貴子コーディネーター）

活発な意見交換ありがとうございました。もう一度報告いただいた方に拍手をもってお礼とさせていただきます。

# 第３部　農村地域の暮らしや棚田保全の取組、問題点等を探る

ワークショップで議論を交わす参加者の皆さん
（京都府立丹後勤労者福祉会館の会場にて）

## 棚田保全の担い手について考える

中村貴子（京都府立大学生命環境科学研究科）

中山間地域の暮らしを支える政策は数多くなされていますが、棚田農業は、どうあるべきか、誰が担うべきか、国レベルでの話し合いがもたれたことはなかったように思います。両テーマは同じものと捉えられがちですが、私は全く違うと思っています。

私が棚田と出会ったのは、1996 年のことです。生まれ・育ちが大阪市内という都市部で育った私には、棚田の存在を知る由もありませんでした。大学院生の時、有機農業を学んでいた私は、有機農業の米作りができるというだけで、大屋町（現、養父市）の棚田オーナー制に参加したのでした。棚田でなぜオーナー制を行うのか、飛び込んでから知ることになり、最初の投稿論文は棚田オーナー制に関することでした。あれから約 15 年が過ぎました。その間、棚田の保全は民間レベル・都道府県レベルでは進んできたように思いますが、国レベルでは進んでいないように思います。

年々、耕作放棄地は拡大しています。とりわけ棚田の放棄地拡大のスピードは速く、棚田農業を維持することは困難であることがわかります。しかし、棚田で作られたお米は「おいしい」とどの農家も認めていますし、棚田は農業・農村の多面的機能を最も多く発揮している場です。棚田保全について、国は「中山間地域直接支払制度」で維持していると反論するかもしれません。これは、棚田面積に応じて棚田地域の住民が 5 年間の営農計画を約束することで得ることができる助成金です。ただ、地域を保全することは要件となっていますが、棚田を維持することが必ずしも要件にはなっていません。また、個人に分配できることも本助成金の特徴であり、本人が営農をしなくても、土地の所有者というだけで助成金を得ることができる場合もあります。

棚田農業の担い手という観点からみると、例えば、棚田オーナー制で棚田を保全する取り組みもそのものが担い手といえます。しかし、棚田オーナー制度の主体組織には支援がありません。道路もよくなり、車社会にもなり、都市と農村の交流を進めることを国は推進しているにもかかわらず、棚田オーナー制のように都市住民が耕作者になる場合、あるいは農家の後継者だけれども棚田地域には暮らせない人が農作業の大変な時には手伝いに帰ってくる二地域居住のようなこと、そうした動きに対して、国は関心を示すものの、個人的な活動と捉えて、支援しようという動きにはなっていません。多面的機能を維持するためには、棚田地域の住民の暮らしを支えることも大事ですが、棚田を耕作する取組を増やすことが耕作放棄地減少の観点から大事なのではないでしょうか。

また、これまで、数年にわたり、本会が開催してきたシンポジウムでは、「棚田は教育の現場になる」ということが幾度となく、意見として出されています。実感から来る言葉です。その実態を詳細に報告することは私たち研究者の使命だと思いますが、農地所有者を支えるのではなく耕作者を支えるという考え方に国がなれば、社会の動きは変わると思います。耕作放棄者から農地を強制的に移譲することについては、農業経営者基盤強化促進法という法律で定められていますが、実際に発令されたと聞いたことがありません。法整備を実態にするには、国のリーダーシップが問われているのではないでしょうか。

現在、私は学生と一緒に棚田の担い手について考える研究を行っています。棚田を有する地域には、大きく分けて 2 パターンあると思います。いわゆる典型的な山奥に居を構える奥地集落タイプと車で 30 分以内に住宅地がある都市近郊集落タイプです。都市近郊になったのは、近年の宅地開発からくるもので、最初から都市近郊に棚田があ

ったわけではありません。このタイプが異なる地域で行っている棚田オーナー制を比較しました。奥地集落タイプでは、戸数は10数戸、高齢者のみ世帯が多いのですが、棚田の耕作には、Iターン者などの新住民があります。一方、都市近郊集落タイプでは、戸数は100戸前後あり、多世代居住や近くに後継者が住むといった集落形態をなしていますが、子息による農業後継は絶望的と聞かれました。

とりわけ奥地集落タイプでは危機感が高いので、オーナー制で保全する農地、Iターン者が保全する農地の面積割合は大きくなります。調査した地域では、その率からいえば22%となっていました。農地を貸す側も、棚田を保全してくれるなら喜んで貸すということが背景にあるからかもしれません。一方、都市近郊集落タイプでは、農業をしたいと申し出る都市住民は多く、農地を貸す調整はできるが、宅地の調整ができないため、Iターン者にはならないこと、通い農業をしているものが多いことが特徴だということがわかりました。以上のように、棚田を有する地域では、個人農家、集落営農などの組織農業者など、いわゆる農業後継者が耕作する他にも、棚田オーナーや、Iターン者、通い農業者など多様な耕作者を受け入れる地域では、棚田を維持できるのではないかと考えられました。つまり、国は多様な耕作者を受け入れる地域づくりのリーダーシップをとるような法律を整備してもよいのではないかと思うのです。棚田オーナー制は、棚田地区が多い西日本で広がりを見せています。したがって、霞が関にはあまり情報が届いておらず、そのような発想にはいたっていないのかもしれません。

京都府舞鶴市西方寺平での地元農家さんと学生を始めとする多様な棚田オーナーメンバー

これまでの棚田フォーラムを振り返って思うことは、棚田を単なる個人のノスタルジックな対象として眺めているだけではなく、有機農業の推進が法律で定められたように、棚田の景観を残すことが法律で定められるよう、私たちも本気で考え、行動しなければならない時期が来ているのではないかと思っています。景観を残すということは、静物だけでなく、生物も残すことであり、そのためには、棚田の農法を残すことだと思います。

## 丹後半島の棚田をこれからに

深町加津枝（京都大学大学院地球環境学堂）

丹後半島の棚田周辺を歩いていると、地域ごとに特徴ある水のネットワークが形成されていることがわかる。水資源は河川水、沢水、湧水と多様であり、取水地点の選択枝も広いなかで、住居地周囲には山腹斜面からの水が集まる地点が多くある。このように良質の湧水が豊富に、かつ多くの地点で得られる地域の多くが地すべり地となっている。このような地すべり地形は肥沃な土壌とともに、丹後半島の里山景観と稲作文化を支えてきた。

水資源に目を向けると、出水とよばれる湧水は、飲用、洗濯、風呂などの生活用水のほか、野菜や飲料の冷却、それに防火用水としても使われてきた。冷たくておいしい出水（でみず）が出る地点を住民は広く認識し、農作業のあいまに休息する場としていた。湧水は沢水などに比べて水温が低く、農耕には不向きである。しかし、一定の水量が年間を通して安定的に得られることから、稲刈後の田んぼに翌年のための灌水として利用している。このような湿田の周辺にはフキやワサビなどの山菜や、クロバナヒキオコシなどの薬草が多く分布した。希少種となる動植物の生息地としても重要であった。

このような地形条件は、豪雨時に土砂災害がたびたび発生する要因ともなってきた。また、丹後半島は冬季の積雪が多く、2011年にはある集落での積雪が最大2m50cmとなる豪雪となった。豪雪は人びとの暮らしに大きな影響をもたらすことから、離村や廃村の大きなきっかけともなってきた。たとえば、「三八豪雪」とよばれる1963年（昭和38年）などの豪雪は、丹後半島山間部の過疎化を大きく加速させた。

一方、このような気候・環境は、ブナが優占する広大な森林をもたらした。東北、北陸地方などの多雪地帯では、このような里山のブナ林は薪炭や用材などに利用され、地域の人たちの暮らしを支えてきた。冬期のまとまった降雪は春先の豊富な水源となって森を支え、その森の恵みが地域固有の文化の源となっていた。豪雪がもたらす森林の特性をふまえながら、持続的かつ多角的にその空間と資源を利用してきた知恵と技術があった。

地すべりや豪雪は、以上のように自然のプロセスとして時には地域に災いをもたらしたが、一方で人々の生活や産業の源となる環境や資源をもたらしてきた。災いを避けるさまざまな工夫をしながらも、自然のプロセスがもたらす恵みを最大限に活用する術をもってきたといえよう。それは、地すべり地形を読み取って集落や農地を配置することを基本にしながら、豊富な水資源が随所で安定して得られるという水環境の特質を、地域の暮らしや産業に多彩に結びつけるものであった。それは同時に、豪雪という自然がつくりだしたブナ林などの森林を賢く利用する暮らしのあり方を生み出した。それは、自然を持続的な資源として利用する知恵と技術を暮らしに結びつけるものであった。

近年、丹後半島の棚田を保全し、活用しようとする活動が、地域内外の人たち、あるいは行政の施策によって活発に行われるようになった。「草の根　棚田フォーラム　イン　丹後」では、このような動きと連動しながら、国内外に向けた発信、交流の場としての役割が期待される。それぞれの地域の農業を継続することは容易なことではない。しかしながら、棚田および一体となった集落、水系や森林から構成される里山景観を継承させてきた暮らしのあり方を、共にこれからにつなげていきたいと願っている。

## 農村開発国際会議に参加しての感想

（野間活性化グループ　岡本　毅）

このたび、上記催しにお誘いいただき感謝と御礼申し上げます。

ブータン、ミャンマー、丹後の皆さん、それぞれ条件が異なる中で、生態系、環境の保全が大切であるという思いで活動されておられる方々のお話を聞かせていただき、改めて私も頑張らなくてはと気合をいれなおしました。

私が、科学肥料、農薬を使わない作物づくりのきっかけは、ベトナム戦争で枯葉剤の空中散布後、ベトナムの人達の悲劇が始まりです。

植物、生物にとってなくてはならない水の源を汚染してしまったのです。

私たちの水の源（植林事業）において水銀系除草剤の散布が実施されたと聞いております。

水銀系（グロモキソン）は世界的問題となり製造、販売禁止となったのを記憶しております。

化学肥料、殺菌殺虫剤、除草剤がいいものだと誰もが思わないと思いますが、希釈すれば日本の法律に触れないだけで人体や環境によいとなるものはなにもない。

最近、リタイヤされた人がお米づくりが嫌で田畑に植林している方がおられるが困ったものです。

私の勝手な思いですが、圃場を整備し30パーセントの減反、酒米も農水の指定米以外は加工米とならず、個別補償制度もあまり意味がないように、水田はやはり水を張り水稲が育ってこそ圃場整備の値打ちが出るのではと思います。

「山を育て川を守り、きれいな水を海にそそぐ」を基本に仲間を増やし、持続可能な地域づくりに挑戦していきたい。

出来る者が、出来ることを、やり続けたい。

（コウノトリネット京丹後　野村重嘉）

私は２日目の報告会の参加ですが、宮津市上世屋、京丹後市袖志、それぞれの報告を聞いて地域で暮らす人が年々少なくなっていく現実、しかも高齢化して後継者が育たない現状を、私の住んでいる京丹後市川上地域と重ねて考えてみました。丹後はコシヒカリの美味しい所、連続特Ａですがそれに見合う値段がつかないのが現実、付加価値をどうつけるか地域の宝物探しだと思います。川上地域の小学校は平成２６年に海部小学校・佐野小学校３校が統合しますが、統合しても１学年１クラスと少子・高齢化の進んだ地域です。

２年前、２羽のコウノトリが飛んできました。今年は３羽の雛も巣立ちました。八べえ・コウちゃんの女神様は私たちに色々なことを教えてくれます。コウノトリは餌のある所にきます。コウノトリは大型の鳥です。一日に体重の１０分の１の動物性の餌（４００～５００ｇ）を食べます。自然界にコウノトリが暮らしていける環境を作り出す、コウノトリ野生復帰の取り組みです。人間の体は食べ物から出来ています。健康な体は、安心・安全な食べ物でなければなりません。

私たちのコウノトリと共生する郷づくりの原点です。

（夢丹後の杜　乗原　稔）

先日はありがとうございました。感想等ご報告させていただきます。

まず、当上山での報告につきまして、スライド等ご尽力くださり、ありがとうございます。おかげさまで、映像を見ながらでの説明が出来、話もスムーズに運びました。あらためて、お礼申し上げます。また、他地区の取り組みも知る事ができました。特に、ブータンの山村からの人口流出についての報告は驚くばかりでした。あらゆる所で、人間本来の営みの原点、土や水、自然との関わりがある暮らしが崩壊してきている事に危機感さえ感じました。

この棚田フォーラムが今後、人の暮らし、米を作る生き方への提案、田舎暮らしへの流れをつくっていける様なものになれば嬉しく思います。

今後とも、棚田から見つめる人の暮らし、生き方をもっと深く投げかけられ、考えさせられるものに発展されていかれる事を願ってやみません。

私達も上山の地でがんばります。今後とも、よろしくご指導ください。ありがとうございます。

（合力の会　井之本泰）

上世屋の棚田での米づくりは、明確な問題意識があった訳ではなく、行き当たりばったり。お世話になったおばあさんの娘さんから「もう田んぼのモウリ（守り）がでけんで、田んぼの草刈りだけでもしてもらえんか。」と頼まれたのがはじまりだった。根っからの調子モンのわたしは、せっかくやるんだったら、「お米を育てたい。」とつい思ってしまった。

自分一人では心もとないので、相手にしてもらえそうな知り合いに声をかけ、勝手に「合力（コウリョク）の会」を立ち上げ、無農薬で天日干しのお米づくりがはじまった。

あれから6年が過ぎた今、田んぼの枚数は15枚を数え、耕作面積は3反7畝。増えることはあっても減ることはない。しかし、それに反してはじめの勢いは年々薄れいく。そのようななか、子育ての若いお母さん方に参加してもらい、小さな棚田の田植えと稲刈りをお任せしている。

稲刈りの時、黄金色の稲穂が風で揺れ、まるで「海」のように、子どもの目に映ったのでしょうか、「泳ぎたい」と子どもの一人が叫びました。それを合図に、他の子どもたちもおぼつかない手つきで鎌を持ち刈り始めました。

その姿を見て、こうした子どもたちが大きくなっても、田植えの時の泥のヌルヌル感や、稲刈りの時の稲の匂いやジャキジャキ感を、身体のどこかに忘れずに残していてくれたと思うと、フッと肩のチカラが抜けるのです。

**（伊根と新井の千枚田を愛する会代表　福満敏博）**

丹後各地の活動について、直接話を聞く機会を持てたことは、今後にいろいろ役立てられると考えています。特に野間のガラシャ米への取り組みや協力者の拡大、そして水蓮の作付けなど課題を克服していく努力と発想には感心しました。また、袖志の活動報告ではさすがに若者のエネルギッシュな行動と SNS 等を使った参加募集の手法、その後のフォローについて参考となることが多々ありました。今回は２日目の報告会だけの参加でしたが、他の棚田も是非見学だけでなく作業にも参加したいと思います。

新井でも漁業が主で棚田作業まで手が回らないなどの課題もありますが、今まで以上に地区の人に協力していただける様な取り組みをしていかなければならないと考えています。

後継者については、各地とも抱えている問題ですが、当会においては会員（年会費１万円）の高齢化という点もあり、新たな会員獲得に向けての発信もしていかなければなりません。

それでも丹後だけでなく、棚田を残したいという仲間が各地にいることを励みに、私たちも更に活動を続けていきますので、今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

**（袖志棚田保存会　堀江亮平）**

丹後棚田フォーラムに参加し、棚田を守ることは棚田にまつわる農村集落の伝統文化、人々のくらしや想い、飛躍的にいえば人間のアイデンティティーを守り継承していくことだと感じました。今回の参加者に目をやると、丹後地域という小さな地域の中に多くの個性的な棚田とそれ集落を有する集落（熱い情熱と信念を持つ実践者）が、視野を拡げると日本全国各地さらには世界にはもちろん数多くの光が見えました。世界の農村地域の宝である棚田とその保全という光、ローカルで個性的なこの光を決して絶やさない原動機を創り上げること、自然の摂理に習うようなエコロジーでスマートな仕組みで…。次世代を担う私たちに課せられた命題だと確信しています。

（松本洋美）

宮津市職員の方、宮津にふるさと納税された方にアプローチしてみてはいかがでしょうか。

ブータンでの地方の人口減少問題は日本より深刻です。今後の彼らの取り組みに注目したいと思っています。便利な豊かな生活や子供に教育の機会を求めることは、誰にもストップ出来ません。でも、観光客はそんな地方へ行ってみたいと思っているのです。アマンホテルグループはうまく経営しているように思うのですが、めちゃくちゃ高額のホテルでもみんな喜んで行くのです。

http://luxury-collection.jp

・ブータンのアマンコラ

http://luxury-collection.jp/hotel/Amankora/

アイデアと発信力と行動力＋柔軟性←山口県の阿武町の話からでもこうでないといけないと思い込みが強い頭固い人が地方に多いような感じがします。

個人的には、一泊目の夜のお料理に感動しました。柿の天ぷら作ってみようとおもいます。

ブータンやミャンマーの人の本音、特に中国とイスラム教徒に対して聞けて良かったです。

こんなHPがあります。

・本物の食べ物ご紹介！『自然栽培［無肥料無農薬栽培］』

http://www.meshiya-hirakata.com/index.php?病と大関係！ページ後半注目してください。

・そらまめ農場

http://soramamefarm.ocnk.net

http://soramamefarm.blog69.fc2.com/blog-category-3.html

・小豆島のオリーブ園

http://www.organic-olive.jp/index.html

・室生天然酵母パン

http://www32.ocn.ne.jp/~pan/

・三田のカフェ&ギャラリー　うわのそら

http://www.uwanosora.info

・宮津エコツアー　←ここのフォーラムに参加されればよかったのにね。

http://miyazu-et.com/?p=10702

・すこっぷガーデン

https://www.facebook.com/pages/すこっぷガーデン/331707233593300

・飯尾醸造

http://iio-jozo.livedoor.biz/archives/51386000.html

https://www.facebook.com/fujisu.iiojozo

・瀬戸内ジャムガーデンのFB

https://www.facebook.com/jamsgarden

たぶん田舎で開業して成功しているところは多いと思います。棚田も大事だけど、そこの場所に人が来ないことには始まりません。大学生が手伝いに行くことも良いけど、学生は定住しません。定住する人が必要ならそれなりの発信をしないといけないと思います。

シロウトの意見なので参考にならないと思いますが書きました。

「ワークショップでの海外からの参加者」

「ブータンからの研究者」

## 意見交換の記録

（安藤さん）

棚田フォーラムが課題としているのは、この丹後の地域で棚田を盛り上げるためには、地域の人たちの生活、暮らし、村の継続性がどういう形で可能になっていくのかが問われていると、このフォーラムを通して感じてきました。

我々の草の根の農村開発国際会議は、地域の活性化について研究しており、ここのメンバーでは市川さん、辰己さん、氏原さん、私が加わっています。

大学の研究者である私たちは、東南アジア、特にマレーシア、ネパール、バングラデシュ、ブータン、ミャンマーの研究活動を行ってきました。

私は、日本の地方が抱えている問題は、袋小路に入っているのではないかと考えます。

２，３年前にセンセーショナルな本、「撤退する農村開発」や小田切先生の「空洞化理論」が出され、「地域の人々の心が空洞化している」と書かれていますが、後向きの議論に映ります。

草の根の農村開発国際会議を行ってきた私たちが考えていることは、後向きの議論ではなく積極的な展望が開かれることを考えていきたい。それには日本人だけで考えるのではなく、これまで草の根の村々と大学や研究組織、NGO などと共同研究を行ってきたラオス、ミャンマー、ブータン、バングラデシュといったアジアの中で連携して考えていく必要があります。

これらの国々は、まだまだ近代化の遠い国でありますが、持続的開発という視点からは、これらの国々は、一周遅れのトップランナーと私は考えています。これらの国々が近代化の問題を克服するとき原点に戻る必要があるという問題意識のを持ち、参加者皆さんの意見を聞いてみたいと思います。

私は大学の学部生の頃、山岳部に所属していました。山の鉄則に「山道で迷った時は迷った分岐点に戻る」というのがあり、そのため必ず赤布を打ちながらおかしいと思った時は戻ることを叩き込まれました。棚田フォーラムにもその趣旨があると思います。原点に戻りながら我々が辿っていく道を外国人の人たちの意見を介しながら辿っていきたい。その中で地域の人たちと話をしながら、お互いにどういう形で啓発されていくのか。丹後のこの２日間、いろいろな話が出されてきました。

ただ、これらのことは、ゴールがある話ではなく、具体的な解決策がなくても元気になるような軽い気持ちで考えていただきたいと思います。決してシリアスになり過ぎず、責任があるわけではないので思いつきでこんなことを行ったらよいのではと、本日、議論いただければと思っております。

例えば、この２日間で、新井の取組で福満さんがカメラマンの話をされました。田植え準備の忙しい時にカメラマンのグループから電話がかかってきて、「田植に手伝いに行って写真を撮らせて欲しい」と、人数が多く泊まる所もないので田植えを１週間ずらして来てもらい写真を撮って行かれた。普通は自分が植えた稲はその後の成長が気になるもので、福満さんから電話で収穫作業を知らせたが、カメラマンのグループは「他に綺麗な写真が撮れる所があるので行けない」と、カメラマンは棚田の景観が残ればいいのであってそれ以外のことは興味がないから対応が難しいという話をされていた。

今、「棚田とか美しい農村」と言われているところに、大きな落とし穴がある気がしています。ですから、額縁型ではなく良いアイデアを出していただき展望が開けることを、このワークショップではお願いしたいと思います。

こういう話は、ともすればシリアスになりがちですので、深町先生には、ファシリテータとして議論を和らげていただくことをお願いしたいと思います。

（深町さん）

ありがとうございました。

安藤先生には、これまでの経緯を振り返りながら今回の趣旨を話していただきました。

それでは、元気になるような方向性を大変なこともあるでしょうが未来に向かう形で、皆さんの立場からお話いただきたいと思います。

では、最初にブータンとミャンマーの方から、

この２日間にどのようなことを感じたのか自分の国の状況を踏まえながらお話いただきたいと思います。

（ジャミアン・チョダさん）

この２日間、どうもありがとうございました。

丹後で一番問題になっているのは、過疎化が進み人口が減少していることがよく分かりました。特に一番感じたことは、高齢者の方が農業を維持していかなければならない、これは本当に大変なことであると感じました。また、それと関連しますが耕作放棄田が非常に目立ちました。そのことは農業者が少ない、後継者が少ないことが影響していると思いますが、非常に悲しいことと感じました。

これらの問題は、ブータンでも、今、始まったところです。そしてブータンの方が状況が悪いと感じます。それは、日本はある程度発展した段階でこのような問題に取り組んでいる、このような状況になる前に色々なことが準備されてきた。ブータンは、発展も行わなければならない発展現在進行形の中で取り組まなければならず、日本より状況が悪いと思います。

特に私が注目したのは、日本では多くのＮＰＯが地域で活動されていることが非常に良いことだと思います。大学生などの若い世代がボランティアとして活動している、このことにＮＰＯや地方自治体が連携して尽力されていることは、とても参考になります。

特に、日本の場合は、電気とか道路といった農村インフラが完備されているが過疎化の現象が止まらない状況にある。ブータンの政府では、農村インフラが完備されれば過疎化の問題は止めることができると考えられています。

今、非常に強く考え始めていることは、どうも農村インフラだけで過疎化の進行を止めるのは難しい、他のことも考えていかなければいけないと思うようになりました。

どうもありがとうございました。

（深町さん）

ブータンからの貴重なコメントをいただきました。続いてお願いします。

（ジャミアン・ティンレイさん）

私が来日する前は、こんなにブータンと日本が似ていると思いませんでした。特に中山間地の資源がブータンと日本でよく似ています。もう一つは、出ている問題もよく似ていますが、解決策はおそらく違ったものになるのではないかと思います。

ここでは学生をボランティアで呼んできたりフォーラムを開いて考えることを解決策の一つとして行っていますが、ブータンでは開発を行っていくことで解決しようとしています。ブータンでは今、正に開発を行っている、都市と農村が大きく異なる存在になりつつあります。生業である農業や農業技術が、今はブータンでも存在しているけれども今後どうなるか分からないことを、ここに来て学びました。

日本は開発で発展しましたが、一旦消滅したコウノトリをまた復活させる取組に非常に興味を感じた。

ブータンは日本の過去であり、日本はブータンの未来である。どうもありがとうございました。

（ソナム・チョデンさん）

本当に素晴らしい体験をさせていただきました。

丹後は、何処へ行っても美しい景観ですが、祖先が汗水垂らして守ってきた農地が耕作放棄され本当に悲しいと思いました。

私の暮らす東ブータンは、首都ティンプルに移住が進んでいるがなぜ移住するのかと聞くと、都会の近代的な生活への憧れと、東ブータンは教育も遅れた地域と見られるからという理由です。

日本の農村部では、インフラが整備され学校や病院もあるけれど、やはり都会の生活への憧れやサービスがきちんと受けられることが、若者が辺ぴな田舎に帰りたくないのじゃないのかと思いました。

しかし、東京や京都では人々は忙しそうにしているが、農村部に来ると景観が美しく静かで、本当の幸せはこちらにあるのではないかと強く感じました。農村部でもっと雇用機会が増えれば都会の人も着てくれるのではないかと思いました。

どうもありがとうございました。

（深町さん）

どうもありがとうございました。ブータンの３名の方から感想をお聞きしました。

引き続きミャンマーからお願いします。

（ニ・ニ・マウさん）

この２日間参加し、丹後地域ではインフラが十分整備されているし、お年寄りが幸せに暮らしておられるように感じました。是非、ミャンマーでもお年寄りが幸せになれる状況を作っていきたいです。

私はミャンマーでニーズアセスメント（どんな必要なことがありますか）を行っています。地域における経済面、健康面、災害の問題等に取り組んでいます。特に住民が防災意識を高めるよう、森林を守ることを進めています。

もう一つ、若い人たちが村に帰る実践活動を進めています。ミャンマーの農村では経済的問題意が一番大きく、これが解決すれば人々は都会から帰って来ると思います。村から出た人はずっと都会に住みたいとは思っていないので、必ず帰ってくると思っています。

過疎の問題に対し、どのようなことが解決策になるのか言うことができません。どうもすみません。

（深町さん）

これまでブータン、ミャンマーの方から、それぞれの国の状況を踏まえ日本の農村に対する印象を話していただきました。

特に、日本の農村はインフラ整備が進んでいることを共通して感じておられる。その中で学生が来たり、高齢者が頑張っていたり、生き物に注目して活動したりと将来に繋げる元気になる源があると感じておられる。都会に比べれば農村にいる方が幸せなのでは、と言っておられました。

それでは、引き続き皆さんから、この２日間の活動を通じて元気になる方向性について感じられたことをお話願います。

（大江さん）

１日目は参加したが、２日目は所用で出られませんでした。

私は中山間直接支払制度の役員をしています。現在、農業は恵まれていない状況にあります。

私は中学を出て、すぐに跡取として農業を始めました。出稼ぎにも出ました。便利の悪い棚田での農業は、背板で下から稲を追い上げるなど本当に苦労しました。現在７５歳ですが、苦労した最後の年代と思っています。

運搬が背板から車の時代になり道路が整備され、しかし、道路が出来た途端に離村者が出た、昭和３８年豪雪で更に離村が進みました。住宅の改良、炊事場、トイレの改良にはお金がかかります。農業では収入にならず町に出る。昭和４０年代にほ場整備をしましたが、農地の整備にお金を掛けてもと、出た人も多い。

私たちはその後始末で、村を出た人たちの田が耕作放棄地にならないよう借りて耕作しています。昨年は農地災害が発生し、復旧費用の負担問題が大変でした。水路や道路は組合で負担金を支払いますが、個人の田の復旧費用は、地主が負担しなければなりません。地主は小作料が安く支払えない。耕作者が払うのか、所有者が払うのか決まらない。地主が村から出てしまい大変なことになっている。

ほ場整備で田が大きくなり機械化も図られ良いことでしたが、米価は下がり農機具に見合う収入が得られず、高齢者ばかりで、何時地域の農業が崩壊するのか分からない状況にあります。

筒川では農場づくり組織を立ち上げました。死亡等で離農された田を借りて蕎麦を作っています。今年は天候に恵まれて豊作でしたが、収穫前に猪にやられました。柵を張っても下から入り獣害被害が大変です。

ブータンの方の話を聞いて、戦後の我々に似ていると思いました。

私の地域は、今は生活も良くなってきたが若い人が帰ってこない。私も７５歳になり辞めたいが一生懸命耕作している。大変な話ばかりしてしまいました。

（本田さん）

日本の農村部が衰退している、荒廃化している、開発とか近代化は何だったのでしょうか。ブータンの幸せの国の話を聞けば、異なった豊かさとか幸せが見えるかも知れないと、（フォーラム参加の）目的の一つに思っていました。

率直に言えば、ブータンは日本の後追いをしているのかなと危惧します。結局、開発、近代化はどの国でも避けられないものなのかと、どの国でも同じなのかと、明るい展望が見出せませんでした。

しかし、このフォーラムにおいて各々の所でおっとどっこい頑張っている人がいる、その人の周りや関係なさそうな都市部の人たちが応えて動いている。そして楽しそうにやっている。ここに可能性を見出さなければしょうがないのかな。これらの活動は数パーセントに満たないが、数パーセントがあることで可能性があるのかなと。

棚田を守らねばと苦しむよりも、楽しく工夫しながらやることに希望がある。これが広がれば棚田の機能、特に必要な防災効果が守られるきっかけになるのではと思います。そもそもこれらは本来国が行うべき政策であり、過疎化が進めば公務員を配置してでも農地は守るべきである。

丹後で開催する棚田フォーラムは今回で3回目になりますが、回を重ねて感じることは、毎回同じ人が報告されますが楽しそうに活動を続けられておられ、また、一人、二人と新たな報告者も増えており明るい兆しを感じました。

（市川さん）

昨日一日、丹後半島のいろいろな取組を見させていただき、少しは希望を実感しました。

私は高知大学に勤めておりますが、大学生が入っている取組が多く、京都、大阪、神戸と近くに大学が多いせいかも知れませんが、面白い取組が色々行われています。

高知でも、氏原さんの怒田（ぬた）集落に高知大生やたまに海外の人を連れて行きます。学生を連れて行く良い点は、長年若い世代に触れていない地域の方が若い学生と触れ合う良さがあります。海外の学生を連れて行った時、「昔の良き日本の若者はこうだったんだ。言葉は通じないがお前はいい奴だ」と、見ていれば分かると言う。学生を地域に連れて行くことは、学生にとっても良いことだし地域にとっても何かが変わるきっかけになるのかなと思っています。

（松本さん）

初日から、何か暗い気持ちで聞いていました。日本の食料自給率の縮図がここにあるなと。下がったままの食料自給率ではまずいんじゃないのという気持ちで、棚田の崩壊とか高齢化の話を聞きました。

しかし、2日間で、野間やコウノトリの取組を聞いて、少し明るい気持ちになれました。やはり情熱と発想力が人を動かすと思います。野間のハスの花が咲いて面白そうだと思えたら、自腹でも人は集まると思います。イベントの起こし方とか情報発信力が必要であると思います。

（深町さん）

今日の朝ご飯の時にコウノトリの取組の話をしていて、海外でコウノトリが羽を広げたのを見てすごく感動したことがあり、コウノトリは他の鳥とは違う魅力があって、だからこそ私財を投げ打ってでも取り組まれていることが何となく分かりましたという話が出ました。そういう熱意が（この活動の源であるように思えています。）

（松本さん）

人間はそうであると思います。地域の中だけでやるのではなく、色々な人にその土地がどういうところか、来てもらわなければ分からない。それには最初の第一歩の取組が重要であり、それを発展させるのはアイデア次第だと思います。

私は棚田の重要性をよく分かりませんが、お米だけではなく、地質学や土壌学の見地からもっとその土地に合った作物あるのではないか。柔軟に考えればいいと思います。

昨年、雲南省に行きましたが、庭先にお花を植えておられる上世屋の民家の風景は、雲南省とミャンマーの国境近くの村の風景と同じでした。素朴な日本の農村の風景を見て、日常の煩わしさから潤いを求めたいという都会の人の心があります。都会から色々な人に来ていただいて、その場限りになるのかも知れませんが、その中の一人でも移り住んでみようかと野間に問い合わせがあるということは、最初の取組が良かったのではないでしょうか。

つまり、要は「人」です。

（河瀬さん）

この3日間参加してきました。

棚田とか限界集落の問題はある種日本農業の縮図であって、棚田の取組がきっかけとなって日本農業全体のことを消費者に知っていただく取っかかりになれば、道筋が見えればいいなと思い参加しました。

私たち一般の日本人が自然を思い浮かべるとき、田んぼがあって小川が流れていて魚が泳いでいる、そんな風景に心が和みいいなあという感覚

が湧いてきますが、その風景はネイチャーではなく人の手が加えられて作られています。言われてみればそのことが分かりますが、農業に携わる人以外はその認識を持っていないと思います。その点を知ってもらうことが日本の農業を国民全体の意識として守っていく一つの重要な考え方になると思いますので、その意味からも、棚田の取組はそういうことを認識していただく様々な内容が詰まっているので、その取組を基に日本の農業はどうなのかを参加者が考える取っかかりとなるため、色々な取組が発展していけば良いし、そのために何が出来るのか自分自身も考えていきたいと思っています。

（辰己さん）

私は農業も棚田も素人なので、別の観点からお話しします。

このフォーラムで、二つ学ぶことがありました。

一つ目は、京都府の農村には大学生がどんどん入っています。私の所属する山口大学は、地方にあるにもかかわらずそんなに入っていない。色々な大学が色々な地域で活躍している京都の大学の取組に、感服しました。

二つ目は、ブータンの大学の取組ですが、大学には使命があり、ブータンの大学には「地域のことをやる。弱者を助ける」ということが、当たり前に組み込まれている。山口大学はというと、「クリエイティブな人材を育てる。多面的な物事の見方ができる人、国際人を育てる」となっており、地域がほとんど入っていない。地方大学であるにもかかわらず、地域を意識する度合いが低いことを恥ずかしく思いました。

なかには、使命に書かれていても言葉だけという場合がありますが、ブータンの視点や身のこなしは、使命がきちんと先生や学生の身に染みついて活動しておられ、私たちがブータンから学ばなければならないと感じました。

（岡本さん）

城陽から参加しました。私は結婚して専業主婦ですが、生協に関わり産直運動を通して都市と農村を結ぶことをしていました。昨日現地視察した久美浜町にある川上営農組合や伊根、舞鶴の魚の関係で、丹後に訪れていました。

それぞれの地域が、本当に頑張って食料を生産されている。それに対し国の態度は余りにも冷たすぎます。国は国民の食を守る義務があるのに、自給率が上がらなくても良しとしている国の態度に、腹立たしい思いをしてきました。併せてJAのあり方も、広域合併により農民に寄り添うのではなく物を売る方に一生懸命になっているようにしか見えません。そのことは別として、生協に携わったことが私の人生に農業との関わり、食糧問題、女性問題を考えるきっかけを与えてくれました。

ここ丹後に、来て、見て、思ったことは、農村の生活の近代化により暮らしを良くする電気、ガスが整備され台所やトイレもきれいになりました。暮らしは人間の持つ当たり前の欲求であり、特に母や祖母の時代に女性たちが置かれてきた暮らしは、「昼間は父ちゃんと農作業して、一足先に帰って釜戸に火を入れてご飯を炊き、ご飯を炊きながら井戸から水を汲んでお風呂を沸かし、ご飯を食べたら片付けもそこそこにお風呂に家族が順番に入る火の番をし、自分は最後の終い風呂で誰も湯加減を見てくれる者もなく汚れた湯船にはいらなければいけない」。そんな暮らしをしてきた女性たちが、近代化によって人間らしい暮らしを手に入れることができた。そのことは、すごく良かったことであり、それを求めて都会に行きたいことも分かります。

自分が一消費者として考える時に、消費者としては生産者を応援する、ものを買う、地産地消。「身土不二（しんどふじ）」という言葉を綾部の方から教えていただいた。自分が住んでいる土地と体を分かつことは出来ないと。「身土不二」をしっかりと子供たちに教えていって、その土地で出来た物をその時期にありがたく頂く。そうして暮らせば、地域の中で色々な物が循環して繋がりが出来て一緒に暮らしていける。城陽でもありがたい農産物の恵みを消費者として頂いている。それを当たり前と思わないで、「城陽っていい所で、農業が行われていて、いい農産物があって、いい空気があって、いいよねー」と、常に発信していくのが一消費者の使命であると思います。

私の娘は、酪農家に嫁いで酪農をしています。種を蒔いて今すぐ芽吹くのではなく、私の中に落

ちた種が娘に行って芽吹き花開いていると思うと、今、大学生たちが農業を体験して理解することは、一代では大きく変わることが出来なくても、少しずつ変わっていく種蒔きになったのではないかと思います。しかし、それが追いつかないのが現実で大変なところではないでしょうか。

農村に心を寄せて、帰ったら良い所に行って見てきたよと言いたい。ブータンにもミャンマーにも行ってみたいと思いますので、遊びに行った時はよろしくお願いします。

（前野さん）

今日のワークショップだけに参加しました。世屋の棚田で活動をしています。先ほどの伊根の大江さんがおっしゃった棚田作業の苦労や維持の大変さは、よく分かります。

棚田は、その地域の生活・暮らしと結び付いています。都市との交流でよく言われますが、手作りの生活の良さ原点を忘れずに、現代の情報デジタル化社会との併用一体となった生活が求められています。手作りの良さ、先端技術の良さをうまく融合していく。

そして、それぞれの地域が同じでは面白くない。地域の歴史や文化等を踏まえて、その地域なりの活性化を行っていくことが必要であると思います。

（白石さん）

１０年前に、大阪府池田市から上宮津に移住しました。移住して地域に自分の居場所を見つけるのに最低５年、何処に行ってもすんなりと溶け込むのに１０年かかりました。上宮津で色々なことをしていて、情報が伝わって上世屋のことを知り古民家改修に携わりました。

上世屋は雪が多く、昨年は家の周囲で３．５メートルの積雪があり、道路から家までは自分で雪かきをしなければなりませんが、雪かきではなく「雪掘り」、自分の背丈より高い所に雪を放り上げる作業が必要になります。それをしなければ、家の出入りが出来ず家の中に閉じ込められます。毎年、学生が来て手伝ってくれます。非常に助かります。

棚田を守ることは、棚田に控える山や水がとても大切です。上世屋でも減農薬・無農薬の動きが出てきました。無農薬の取組をしていますが、手間がかかります。人に応援に来て欲しい。高齢者が亡くなると田が荒廃します。今後はこちらから、「上世屋にこれだけの人数が来ていただければ上世屋が守れる」という情報発信ができないか、考えている最中です。

（計さん）

私は、中国から京都大学環境学舎に留学しています。今は、上世屋で３ヶ月のインターシップをしています。私のインターシップについて紹介します。

上世屋には深刻な問題があります。高齢化、過疎化とか、地元のほとんどの方は６０歳以上で独り暮らしのお母さんたちもたくさんいます。雪が大変です。てるみさんが言っていました。息子も上世屋に住みたいけれど、仕事がなく通勤できないので岩滝で暮らしている。

しかし、少し状況が良くなってきました。３人の若い女性が、紙漉の技術で美しいカードを作って販売されている。京都から来て地元の活動をしている人もいる。子ども向けの野菜を作って、食べて、田んぼの作業は大変です。無農薬の野菜を売るのを手伝いましたが、形が悪いと売れ行きはよくありませんでした。収益を上げるよう頑張りたいです。上世屋で取り組んでいる農作物生産とか、紙漉とか、藤織りとかは協力が必要です。

上世屋のような所の農産物に対しては、政府も支援すべきと思います。今後の１０年が、上世屋にとってはすごく大切です。今６０歳の人が７０歳に、８０歳のおばあさんが９０歳になり厳しい状況があると思います。

（氏原さん）

今回のフォーラム全体を通して、幾つか述べさせていただきます。

一つは、運動論の問題です。個々の集落の取組も大切ですが、一集落では生き残ることができません。大きなエリアで考える人が必要です。それを行政に任せるのではなく、各集落の取組を結び付ける人が必要です。皆さんで協力しながら、大きな地域で考えていただきたい。

もう一つは、今回、怒田（ぬた）からたまたま私が来ている。喋るのが苦にならないからここに来ている。今回のフォーラムの活動報告でも各取組で報告者の名前が出ていますが、この人たちの

裏方にこの人たちを支援する人がいるということを、意識させることが必要です。個人名を余りにもピックアップすれば、その人が地域で浮いてしまいます。そこのところを外から関わる人は、大切に考えていただきたい。個人の後ろにどのような人たちがいるのかを、想いはかる力量が必要であると感じています。

大豊町は、昭和６０年に高知自動車道大豊インターチェンジが出来ました。当時はお祭り騒ぎで、工業団地、箱物造り、観光客に来ていただく物をたくさん作りましたが、何も来なかった。今は使っていない、壊すこともできないで困っています。高速道路の開通を地域がどのように利用するのかの視点に立った議論、インフラ整備をどこまで行うのかは、微妙な問題です。ここ丹後も京都縦貫道が出来ると聞きました。丹後がどのように対応されるのか見ていきたいと思っています。

（奥さん）

地域活動をしている立場、研究者としての立場から、学生たち若い世代が農村に入るということをどのように考えるのか、少しだけお話しします。

先程、人口の減少が大変なんだよと言っておられたので、数字で現実を見ていただきます。（タブレットで、１９５５年、１９７０年、２０００年の宮津市全体及び世屋集落の年齢構成比を見せながら説明）

宮津市の１９７０年は、若い世代が細く真ん中にくびれているのが２０～３０歳代。２０００年では、特に２０歳代がくびれており少ない。

世屋集落の年齢構成は衝撃的です。完全に逆ピラミッドになっています。８０歳代は女性ばかり、男性は早く逝ってしまわれる。こうなる前に話を進めないと、こうなってからでは遅すぎます。ブータンから来られた皆さんは、学生が大勢農村に入っていることに関心があるのでしょうが、このような状況なので入ってもらわないとどうしようもないということです。若い人に何としても来てもらわなければならない。

そこで一つ問題なのは、多くの取組はあくまで体験止まりなことです。種を蒔く、刈り取る、部分部分の体験は出来るが、本当のトータルの農村生活をきっちり学んでいるのかと言うと決してそうではない。自分たちで組織を作って、段取りして、学ぶことが必要です。農村で色々なことを体験できるのは良いことですが、大切なのはトータルの一つの流れを、そこでちゃんと自分で出来る、そういう高みまで行くことで自分自身が向上し人格が出来ていく効果がありそうだ、と思っているところです。

本当の若い人向けの体験というものは、もう一つ上のレベルできちんと出来るようになる仕組みを整備していかないと。そういう人が生計を立てて田舎に帰りたいと思っても、結局暮らしていけないと思います。その事をＮＰＯのレベルで行ってもいいけれど、もう少し深く、田舎で暮らすことをトータルで教えてくれる専門学校的なもの、田舎で暮らす全体像を若いうちに学べる仕組みが必要であると思います。

もう一つ先の話をしますと、田舎で食っていくのは結構大変です。今の日本の価値感は、大学出てそれなりの企業に就職して、ひとつの所から給料をもらう、それが一番常道と親は勧めます。しかし農村で生活するには、給料の仕事プラス色々なものを組み合わせなければ難しいと思います。しかし今は、そういうことがフリーターとか言って蔑まれていて勧められない生き方になっている気がします。

農村こそ、派遣業で「この季節はこの仕事」を積み上げて、１年間トータルで仕事が出来る、そういうことを応援してあげる仕組みを作らなければ、若い人が帰って来れない。そのへんを考える必要があると思います。

（嶋田さん）

私は、この近くの集落に生まれ育ち、努めながら農業を行ってきましたが、退職して５年が経ち色々なことに顔を出しています。このフォーラムも２日目と３日目に参加しました。

私の暮らす集落は、中山間地ではなく比較的平坦でほ場整備も行われ、山裾までトラクターも大型コンバインも入れます。しかし頑張ってこられた耕作者が高齢化し、山際から徐々に荒廃しています。いよいよこれから、たくさん作られている方が耕作出来なくなってきます。

集落は約３５０戸と大きな集落で、住宅地も出来て外部からも大勢の方が入っておられます。し

かし、地域としてのまとまりが悪く、農業を継続するには地域全体のまとまりがなければ水路や農道の維持が出来ません。それをどうしていけばいいのかを勉強させていただきたく参加しました。

話を聞いていると、いよいようちの村も危ないのかなと感じました。便利がいいので頑張ればひとりでも大きな面積を耕作出来るのですが、農家数が減れば全体の水路や農道の維持が出来ません。私の残り１０年、１５年で、どうしていったものか考えながら頑張っていこうと思いました。

（東さん）

私は、３９年間農業普及員や農政に携わり、５年前に退職しました。今は、半分は観光の仕事をし、半分は地域のリーダーをしています。

棚田は、観光資源としても丹後で重要な位置付けにあります。自然とか生活とか文化とか、丹後地域の魅力を多くの人に知ってもらい、訪れてもらい、お金を落としてもらったり定住してもらいたく仕事をしています。

ひと昔前の観光は景色中心でしたが、今は食べ物やそこの生活、伝説とか地域の魅力が必要です。この前、うちの村で祭り、梨狩り、船乗りといった体験型ツアーを行ったところ、都会から３４名の参加がありました。そのうち４名の方が、定住したいと名前や写真を送ってこられました。今までは、地域の人には地域の良さが分からなかったが、交流することで自分の地域の良さが分かってきた。訪れる人に説明するため、自分の地域の祭りや歴史を勉強することになった。

現在、久見浜湾で使われていた昔の和船や昔の衣装や農具など、地域の遺産を展示する拠点作りを検討しています。使われていない合併前の久美浜庁舎をどのように活用するか検討しています。

まだしばらくは元気なので、地域の誇りや宝を地域の人に教えていこうと頑張っています。

（深町さん）

ここまで、皆さんにご経験とかコメントを話していただきました。これらを踏まえて、農村振興を担当している行政の皆さんから、施策とか仕事に繋げる上でどのような想いを持たれたのか、個人的な想いも含めて発言をお願いします。

（黒川さん）

この３日間、私も学ぶことが多く、皆さんの発言をお聞きして私なりにこうしていきたいと思うことを話させていただきます。

ここ丹後地域も、過疎化・高齢化により農地の荒廃が進んでいます。大江さんからお話のあった中山間地域等直接支払制度のような、農地を守る制度がなければ荒廃がもっと進んでいくことを日々感じております。

また、災害復旧事業の負担金を、地主と小作どちらが支払うのかもめているという話がありましたが、棚田を復活させるため農道を作るのに、次の筆が不在地主のため同意が得られず延伸できないという事例が生じています。今後、不在地主の問題が増えてくるのではと思っています。

高知大、山口大から、丹後へはたくさんの大学生が来ているという話がありましたが、京都府の単独施策としてふるさと共援活動事業により地域と大学、ＮＰＯなどが３年間に渡って協働し地域活性化を図る取組を実施しています。地域にとって、若い学生たちと共に活動することは励みにもなり刺激にもなり、引き続き行っていきたいと思います。

また、氏原さんからお話のあったように、今、ひとつの集落では地域の再生が出来ない集落があります。こういった地域を対象に、同じく京都府の単独施策として共に育む命の里事業により、３年間に渡って複数の集落が助け合って再生する取組を支援しています。しかしこれらの事業の３年の期間では、中々地域の活性化は軌道に乗れません。従って３年間が終了した後も、活性化に向けた下地作りを継続する地区が多数あります。

次に、奥さんから、田舎暮らしをトータルで教えてくれる専門学校のようなものあればいいという話がありましたが、先月視察で訪れた日本の棚田百選に指定されている滋賀県高島市畑では、集落に移住して来られる方へ手引きを作っていて、各団体、冠婚葬祭の方法、しきたり、習わしなどが記載されており、移住者を受け入れる側としても配慮されていると感じました。

次に、氏原さんから、活動している個人をピックアップしすぎると地域で浮いてしまうという意見がありましたので、私自身注意していきたいと思います。

次に、岡本さんから紹介ありましたように、京都生協で色々な取組をされておられますので、生協とも協力していきたいと思います。

次に、松本さんから、情熱と発想力が地域を牽引しているという話がありましたが、このフォーラムの活動報告を聞きますに、まさにそのとおりであると感じました。

また、情報発信の仕方がすごく大事ですよという意見がありましたが、私自身このフォーラムの情報発信が十分に出来なかったという反省を踏まえ、今後は活かしていきたいと思います。

３日間ありがとうございました。

（川原崎さん）

私は、中山間ふるさと保全基金の活動を丹後で担当しています。

私の個人的な思いとして、学生たちにもっとボランティアで来ていただいて、彼ら自らが企画し地域と繋がっていく活動を広めていきたいと思います。単発のボランティアに終わるのではなく、それをきっかけに地域の方と繋がっていくを願います。

伊根町の獣害柵設置に来た学生たちに言ったのは、我々はボランティア行為を支援するのではなく、今後、継続して地域と繋がっていく活動の第一歩として支援していると、伝えました。そのような活動に、これからも力を入れていきたいと考えています。

（千阪さん）

宮津市役所で、国とか府の考えていることを集落末端に伝える仕事をしています。中山間地域等直接支払制度や農地・水保全管理支払交付金などを担当しています。

これらの事業要件に、５年間維持保全しなさいとありますが、地元からは「５年って無理です」と毎年言われる。しかし、そこを何とか維持していってくださいと励ましています。地元からは、この交付金が無くなれば草刈りのコストも米代では賄えないし農業が続けられないと、よく言われます。

先程お話しのありました地主と小作の関係は、非常に重要です。近年、耕作者と所有者の関係が、そろそろ限界にきているように感じます。所有者が自分の土地を知らない状況が出てきている。所有者の同意が得られず物事が進まないことが、最近目立っている。それを、公平な行政の立場としてどのようにアクセスしていけばいいのか、不安に感じています。

宮津市は過疎化が進み人口が減少しており、近畿地方で最も人口の少ない市です。最近よく思うのですが、出身者に助けてもらわないと誰に助けてもらうのか。市でも、出身者とのアクセスをどのようにするのか考えられておらず、何かを進めていかなければならないと思っています。じゃあお前が農村に帰って住めや、と言われますが、私は農業もしていないしどっぷりとコンビニライフに漬かっていますので無理です。

感想を含めお話ししました。

（深町さん）

では最後に、終わりの言葉として安藤さんからコメントをお願いします。

（安藤さん）

どうも長時間ありがとうございました。

私が当初、こういうふうになればいいなと思ったことは、思った以上に実現したような気がします。特に、今日の３時間にわたる意見交換は私自身が非常に参考となりましたし、おそらくブータンとミャンマーの方も、この意見交換で得られてことは非常に参考になったことと思います。

私自身、草の根の農村開発国際会議は４回目になりますが、この４回目の草の根の農村開発国際会議での議論は、非常に具体的なポイントがいくつか出たように思います。今までどちらかと言えば精神論的な話が多かったのですが、今回の具体策と見事に繋がってきたような気がします。今後の過疎の問題を考える上で、若い人たちを大学から呼んでくるプログラムをどういう形で発展させていくべきかという点が非常に具体的に、何をターゲットにすべきかということも今日の会議の中で見えてきましたので、是非、今日の会議の報告書に皆さんがおっしゃったことを収録させていただきたいと思います。

これからどういうふうに展開するのか分かりませんが、私自身ひとつの大きく具体的な目標ができた気がします。ありがとうございました。

そしておそらく、ブータンはシェラブッチェ大学が中心となって農村開発に取り組んでいくと

シュラブッチェ大学の学長がおっしゃっているので、その点から言えば、丹後に若い学生が来て地域を含め色々な人がコミュニケーション深めて活性化に取り組んでいる具体例とかアイデアは、シェラブッチェ大学にとって貴重な参考例になったのではと思います。ミャンマーでもやがてこのような問題が出てくるものと思われます、その時の対応への準備という意味でも大変よい勉強の機会となったことでしょう。

本当にありがとうございました。地域の方に改めてありがとうございましたと申し上げます。

（深町さん）

皆さん、本当に長い時間でしたが、あっという間の３時間で終わることが出来ました。

ありがとうございました。

## 閉会のあいさつ

中村均司　（東南アジア研究所・丹後棚田研究会）

３日間のフォーラムにご参加いただき、皆さんから貴重な御報告と御意見を、そして、連日、時間が足りないくらい熱心な議論をしていただき、ありがとうございました。

本フォーラムでは、いくつかの課題や問題が提起されました。一部をあげれば、①インフラが整備され便利になっても、人がいなくなっている日本の農村の現実、②村の伝統的な文化を守るか、村外の若者に新しい村の文化を創造してもらうか、③村の後継ぎ=外から新しい人に来てほしい、④村での商品化の取組の必要性、⑤一次産業が見直されること、山と川が大事にされること、⑥都市・農村、農村・農村の交流とネットワーク、などです。

こうした課題を参加者が共有し、現地視察と活動報告で課題の掘り下げ及び各種取組の到達段階と問題点が語られました。３日目のワークショップとまとめでは、ブータン・ミャンマーなどのアジアの国々、日本各地、丹後の参加者から「丹後はどこへ行っても美しい。それだけに放棄田は悲しい。」、「ブータンは日本の過去である。日本はブータンの未来である。」、「学生の活動が農村に刺激をもたらし、若い人と高齢者との世代間交流にも意義がある。」、「農村の暮らしをトータルに学ぶ交流や取組みを」、「情熱と発想力が人を動かす。」、「『大変だ』『辛い』などと言いながらも、どっこい頑張っている百姓根性」などの発言が続きました。

今回の棚田フォーラムのテーマである「次世代に伝えよう農のある暮らし～次の世代に伝えたいこと、残したいもの、むらの暮らしの継承･･･」に沿って、これら発言を反芻してみるとき、地域環境や村の暮らしの再発見、これら価値のむら内外の次世代への継承など具体的な意見や提案が出され、実践的で貴重な糸口が少なからず見つけられたのではないでしょうか。同時に、それらは参加者と地域への貴重なエールでもあると思います。

こうしたことから、本フォーラムは、地域をつなぎ、国をつなぎ、世代間をつなぎ、参加者の心をつなぐフォーラムになりました。これらのことは、皆さんが強調しておられた人の力（マンパワー）を醸成する上での貴重な財産にもなりうるのではないかと考えています。

また、個々の集落の取組や運動を結びつける組織の必要性、地域として広がりを持った動きを作ってほしいとの意見もありました。丹後棚田研究会は、農家・地域住民がともに考え・学び・作業することを通じて、未来へ継承していく棚田の営農と保全管理のあり方を探ると同時に、丹後の各集落の取組の交流や情報提供、集落・地域と都市の様々な人たちとの連携を支援していくこと、いわば、丹後地域の棚田営農と各集落をつなぐプラットホーム的な役割を目的にしています。具体的な活動を一層進めていきたいと考えています。

丹後で初めて開催された草の根の農村開発に関する国際会議。日本の農村の過疎問題や村での暮らしがアジアの問題としても語られ、現地の様々な活動が集落・地域やアジアを結ぶ貴重な取組であることを皆さんと確認できたフォーラムでした。

ブータン、ミャンマーの海外から、また、遠くからフォーラムに参加いただきました皆さん、本フォーラムの運営に御協力いただきました丹後地域の皆さんに御礼申し上げ、閉会のあいさつとします。

写真１．ブータンからの参加者の講演とワークショップ・まとめ

写真２．現地視察（袖志の棚田と海）

# 10月27日(土)、28日(日)、29日(月)

参加費無料

農村開発国際会議

# 草の根 棚田フォーラム イン 丹後

## 「次世代に伝えよう農のある暮らし」

次の世代に伝えたいこと、残したいもの　むらの暮らしの継承・・・

## 1日目 27日(土)　講演・全国の取組

**アジア農村の抱える問題と取組、大学の役割！**

～ブータン、ミャンマー、日本の事例から暮らしの原点と幸せなどを考える～

**日時**　10月27日(土)14：00～17：00
**場所**　与謝野町勤労者総合福祉センター「野田川わーくぱる」
**講演**　「ブータンとミャンマーの農村の現状・問題と農村開発事業、大学生の役割」
　○ジャミアン・チョダ氏(王立ブータン大学講師)
　○ジャミアン・ティンレイ氏　ソナム・チョデン氏(王立ブータン大学研究員)
　○ニ・ニ・マウ氏(ミャンマーNGOのECCDI理事)
**報告**　「全国各地の取組報告」
　○高知県大豊町の取組　○山口県阿武町の取組　○京丹後市上山の取組
**意見交換**

## 2日目 28日(日)　現地視察・丹後の活動報告

**丹後の棚田保全や環境農業の取組から！**

～丹後各地で取り組まれる活動と現地を紹介～

**◆現地視察**　9：00～14：30(宮津市上世屋「しおぎり荘」に午前9時集合)
　○宮津市上世屋の棚田、藤織り伝承交流館、合力の家
　○京丹後市袖志の棚田(日本の棚田百選)
　○京丹後市市場のコウノトリを育む環境農業
**◆活動報告と意見交換**　14：30～17：00
　場所：久美浜町農業センター(京丹後市久美浜町橋爪)
　コーディネーター：中村貴子氏(京都府立大学生命環境科学研究科講師)
　○宮津市上世屋の取組　○コウノトリネット京丹後の取組
　○京丹後市野間の取組　○伊根町新井の取組　○京丹後市袖志の取組

## 3日目 29日(月)　ワークショップ

**農村地域の暮らしや棚田保全の取組、課題点等を探る！**

**日時**　10月29日(月)9：00～12：00
**場所**　京都府立丹後勤労者福祉会館(京丹後市大宮町河辺)
ファシリテーター：深町加津枝氏(京都大学大学院地球環境学堂准教授)

**主催**：丹後・棚田研究会、京都大学東南アジア研究所
**後援**：京都府、総合地球環境学研究所、京都大学地域研究統合情報センター
　高知大学、NPO日本都市農村交流ネットワーク協会、棚田学会

**ＦＡＸ参加申込み** 地域づくり推進室 黒川 行 FAX 0772-62-4333

農村開発国際会議「草の根 棚田フォーラム イン 丹後」

# 参 加 申 込 書

**申込期限：１０月２２日(月)まで**

## 【無料貸切バスの運行】

★１日目 ２７日(土) **午前９時３０分 京都駅八条口集合**
京都駅八条口→与謝野町勤労者総合福祉センター(フォーラム会場)

★２日目 ２８日(日) **午前８時４０分 いーポート世屋しおぎり荘集合**
しおぎり荘→現地研修→久美浜町農業センター(活動報告会場)→しおぎり荘(午後７時頃到着予定)

★３日目 ２９日(月) **午後１時 京都府立丹後勤労者福祉会館(ワークショップ会場)出発**
京都府立丹後勤労者福祉会館→京都駅八条口(午後４時３０分頃到着予定)

○バスを利用される方へは、集合場所、緊急連絡先等の詳細を、別途、連絡します。

## 【会場案内】(以下３会場への参加は、事前申し込み無しでも受け付けます)

★１日目 ２７日(土) **与謝野町勤労者総合福祉センター「野田川わーくぱる」**
住所：京都府与謝郡与謝野町字四辻161番地 電話：0772-42-7711

★２日目 ２８日(日) 「現地視察」 現地を貸切バスで移動します。
「丹後の活動報告」 **久美浜町農業センター**
住所：京都府京丹後市久美浜町橋爪673番地 電話：0772-82-1138

★３日目 ２９日(月) **京都府立丹後勤労者福祉会館**
住所：京都府京丹後市大宮町河辺3355番地 電話：0772-68-0365

## 【交流会】

★１日目 ２７日(土)午後６時３０分から
場所：**いーポート世屋しおぎり荘**（宮津市上世屋238-14番地）電話0772-27-1471

★２日目 ２８日(日)午後６時３０分から
場所：**かや山の家**（与謝野町温江1401番地）電話0772-43-0860

○交流会の飲食代及び宿泊代(泊まられる方)は、参加者負担となります。(費用未定)
○フォーラム会場から交流会会場まで、往路は貸切バスを運行します。復路は各自で確保願います。

**フォーラム参加記入欄**

| | 参加項目<br>(参加される項目に○) | 送迎バス利用<br>(利用される場合○) |
|---|---|---|
| １日目 27日(土)「講演・全国の取組」 | | |
| ２日目 28日(日)「現地視察」 | | |
| 「丹後の活動報告」 | | |
| ３日目 29日(月)「ワークショップ」 | | |

**交流会参加記入欄**

| | 参加項目<br>(参加される場合○) | 送迎バス利用<br>(利用される場合○) | 交流会場に宿泊<br>(宿泊希望は○) |
|---|---|---|---|
| １日目 27日(土)「交流会」 | | | |
| ２日目 28日(日)「交流会」 | | | |

○交流会場に宿泊を希望される方は、研究会で取りまとめ申し込みます。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 申込者氏名 | | 電話番号 | |
| 住 所 | | | |

**申込みは、上記事項を記入の上、ファックス、郵送、またはメールにて送付願います。**

**【申込・問い合わせ先】**京都府丹後広域振興局 地域づくり推進室 担当：黒川、川原崎
〒627-8570 京都府京丹後市峰山町丹波855番地
TEL 0772-62-4316 FAX 0772-62-4333 E-mail t-kurokawa86@pref.kyoto.jp

## 編集後記

2013年3月18日にやっと印刷用の原稿が完成しました。昨年の第2回の会議の報告書同様、私の原稿が遅れてしまいました。そしてまたしても、編集を助けていただいている高知大学の小林智子さんに大変ご迷惑をかけることになりました。申し訳ありません。しかし、忍耐強くまっていただけたお陰で、今回も私の原稿が日の目をみることができました。ありがとうございます。

2012年10月末に開催した国際会議の報告書が年度内に印刷できるのは、報告書に寄稿していただいた著者の皆さんのご協力があったからこそです。特に、京都府丹後広域振興局農林商工部地域づくり推進室（地域活性化担当）黒川貴さんには、会議のテープおこしやまとめに全面的にご協力いただいた。海外の方の要旨、コメント、目次などについては首都大学東京・特別研究員の浅田晴久さんに忙しい時間を割いて和訳してもらいました。ありがとうございました。会議の後、半年以内で報告書を印刷できることが望外の幸せであり、高知大学の「中山間」プロジェクトには大変感謝致します。

2013年3月1日から15日にかけて、バングラデシュの大メグナ川の河口に位置するハティア島と世界でもっともまとまった広さをもつマングローブの森である世界遺産のシュンドールボンにでかけてきました。ハティ島はサイクロン常襲地であり、大河川により島が浸食されていることで有名です。地元で活動を続けるDUS（Deep Unnayan Sagstha）と京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室が「People's Centered Practice towards Harmonious Development in Asia. 6-7 March, 2013（環境と調和のとれた人を中心に置いた開発　2013年3月6−7日）」を開催しました。インド（アッサム）、ブータン、ミャンマー、ラオスから各1名、日本から約10名が、そして他の環境関連のNGO、バングラデシュ農業大学の教員、ハティア島の学校や地方行政関係者他も参加して、活発な議論が行われました。丹後の草の根の農村開発国際会議の海外版です。将来的には海外での試みと日本国内での試みを積極的に結びつけていきたいとも願っています。私たちは、過疎化、離農はアジアの国々が共通して抱える問題であるという認識をもっています。この問題を克服していくためには、謝辞でも述べたように、当事者的意識をいかに共有できるかが問題に迫る鍵になります。一国のみでの対応はどうしても袋小路に陥りやすいのは日本の事例がよく物語っています。まさに、真に「グローバル」な問題なのです。私たちは、小さな試みですが、個人が責任をもって実現させることができる範囲で草の根の交流を継続していく予定です。お互いが大切にしたい「次世代に伝えよう、農のある暮らし」を軸に交流を深めることで農村で暮らすことの意義が自覚できるようになります。報告書を一読していただければ、多少なりともこうした交流の成果を感じ取っていただけるのではないか、と自負する次第です。

東日本の復興はままならず、福島の原発問題も一向に具体的な解決の糸口が見えない状況です。この問題にも過疎と離農の問題が大きく陰を落とし始めています。こんな時だからこそ、本報告書が、中間山地の問題を自覚的に共有できる契機となれば幸いです（安藤和雄　2013年3月18日記）

**第4回 文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議−2012年10月27〜29日−**
**草の根　棚田フォーラム　イン　丹後　報告書**
発行日：2013年3月31日
ISBN：978-4-906-332-17-5
編集：安藤和雄・中村均司・市川昌広
発行：
高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト
〒783-8502 高知県南国市物部乙200　TEL:088-864-5173
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
〒606-8501 京都市左京区下阿達町46　TEL：075−753-7334（安藤研究室気付）、7335（直通）

**The Forth International Meeting on an Alternative Grass-root International workshop on Grass-root Rural Development with Thinking as Important in Culture, History and Ecology: Rice Terraces Forum in Tango from 27th to "29th, Oct.2012.**

**Contents**

Sharing the Senses of Ownership: In place of Acknowledgment (Kazuo Ando)

Welcome address (Satoshi Azuma)

Opening Speech by organizer (Hitoshi Nakamura)

**Session 1: Lectures & Activity reports**

**Lectures***

Migration and Depopulation Scenario in Bhutan: Case Study of Khaling (*gewog*) under Trashigang District, Eastern Bhutan (Jamyang Choda) · · · 1

The Role of Sherubtse College Students in Rural Development in Bhutan (Jamyang Thinley, Sonam Choden) · · · 7

Involvement of Ecosystem Conservation and Community Development Initiative in the Rural Development Projects implemented in Myanmar (Ni Ni Maw) · · · 12

**Activity reports**

Commodification of mountain areas: A case study in Otoyo town in Kochi prefecture (Manabu Ujihara) 18

Education for university students and landscape of Nuta (Masahiro Ichikawa) · · · 22

Alternative value from disadvantaged area: Toward the standard of Abu town in Yamaguchi prefecture (Kazuko Tatsumi) · · · 27

Activity in Ueyama, Kyotango city (Minoru Kuwahara) · · · 34

Record of discussions · · · 41

**Session 2: Study tour and Activity reports in Tango**

**Activity reports in Tango**

Activity in Kamiseya, Miyazu city (Toru Inomoto) · · · 43

Activity in foster stork net Kyotango (Sigeyoshi Nomura) · · · 46

Activity in Noma, Kyotango city (Tsuyosi Okamoto) · · · 55

Activity in Nii, Ine town (Toshihiro Fukumitsu) · · · 61

Activity in Sodeshi, Kyotango city (Ryohei Horie) · · · 70

Record of discussions · · · 76

**Session 3: Workshop on "conservation efforts by exploring life in rural area and challenging points"**

**Yell for participants and rural area**

Consideration of the people responsible for rice terrace field conservation (Takako Nakamura) · · · 80

Rice Terrace field in Tango peninsular for future (Katsue Fukamachi) · · · 82

Opinions from participants (Tsuyoshi Okamoto , Shigeyoshi Nomura , Minoru Kuwahara , Tooru Inomoto , Toshihiro Hukumitsu , Ryouhei Horie ,Hiromi Matsumoto ) · · · 83

Record of discussions · · · 87

Closing speech by organizer (Hitoshi Nakamura) · · · 97

Progmram of International Meeting and Study Tour · · · 99

Editorial note (Kazuo Ando)

Note* : The comment on the workshop and study tour in Japan is given after the lecture papers. The Japanese abstracts of the lecture and comment are prepared by Haruhisa Asada.

京都府南丹市美山町知井地区佐々里の道路沿い。停電の原因となる雪の重みでたわんだ電線と植林された杉の枝々　(2012 年 12 月 22 日)

表紙写真

上：宮津市上世屋の棚田と集落
下左：京丹後市袖志の棚田
下右：袖志での参加者の記念撮影
(写真はすべて安藤撮影)

**発行：**
**高知大学自然科学系農学部門「中山間」プロジェクト**
〒783-8502 高知県南国市物部乙 200 TEL:088-864-5173
http://chusankan.sub.jp/wp/
**京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室**
〒606 - 8501 京都市左京区下阿達町 46 TEL:075-753-7334
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
ISBN: 978-4-906332-17-5
発行日：2013 年 3 月 31 日